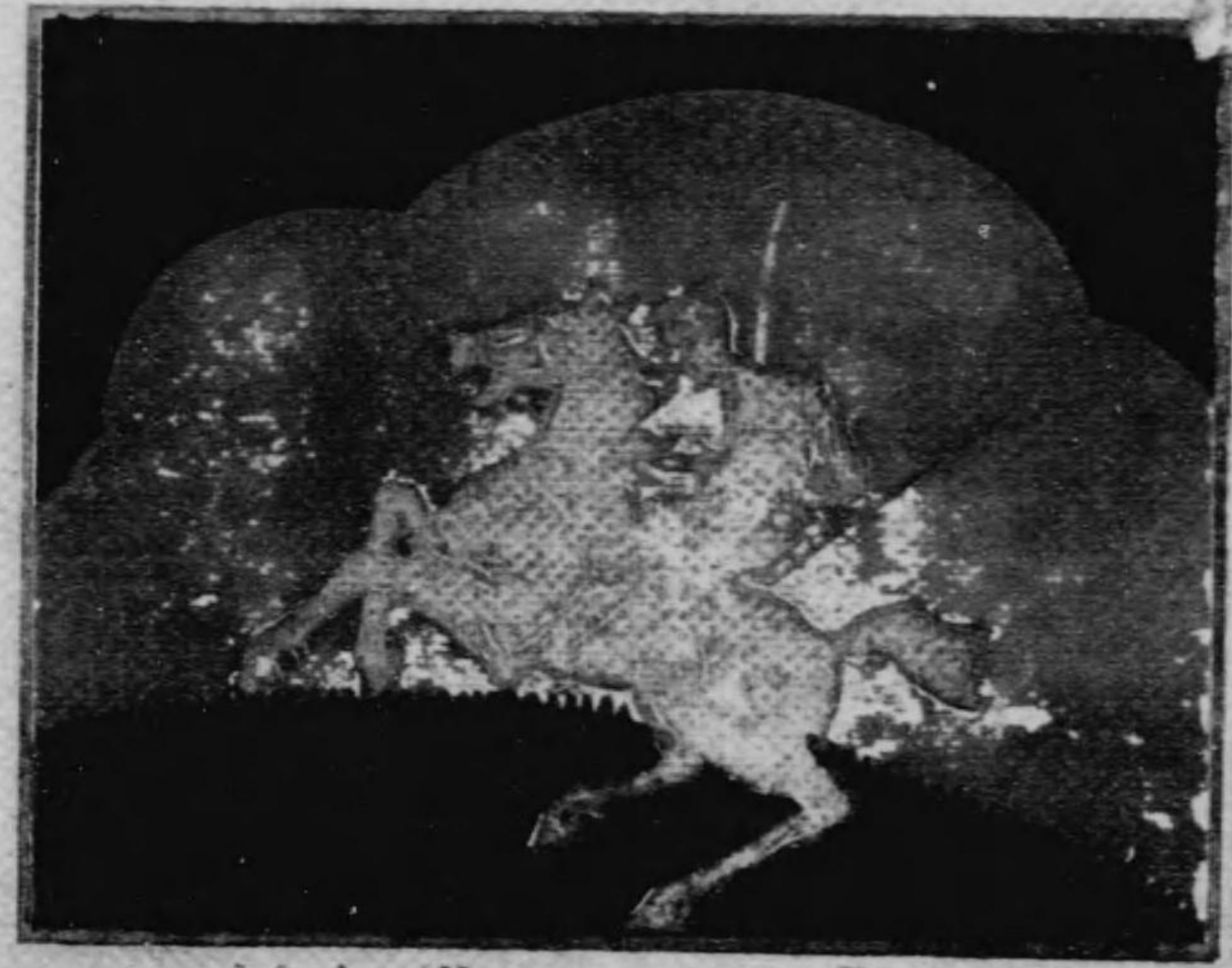
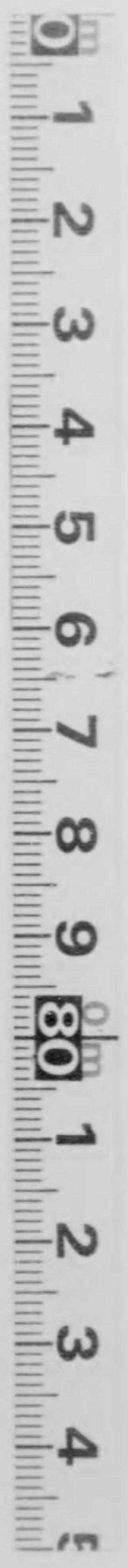


376
180



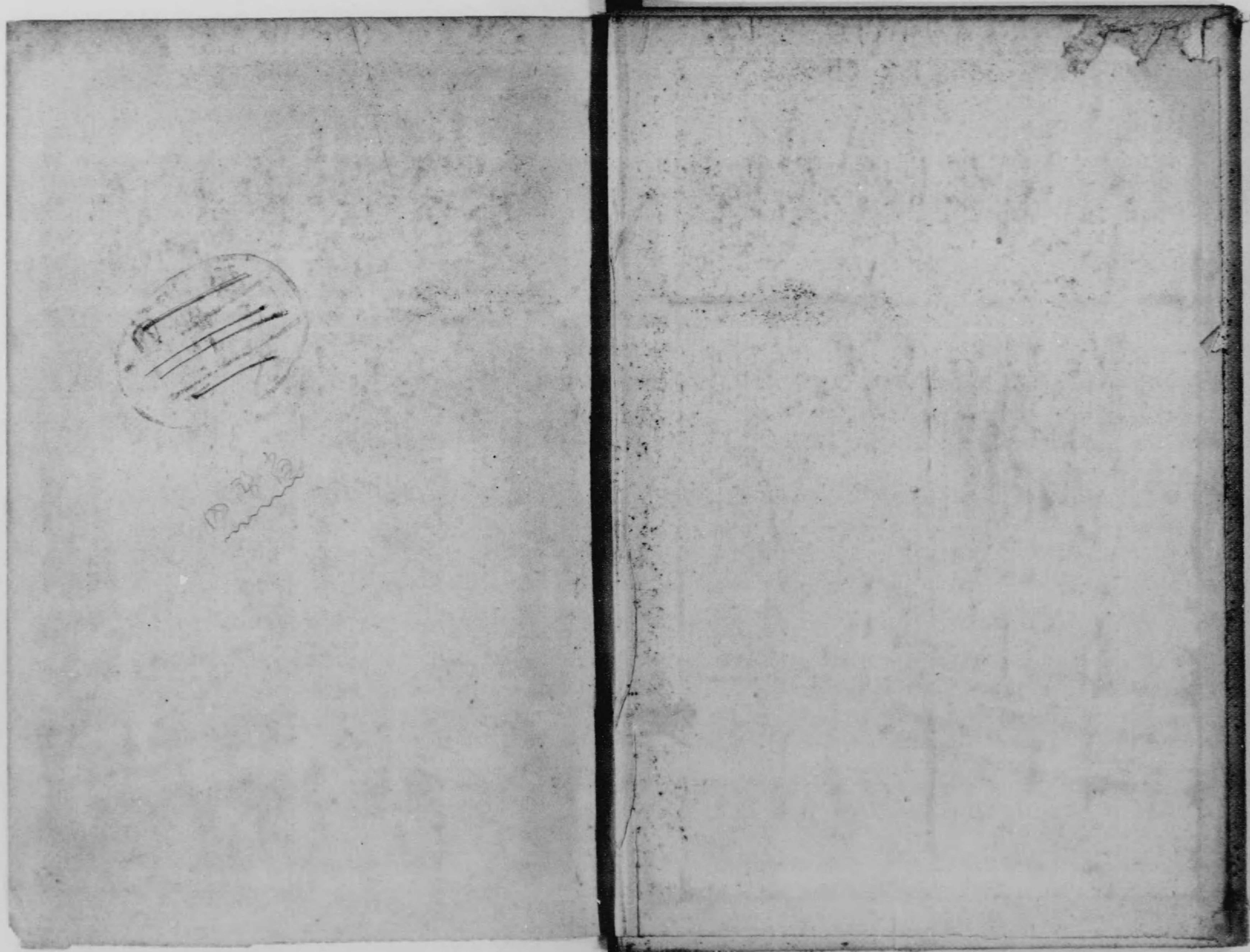
機危の國帝

來 戰 大



始





376-180

無名將軍著

帝國の危機

大戦來

大正 7. 8. 12 内交

東京

會社 小西書店

序

戦後の日本は何うなるか、また何うすれば良いかといふ問題は、吾等日本國民のお互に片時も念頭を去る能はざる重大問題である。否戦後どころか既に現在に於て吾等は何うなるか、何うして良いかといふ事すら解らなくつて迷つてゐるではないか。然り歐洲大戦は展開されて舞臺は最早我東洋の地に移つて來た。我輩は現大戦が一時平和の状態に還つて東洋大戦になるのか、それとも此儘東洋大戦にな

るかに就て頗る迷つてゐる。而して例へ歐洲大戰が東漸せずして平和に成つた所で、それは僅かの一時であらう、人は多く戦後彼等がその創痍を癒せんがため我東洋の地に於て席捲し激烈なる經濟戦を挑むだらうといつてゐるが、然し我輩は此の經濟戦が繼ては鐵火の戦ではあるまいかと信ずる、何故かなれば何の戦争にした所で經濟の擴充が目的でない戦争はないからである。單にそれ許りではない、我國は年々増加する七十萬の人口を養ふ可き領土が已に狹隘を告げてゐる、此の増加する人口の處置を如何するか、其

發展する所は南か北かの二方面のみである。而して其二方面も南は米國が嚴然として睨みつめてゐる。北は列強が創痍の療養所として飢えたる狼のやうに構へてゐる。所詮我等は國防といひ、經濟といひ行詰つてゐるのである。此等眼前に横はつてゐる大障害物を切り開くには、平和手段の巧妙なる外交政策に因るか、或は鐵血手段の優秀なる軍事政策に因るか二つに一つでなければならぬ。英の提督ネルソンは曰つた「英國の外交は海軍に在り」と外交の後には優秀なる軍隊がなければ何の權威もないことは歴史の強く證明

四
する所である。平和か鐵血か、興國か滅亡か、我輩は我國の前途を思ふて「大戦來」を叫ばざるを得ないのである。

大正七年仲夏

無名將軍稿

帝國の大戦來目次

極東の大危機

日本出兵の急務……………一頁

白禍の襲來……………四

獨禍東漸……………六

印度の大危機

一 印度の革命は先天性を帯ぶ……………一

二 英國の羈絆を脱せんとす……………三

三 印度は到底獨立する能はず……………四

四 印度革命陰謀の現状……………五

五 歐洲大戦と印度の陰謀……………七

六 ガーター派……………八

獨逸と印度革命……………一九

目次

一

獨逸開戦の目的は大牟印度に在り……………二二

伯林より印度まで……………二五

波斯に於ける獨の暗中飛躍……………二九

露獨の講和と印度の危機愈々逼る……………三三

日本は終に爆彈上に置れたり……………三四

回教徒煽動……………三六

獨兵の高加索上陸、愈々東洋政策復活さる……………三九

日米の衝突

米國露西亞に秋波を送る……………四三

米人の西伯利發展……………四五

米國の極東に對する大野心……………四八

露國革命後の米國の活躍……………五〇

米國政府の日本出兵拒絶説……………五五

米國の對支政策……………五七

米國の對日怨恨……………六三

一 米國の太平洋降服……………六三

二 東半球の一角……………六六

三 太平洋の存在を忘る……………六九

四 日清日露戦役と米國……………七二

五 米國の大損失……………七五

六 洋上の退却……………七七

七 終に日本の勝利たらむ……………八〇

支那問題と日米衝突點……………八三

日米は到底相容れず……………八六

米人の認むる日米協約の價值……………八九

日本の優先權とは何ぞ……………九一

米人の見たる日本の對支政策……………九三

大體なる多交政策あるのみ……………九三

米國參戰の眞目的……………九五

一 モンロー主義の擴張……………九五

二 汎米政策……………一〇一

三 英米協商の必要……………一〇五

四 支那問題と日米の衝突……………一〇八

五 英米獨は親近す可し……………一一〇

六 米國と白耳義の中立……………一一二

七 英米の海上協約……………一一三

八 英米協商を希望す……………一一七

果然米國は帝國主義也……………一二〇

米國の軍備擴張熱……………一二七

國防充實準備……………一二七

層に睡して見る可き米國の海洋自由論……………一三二

日英間の諸問題

英國の對亞細亞政策……………一三七

一 露佛兩國との對抗……………一三七

二 日英同盟の成立と英獨の反感……………一四四

三 日英條約改正の眞意……………一四八

四 英國の領土侵略觀念……………一四九

五 戦後の英國と我が外交の目標……………一五二

日英同盟の價值……………一五五

一 日英同盟の由來……………一五五

二 日英對支關係……………一六〇

三 植民地の排日的氣分……………一六八

四 日英同盟の目的の消滅……………一七一

五 結 論……………一七三

戦後英國の國防問題……………一七五

一 英國の國防問題は要するに海軍問題なり……………一七七

二 陸上の防備……………一八二

三 平和の時代も大陸に参與せよ……………一八四

四 徴兵制度を論ず……………一八八

聯合軍不振の大原因……………一九二

戦後の我が国防問題

戦後の國防……………二〇一

一 大戦の教訓……………二〇一

二 國民皆兵主義……………二〇五

三 精兵にして多數なれ……………二〇六

四 世界は縮少されたり……………二〇八

五 戦禍東より起らん……………二一一

六 如何に大なるも軍費は國を亡さず……………二一三

七 我が徴兵制度……………二一六

八 我が軍制の缺陷……………二二〇

我が海上の防備……………二二三

一 將來の日本とその軍備……………二二三

二 我國の海上防備……………二二六

三 結 論……………二三六

大戦来る(一)……………二三九

大戦来る(二)……………二四二

大戦と講和問題……………二四七

我が占領地帯の處分法

南洋諸島の處分……………二五一

一 永久的占領の主張……………二五一

二 日米衝突の禍機……………二五二

我帝國の四大關門……………二五六

南洋の防備……………二五六

太平洋に於ける米國の防備と攻勢力……………二五七

軍國主義を高唱す

極東の大危機

目次

八

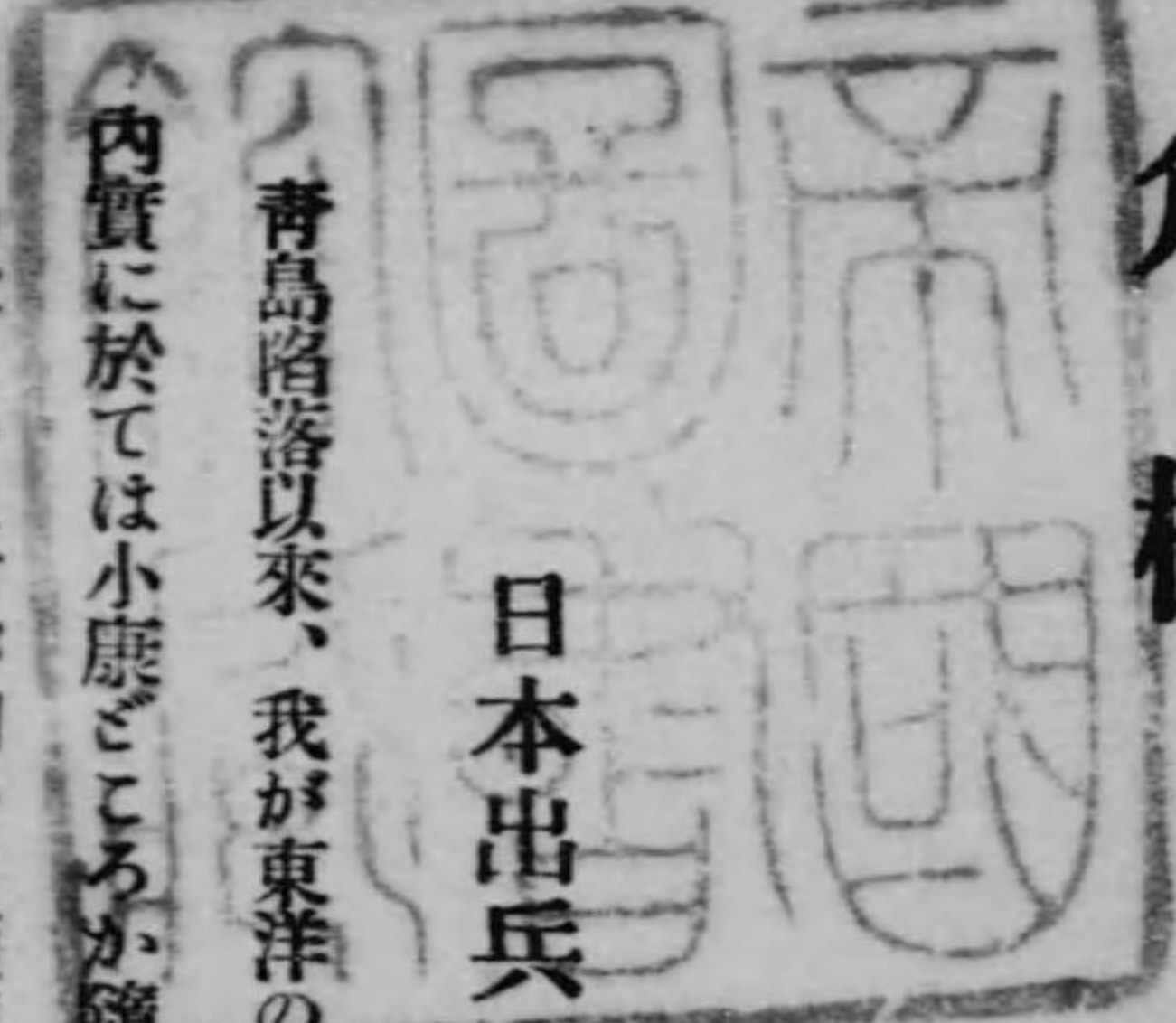
軍國主義	二六一
一 平和の二原則	二六一
二 軍國主義は自衛か侵略か	二六三
三 軍國主義としての亞細亞モンロー主義	二六六
正に此時(神の親しき囁)	二六九

目次終

帝國の 危機の大戦來

日本出兵の急務

無名將軍著



青島陥落以來、我が東洋の天地は、その表面的に於てこそ稍々小康の状態を保てゐたやうだが、内實に於ては小康どころか、随分氣遣はしい状態であつた。否寧ろ危機は日一日より漸次に増大してゐたといふ方が却つて適切であつたかも知れぬ。それは隣國支那の参戦や、或は米國の参戦、其他我海軍の地中海遠征等、又は彼我特別使節の交換等を熟考したならば個中の消息を窺ひ知ることが能きであらう。

然るに一朝露國レーニン政府の背信的講和成立するや、忽ちにしてこの表面的小康は破れて、

世は一齊に極東の大危機を叫ぶやうになつたことは天下周知のことである。就中佛蘭西の如きは、頻りに日本の西伯利亞出兵を説いて、極東平和の維持と獨軍西部戦場の勢力を牽制するのは、聯合國としての日本の責任である。とまで力説するに至つた。殊に佛國外相ビション氏は「日本の使命は獨逸の露領亞細亞占領を不可能ならしめし時に於て初めて完成せらる可し」と高唱してゐる。タンマタン、エコード、パリ、オーロラ、ファイガーロ等同國の大新聞は悉く筆を揃へて出兵を促がしてゐる有様である。佛蘭西のみならず英國に於ても倫敦タイムズ、デーリ、メール、グローブ、デーリ、クロニクル、モーニング、ポスト等の大新聞は勿論、多くの政治家特に軍人連は日本出兵を從憑してゐる。斯の如く我聯合國の大部分が、我が日本出兵を懇望してゐるに拘らず、我國當路者が逡巡躊躇に日を送つて未だに煮え切らぬ態度をとつてゐるのは何うした理由か、或者の説によると日本の西伯利出兵に就ては、米國が反對であるからだ、少くとも米國が喜ばないからだといふことだが、之は我日本政府乃至國民を侮辱するの甚しいものといはねばならぬ、何故かなれば我日本の出兵するに否とは、特に斯の如き場合に限りては日本の勝手であるからである。而かも日米兩國間の出兵問題に付て特に米國の承諾を得云々など不見識の條約は、絶對にあ

る可き筈がないからである。寧ろ之を極端にいふと「日本は出兵したが如何した」といつて、米國に對つて啖呵を切つた所が、米國としては文句のいふ可き筋はないのである。況んや米國は我聯合國として互に獨逸を滅ぼす可く締盟の約を結んでゐる國柄ではないか。獨福東漸して極東の平和破れるのを看過しやうとする横着者でもなければまだ愚物でもあるまい。そこで我輩は日本出兵に米國が反對するのは（若し反對するとすれば）それは米國自身西伯利に對して或る種の野心があるからだを斷言するに躊躇せぬ。否我輩は之を容すとするも論理が承知すまい。若し米國が極東に對して恣んな野心でもあるとすれば、それこそ極東は益々大危機に迫まられてゐる事になる。がしかし米國のやうな平和正義人道を以て國是としてゐる國が、そんな野望を抱かう筈は斷じてない筈である。それでは何うして日本の出兵問題は未だに解決がつかないかといふ問題に歸着するのである。言を換へていへば日本國民が極東の危機一髪を容れざる時期なるにも拘らず之を雲煙過眼視し舉國一致自ら進んで解決しやうと力めないからである。我輩は本問題に付ては後章に詳しく述ぶるとして、此には唯これだけの結論を提示するに止めて、尙一層進んで極東の危機を詳述しやう。

白禍の襲來

我輩が茲に極東の大危機といふのは、必ず現歐洲戰爭に於ける獨禍の東漸即ち露國の獨逸化を以てのみいふのではない。

我國民の大部分は、獨禍東漸し或は這般の戰爭に於て若し敵國が勝つたならばといふことを豫想して、我東洋の危機。我日本帝國の危殆と叫んでゐるやうだが、勿論それもある。然し我輩等が痛切に感じまたお互に警戒する所あらねばならぬのは、現戰爭の勝敗よりも寧ろ戦後の大危機である。戦後の大危機とは何であるか、いふまでもなく白禍の襲來である。白哲人種の東洋襲來である。見よ叔姪の親は親子の親に及ばず、黄色人種の相互の親しみは黄白人種の親みよりも強大なのは自然の理である。今日こそ獨逸の軍國主義滅亡等といつてゐるが、歐洲の強國はお互に親類同士の間柄である、若し一朝彼等にして骨肉相喰むの愚なるを自覺し、遙かに東方を指して馬首を回らし鞭を擧げて捲來したならば何うであらう、之或は我輩の杞憂かも知れぬ夢想かも知れぬ。或は恐白病かも知れぬ。しかも歴史は彼のカイゼルが黃禍論を叫んだのと同様に大亞細亞

主義、亞細亞モンロー主義が多くの人々によつて高唱されつつある所を見ると我輩一人の杞憂にあらず、夢想にあらず、恐白病ではないやうである。それかあらぬか隱忍七年の長きに及べりといつて飽まで仇敵獨逸を滅ばさねばならぬと憤激した露帝は、その大革命の際、左右を顧みて「若し我國民が革命等起すやうのことあれば、獨逸の兵をベトログラードに入れて之に當らしめやう」といつたといはれてゐる。之にはさすが親獨系の關係も呆然として言葉が出でなかつたさうだが一事が萬事十人十色明日の事すら計り知ることの出来ない我等の淺薄なる智識は、這般の真相に付ては何ともいへないのである。

英國が今回の大戰に於て「白耳義のために起つ」といつたのに對して、同國文豪バーナード、シヨールは「英國が白耳義のために起つなどといふのは男らしくない、英國は英國のために起つたのだ、戦ふのだと何故男らしくいはないだらうか」と罵倒したことがあつたが、さすがはシヨールである。實際戰爭の目的や名分やは「勝てば是官、敗くれば是賊」で正義に及向ふ敵はないかも知れないが、世事多くは理論を遠かり勝ちである。況んや今日の道德の標準といふものは、悉く國家を基礎として割り出されてゐる。即ち國家世界といふ順序で吾等は道德的向上をし、また制

裁も受けねばならない、従つて極端な平和主義や博愛主義は今日の國家組織からは兩立することは困難である。故に國際間の義侠は身を乞はして仁をなす程の大犠牲を拂ふことは到底望む可くもない。畢竟英國は英國のために戦ひ、獨逸は獨逸のために戦ひ、佛國然り米國然りである。英國が英國のために戦ひ、獨逸が獨逸のために戦ふといふことは、今一步進んでいへば、或は之を積極的にいふならば英國は英國の發展すべきに發展せんと試み、獨逸は獨逸の利益を認むることゝに於て進むといふ意味である。故に若し東洋の諸國が互に相警むることなく、少しでも缺陷があつたならば白禍の襲來は理の當然である。而して東洋の現状を見れば、老大國支那は南北相争ひ常に兵火の災絶えない有様であつて、その平和の維持は一つに懸つて我が帝國の雙肩にあるのである。而かも我國の西伯利出兵問題に對する状態のやうでは實に戦後の東洋は如何なるであらうかと考ふる時には、箭も楯もたまらないやうになる。我輩が極東の危機を叫ぶのは即ち兇んな事情であるからである。

獨 禍 東 漸

戦後の將來はいはず、先づ現戦中に於て極東問題が何うなるかに就て少しく述べて見やう。現戦時中に於ける極東の難問題は露西亞の獨化及び西伯利に於ける獨逸勢力の發展と、印度方面の獨化東漸と、支那の政争問題と米國の極東に於ける大野心との五つに此を大別することが能きる先づ順序として露西亞の獨逸化から述べやう。

今日の露西亞は、最早國としての威力も權威もない。其或る一派が敵國に使喚せられて勝手に休戦してゐるかと思へば、軍隊は軍隊で敵國の軍隊と手を握り、獨逸の甘言に誘惑せられつつあるかと思つたら、最早とり返しのかね盟獨講和となつて了まつた。而かも敵に國を賣らんとする一派の輩は無智文盲なる多數の國民に向つて、貴族や富豪や乃至は舊皇室の土地財産を悉く沒收して、之を無償で分配して遣るといふやうな、極端な社會共產主義的の甘言を以て誘惑したから、理解力のない國民は、さなきだに戦争には倦きてゐる所だから忽ち此の甘言に騙されてるゝで酒に酔つたやうになつて了まつた。戦争開始以來約蹂躪億圓の金を費ひ四百萬に近い貴重な人命を犠牲にし、二十七八萬の俘虜を敵に委ね、其上國土を散々に蹂躪せられて、尙ほ之を耻ともせず却て自分の國に熨斗を付けて差出さうとするに至つては、最早露西亞はお仕舞である。戦

争の與國などと頼みにしてゐることは勿論出来ない。否露西亞は已に背信的講和を了へてゐるのである。

單に講和成立して嚴正中立の態度を持續し得るならまだしも、今日の露西亞は最早露西亞の露西亞ではない、彼は全然獨化した露西亞である。獨逸の露西亞である。露西亞が兜を脱いで單獨講和をやるや、獨逸人は一齊に「伯林より東京へ」と絶叫した、歡喜した。もう悠うなつた以上は歐洲戦争ではない、獨逸と日本と鼻を突き合せる許りである。現に西伯利には獨逸の俘虜が二十萬も居る。是と露西亞のレーニン一派とが相結んで、此二十萬の獨兵に兵器が渡れば直ちに日本に危害が及ぶことになる。さういふ内にもイルクーツク以西は已に過激派の手に歸し極東三洲亦過激派の大勢力となつてゐる。滿州里、哈爾濱方面にセミヨノフ軍が僅かに義軍を起して之に當つてゐるが、その兵力その武力は背後の何物をかがあるからこそ今日の維持が出来てゐる譯である。若し滿州里以東が支那領でなかつたならば過激派軍は今將に長春を境として日本と相對峙してゐるであらう。

一部論者のいふが如く、獨逸は或は遙々兵を極東の野に進めて殊更らに日本に戦を挑むやうのことはあるまい、然り現状の儘なら獨逸如何に勝ちに誇ることもそんな無謀なことはしないであらう然し獨兵が來たらぬからといつて、決して我等は安閑としてゐることは出来ぬ。何故かなれば今日の戦争は、昔の一騎打時代と異つて、悉く國力の比較である、即ち政治、教育、實業其他國としての力を全部比較して其優れるものが戦勝の榮冠を戴くものである。故に兵如何に強くとも國力之に伴はざれば決して戦に勝つことは能きぬと同時に、國力如何に充實せりと雖も兵力弱き時は亦到底優勝者たり得ることは不可能である。換言すれば獨逸は直接兵を東進せしめずとも、その激刺たる元氣を以て經濟上大に極東に手を伸べ以て戦後に備ふる所があるであらう、即ち恐る可き獨禍の東漸といふのは是である。

印度の大危機

一 印度の革命は先天性を帯ぶ

世界土地廣く國亦多しと雖も、印度のやうに有史以來陰謀革命の歴史に富む國はあるまい。我等は印度といへば釋迦を聯想す。釋迦は實に世界第一の先覺者である、而して彼は基督及マホメットと列んで世界に於ける最も有力なる革命者である。

今日の印度が釋迦と何れだけの交渉關係があるかは知らないが、釋迦を生んだ印度の土は依然として現代の印度人を生んでゐる土である。雪山の雪亦昔ながらの眺めであらう、鬱蒼たる大森林、猛獸の吼ゆる所、堅果の實を噛りながら過去、現在、未來を思索する時彼等は果して何物を案出するだらうか、雁河の流に咽を濕ほし、漆黒の顔面一點星の如く輝く眼の光は、果して何物を射貫すであらうか、蓋し大詩でなかつたならば大狂であらう。

由來陰謀革命等の生ずるのは、上下の懸隔甚しく、其中間に在る中堅の國民なき國が多い。印度を今一國としていふのは聊か語弊があるが、實に印度は上下の懸隔最も甚しい國柄である。家なくして寐ね食は喰ふに餘りて座ながらにして得るといふ自然の恩恵が過大に失して却て此不幸

なる二階級に區分したのである。已に四圍の状況が其革命を生むに最も適合してゐる。若し彼等印度人にして革命の思想なく陰謀の考へが起らなかつたならば、それは寧ろ彼等の先天性と遠かつてゐるといはねばならぬ。已に天性である、彼等の此思想を抑壓しやうといふのは急坂を降る車を押すが如く、火藥をし填て藥莖を打つの類である。故に之を抑壓しやうと試みるならば、それは試みる者の罪であつて、唯其爆發を速かならしむる外何等の功果をも齎らさないであらう。

英國今日の富強を以て英國々民の絶大なる勢力に因れりといふは、何人も異議がないことである。然しまた印度の自然的恩恵がなかつたならば、恐らく其大半は得能はなかつたことは明かな事實であらう。極言するならば印度は英國の生死問題を左右し得る位にまで世界有数の天産物を有してゐる。従つて印度の向背は英國にとつては獨逸を敵として戦ふよりも大なる問題である。亦彼を馴致することは英國にとつては愛蘭の自治問題よりも大問題である。故に英國が印度陰謀黨及革命黨に對する苦心は、極めて注意周到であつて此がため投する有形無形の費用は極めて甚大なるものである。しかし毎年印度より受くる七億の大金に比ぶれば所謂大海の一粟粒である。

二 英國の羈絆を脱せんことす

英國の政治的特徴が自治であるから、印度に於ても自治制を施くは、幾分彼等の陰謀革命の思想を和げ、その氣勢を轉じ得可しとなしたならばそれこそ大なる鑿見である。何故かなれば、印度人は絶對に他國の隸屬たることを欲しないからである。彼の印度通としてまた労働黨の主領として有名なるチャ、ハーデーが印度革命黨の主領ベーン、チャンドラ、ヘル等と親しく會見して歸英後鬼の首でも取つたかのやうに、印度自治問題を提げて起つたが、英國は一人として此に耳を傾くるものがなかつた。而かも彼等はハーデーを冷笑して「加奈陀に自治制を施いたからとて印度に之を施けといふは加奈陀には毛皮外套が必要だから、印度でも毛皮の外套が必要だといふことと同じことだ」といつて問題にしやしなかつた。是彼等英國人の頭腦には、抑壓、屈從を以てすら猶反亂の絶えないのに、幾分でも其政治的權利を認めたらば、恰も檻中の猛虎を野に放つたるやうに、危険千萬であるといふ自己本位から割り出されたことであらうが、或はさうかも知れぬしかし印度人が今日革命及陰謀を企つるのは、彼等が英國の羈絆を脱しやうとすることか

ら起つたことであるから例へ自治制を施かせても、英國の手から離れて獨立しない間は、やはり陰謀と革命とは治まるまい。

三 印度は到底獨立する能はず

未來の印度は知らず、現在の印度を以て獨立國たらしめたならば果して獨立國たり得るであらうか之れ大なる疑問である。而してその疑問は二つの異なりたるものである。一つは世界の列強が之を分割すること、二つは印度自身で分裂することである。第一のは永久中立國の制をとつたならば或は數年間は保つかも知れないが、第二は恐らく一年間も保つまい。是元來印度人が何等の國民的訓練なく、過去に於ても分裂の歴史のみを有するが如く將來に於ても亦恐らく打つて一團とした大印度國は形成されないであらう。寧ろ印度は亞細亞洲、歐羅巴洲といふやうに數多の獨立國が寄つて一つの印度を成してゐたものであつたから歴史からいつても或は不可能のことかも知れぬ。それでは印度が分裂すれば如何なるといへば、言はずと知れた第二の巴爾幹である。巴爾幹が小國相集まつて競争するやうに必ず思ひ／＼の大勢力者に依頼するであらう、その時はそ

の小國のために大勢力者たる列強が再び大戦争を始めねばならないやうになるのである。之を要するに印度といふ國程厄介な國はないのである。それに印度といふ國は釋迦以前已に六派の哲學などあつたやうになか／＼思想の發達した國である。思想の發達素より望ましいことであるが、印度は大思想家は生ずるが大政治家或は大實際家は生じない、少くとも生じてゐない。故にこの思想にも大なる何等かの缺點があることは争はれないことである。これが抑も印度を今日の狀態に陥れた大なる原因である。

四 印度革命陰謀の現状

國家經營の才能なく、獨立す可き力なき人民であるから印度に政治的運動が起るまいといふ議論があるならば、實に天下は泰平である。人が意識の判斷を失ふた時に於て最も猛烈なるやうに印度人の陰謀革命も亦彼等が自己を知らず、或は政治的能力が缺乏してゐるからこそ起るものである。それでは印度人は何が故に革命を叫んでゐるかといへば、人面の異なるが如く彼等の目的も亦多種多様であらう。實際印度革命黨の主張する所は多種多様である。彼のチャンドラ一派の

稱ふる革命の目的は全然英國の羈絆を脱して獨立國を樹立しやうといふ稍々秩序正しい革命的色彩を帯びてゐるが、ハナドン一派は唯英國をのみ排斥するものである。即ち英國さへ排斥すればその後支那が來やうが、亞米利加が來やうがそれは何うでも構はないといふ反逆的色彩を帯びてゐるものである。而してシング一派は自治制を施き自ら其爲政者となつて全印度を社會共產主義に固めやうといふ今の露西亞のレーニン主義（バリシヨイキ）のやうなものである。斯の如政治上に於て根本的に其立脚地を異にするかと思へば亦宗教上から來た革命運動もある。即ち印度教徒、回々教徒、波斯教徒、ジャイナ教徒或はシークス、バンジャーフ、ベンゴール等の教團が祖師は同じくして教義にも差はないが土地の習慣等から宗教的禮式の異なつたものは各々自派の勢力を増大せしめやうとして革命を計企してゐるのである。若し強ひて其共通點をいふならば或は英國の羈絆を脱しやうといふのが大部分を占めてゐるらしい。故に一朝英國の對印度政策に對して何等か嘴を容るるものがあつたならば印度は忽ちにして蜂の巢を叩いたやうになること火を見るよりも明かなことである。而して今日に於ては敵として最も有力な獨逸が已に嘴を容れ此等の革命派に對して油を注ぎ火を點しかけてゐるのである。爆發しやうと常々危険性を帯び

てゐるのに持つて來て、火を點するならば忽ちにして轟然たる音を發して爆發するのは分りきつたことである。印度は實に噴火山上に築かれたる樓閣のやうに大危機を生じてゐるのである。

五 歐洲大戰と印度の陰謀

本章では歐洲大戰中に於ける印度陰謀史の概略を述べやう。

以上已に印度は到る所に政治的不安が横溢してゐることを述べたが、這般の歐洲大戰は此等の不安分子危険分子に對して極めて大なる好機會を與へたるものであつた。英國は周到なる注意を怠らないが、革命陰謀運動は目を次いで増大になりつつあるやうである。されば英國政府は印度全部に亘つて戒嚴令を布き、警官の數を増し、出版刊行物の檢閲を嚴重にし、革命に關する記事一切掲載する事を禁じてゐる。だから彼等の運動に付て公知の事實は極めて少ないが、革命運動に對して關聯せるてふ罪名の下に處罰せられた人數の多きこと、その裁判せられた地方がカルカッタ、アムラバ、ミラー、マルタン、セーロン、ラホール其の他殆んど全洲に及んでゐる事實に徴しても、彼等の活動の如何に激烈にして、その關係地方の廣大なるかは窺知することが出來

るであらう。殊に詩聖タゴール一門の人々までも同罪名の下に處罰されたといふことである。

ヤングハスパント大佐の言ふ所に據れば、開戦以來一年間で印度國外に放逐せられたるもの四十二名、監禁せられたるもの三千五百九十六名、死刑に處せられたるもの六十二名の多きに達してゐるといふことである。しかし一方革命派の報告に據れば死刑に處せられた者が八百餘名、公判を受くることなく禁錮せられたものが一萬人、國外に追放せられたものが八百人の多きに及んでゐるといふのである。その何れが真で何れが嘘であるかは今俄かに判じ難いが兎も角も其厄に遭つてゐるのは事實である。

斯の如く彼等が常に反英國を標榜し、英國官憲の監視を受けながら迂濶千萬にも一萬人以上も禁錮せられたり、處罰せられたりしてゐるのは、如何にその統一がないかが分るであらう。是前に述べたやうに多種多様な黨派が互に相争ひ到底統一し能はざる状態にあること恰も蕃族のやうだから、こんな醜態を演ずるのである。

六 ガーダー派

印度革命黨中最も秩序あり勢力ある黨をガーター派といふのである、元來ガーターといふ詞は印度では革命及反逆といふことである。ところで此一派に屬するものは印度に於ての智識階級であつて、全く政治的革命の本質を備へたものである。黨員も亦多く文明的教育を受けてゐるが、例の印度一流の悲歌慷慨の士のこととて、言行稍もすれば徒らに神經過敏に陥り易く、従つて言行の悲痛な割に實蹟の擧がらないものが多い。黨員は多く海外に亡命し、其機會を得る度毎に故國に歸つて黨勢の擴張に力めてゐるといふ。

彼等は其本部を北米桑港に置いて、盛んに歐米の同士との連絡を保ち統一的活動をやつてゐる。同派の主宰をラム、チャンドラといつて、未だ三十三歳の壯年であるが、文筆の才に長じ、性亦豪膽でよく同士を統御する奇才を有つてゐる。前任者ハー、デールの活動が餘りに華々しかったので終に一千九百十四年三月米國より退去命令を喰つたに依りてその後任として赴任したものである。デヤルは目下佛蘭西にあつて其好機を狙ひつつあるといふことである。

◎獨逸と印度革命

如何なる方面を問はず、如何なる方法をも撰ばず、敵を屈服せしむるに汲々たる獨逸は、英國が印度なくしては一日も居る能はざるを知るより、終に其惡辣なる手を印度革命の上に及ぼすやうになつた。

カイゼルは先づ駐米大使館附フォー、ハーペンに命じて、嘗て印度革命黨と關係深き獨逸人二三名を撰んで印度に大暴動を起さしめんとし、私かに在米印度人を煽動して之に衣食を與へ、或は三人或は五人極めて秘密に印度に歸らしめてゐたが、當時印度では武器の輸入が嚴禁されてゐたこととて武器の輸入が不可能になつて一時頓挫を來たしたが、何にせよ彼等一流の陰謀的才能にそんなこと位に屈するものではない。彼等は直ちに米國より印度に向け大々の武器輸出を企てたが、幸にして米國官憲の知ることとなつたため事大事に至らずして止んだ。ハーペンは終に退去を請求せらるやうになつて一時其連絡を絶たれた姿になつてゐたが、彼の支那公使ヒンツエが米國通過任地に赴任する頃から又々芽を吹き出したのである。一説によればハーペン一派は米國大統領暗殺を企てて曝露されたための退去請求だともいふが、眞逆そこまで無謀ではあるまい。

是より先きハーペンが印度革命を使喚し、援助することを傳へ聞いた該黨員等は、恰も蟻の甘きに着くが如く公使館或は領事館を訪ふて其傘下に馳するもの日々十人を下らずといふ大盛況を來たした。ハーペンは彼等を一々引見して巧言合色至らざるはなく、その衣食に苦むものには之を與ふる等歡待至らざるなき有様だつたので忽ちにして數千人を糾合することが出來た。然るに不幸にして彼の武器問題のため退去請求となつたので後任者フォン、イーゲルが之に代つて來ることとなつたが、この男はハーペン以上の人物で所謂印度遠征の首謀者である。

此の印度遠征陰謀に加はつた革命黨はハナドン一派の反逆黨連中で、その領袖チャキヤベルチは、極めて巧妙なる詐欺手段を以て旅行券を得て獨逸に渡り、柏林に着し其の有力者と商議を遂げた後紐育に歸り、シユンチル等の獨逸人と共謀して、ヒンツエを通じて支那政府を説き右侵入を得るまで、米國より軍需品を積み出し之れを支那内地に蓄積するの許可を受けやうとしてゐたが、計企半にして又々米國官憲のために嗅ぎ出され、其主謀者たるハナドン、チャキヤベルチ、エルチスト、シユンチル四名は米國にて中立違犯の罪を以て捕へられて、さしもの大陰謀も幸にして事なきを得たのである。

獨逸開戦の目的は大牛印度に在り

我輩は既に印度の危機の概略を述べ了はつたが、これからその順序として獨逸が如何に印度侵略を欲してゐるかといふことから、その實行手段に亘り少しく秩序的に研究して見やうと思ふのである。

今回の歐洲大戰は獨逸が豫定の計畫に基いて、自ら挑發し自ら開始したものであることは最早疑を容れない事實である。問題は只獨逸がこの千古未曾有の世界大戰を開始し流血虜屍の大慘劇を敢てした眞の目的は何であるかにあるのである。

聯合諸國は參戰の當初より、其目的を堂々として聲明し、殊に對米回答に於てその戰爭の目的を天下に具體的に示して居るけれども、之に反して獨逸は何等明白なる戰爭の目的を天下に具體的に示してゐない。戦前に於ける汎日耳曼主義者の著述や、演説やには、大獨逸の世界政策即ち極端なる併呑主義侵略主義を露骨に論述してゐるが、戰爭開始後は却つて陰忍して世界併合説を再説しない傾向である。政黨政派の間には講和條件論として白耳義北佛の問題、波蘭チャルニア

の問題に關してこそ囂々相論争してゐるけれども、是寧ろ獨逸の要求の一小部分否寧ろ其成否必ずしも國家の休戚に大影響を與へない枝葉の問題に屬する感がある。況んや獨逸皇帝、宰相及びユロー公の如き責任ある政治家は抽象的に獨逸の自衛を以て戰爭の目的であるかの如く論ずるに止まり、却て獨逸の包藏せる大企圖を蔽はんとしてゐる有様である。此の如く獨逸が戰爭の目的即ち獨逸挑戰の眞の動機、換言すれば乾坤一擲の大賭博の賭物の何たるを陰蔽して顧みて他を言ふの態度は、實は獨逸の戰爭の眞の目的の雄大深遠なる大野心にあることは自ら暗示せられてゐるものといはねばならぬ。我輩は此等の事情よりして彼が此の大戦を以て一大好機到れりとなしその永年攻究計策した世界政策即ち大獨逸帝國の殿堂を世界の中心に築き上げて天下を睥睨しやうといふ大略であると信ずるものである。従つて之が實行の手段も亦規模の雄大なるものがあるに違ひない。

白耳義や北佛の鑛業地方の如き、波蘭の如き歐洲の一小領土の併合しかも特種の文化を有し特種の民族より成り、獨立國の國民として幾百年間永續した統御困難なる小領土を併合しやうとの小計企でないことは明かなことである、彼は恐らくこれ等の小領土を以て一時軍略上の懸引に利

用する積り乃至これを足場として大に他日の計畫の階段下味を造つて置かうとする希望であるだらう。

獨逸今日の大問題はその人口の過大であつて、早晚大植民地を得て之に積極的發展をなさねばならないのである、そこで渠は寧ろ此の大戦争を利用して國家百年の大計を起てやうと思つてゐるであらう。

之を要するに獨逸の戦争の眞の目的とする所は彼等一部の政論家達の言ふが如く汎獨政策乃至世界政策或は露骨にいへば世界征服の豫備的準備として先づ中歐に大獨逸帝國を建設しやうとの大野心である。しかしこの大野心は單に中歐に建設せられた大獨逸帝國のみでは、恰もサハラ大帝國と同じやうで其資源を得ることが困難である。即ち彼は中歐大獨逸建設に當つて是非共獲得せねばならない大植民地がある。その目的物こそ眞の戦争の目的であつて、而してそれは「伯林よりバクダットを越え印度方面」にあることは言はずと知れたことである。換言せば獨逸開戦の目的は中央亞細亞を経て印度攻略であるといふことになる。印度の危機實に逼迫してゐるといふ可しである。これは最も穩和なりといはれてゐる妥協講和論者たる自由左黨の名士ナウマンすら

その著書「ミツテル、オイロバ(中央歐羅巴)」に於て獨逸、勃土の四國を聯ねて軍事上、經濟上の鞏固なる同盟國を建設し以て中央大獨逸帝國の建設を高唱してゐる位であるから、全獨逸國民の頭が東へ東へと傾いてゐるのは無理もないことである。

「伯林より印度まで」

前章に於て獨逸大戦の目的が、大植民地を得ること、中央大獨逸帝國の建設にあることを述べたが、之に就て米國アルチャバルト、ブーリツチ教授は「世界的國家としての米國」といふ著書に次の如く述べてゐる、参考として讀者の一讀を煩はすと共に旁々我輩の説く所必ずしも臆断でないといふ證左としやう。

「獨逸は今や甚しく不利の地位に立つてゐる、蓋し獨逸は比較的はその國土が狹隘で、而かも地味が豊かでない、されば獨逸にては將來更らに發展せんとせば、何れにか過剩人口を移すべき土地を得ねばならぬ。植民地はあれども西南亞弗利加の一部を除けば、悉く熱帯に位してゐて、何れも多數の白人を收容するに適しない。極東貿易に於ては米國よりも遙かに不利の地位に在る上

に、特に支那に於ては日本て有力なる競争者を有してゐる。若し他日英吉利本國がその植民地との間に關稅同盟を締結したならば、獨逸と英植民地との貿易は致命的打撃を蒙るであらう。南米に於ては着々その効を収めて居る様ではあるが、終局の勝利を得やうとするには、是非共米國てふ強敵を破らねばならぬ。然るに獨逸は之に對して果して勝算があるであらうか、米國は第一獨逸よりも遙かに地理的關係に於て優つて居り。第二には獨逸の到底企て及ぶことの出來ない國産を多く有してゐる。獨逸國民は一時普埃と普佛戰爭の勝利に酔ひたるも、その酔の漸く醒むると同時に何となく不安を感じ始めた。普佛戰爭の産物として生れたる今の獨逸帝國は有力でない譯ではないが、之を英や露に比したならば、その領土が餘りに狭過ぎる、されば若し獨逸にして發展しやうと思へば、何れにか領土を求むるの大なる必要がある。然るに獨逸人の多數を收容すべき處は、既に他國の有に歸してゐて、僅かに殘る所は列國環視の嚴重なるがために獨逸としては一指をも染むることができぬ、例へば濠洲、モロッコ等の如きこれである。ブラジルの如きに至つては米國と戰端を開く覺悟なき以上、獨逸の手を着くことを許さない、要するに獨逸は何所かに其大植民地を尋ねねばならぬ。」

教授は何所といつて露骨に指すことなく、巧みなる辭令の下に暗示してゐるが、獨逸人は極めて露骨である、即ち彼の「伯林よりバクダットまで」の如きを高唱して誰憚る事なきに至つた。そこで我輩は此に一寸「伯林バクダット政策」に就て少々説明するとするが、此は最早天下周知の事に屬するから極く概略だけで御免蒙りたい。

ブーリツチ教授のいつたやうに獨逸は早晚大植民地を求めねばならない自然の必要に迫まられてゐるので、方々踏當りをやつて見たが最早悉く先客の占むる所となつて、之を求むることは困難であつた。所が此に比較的容易な所があつた、それは土耳其領の小亞細亞及メソポタミア地方である。此の地方は第一氣候も温和であり、地味亦肥沃で、而かも天然の無盡蔵の富源に富んでゐて、人口極めて稀薄僅かに一千二三百萬に過ぎない。若し之に文明的施設を整へ、灌漑工事を施したならば優に七千萬乃至一億の人口を收容することが出来る。獨逸の東洋學者スブレンゲル教授もその著「古代に於て最も富み現代に於て最も植民地として適當なるバビロニア」に於て論じてゐる如く、白人に依り未だ占領せられざる唯一の土地である。そこで獨逸は已に千八百八十八年來土耳其政府より小亞細亞即ちアナトリア鐵道の敷設權を獲得して着々その工事の歩武を進

めた。すると又此の時伯林より維納を経由し、巴爾幹半島を縦貫して君府に到る「近東鐵道」が落成すると共に土耳其との貿易額が頗る激増し、前途益々有望なるを示した。その結果獨逸上下の視線は悉く近東に集まり、アナトリア鐵道を延長してバクダットに到り更らに進んで波斯灣に達せしむるの計畫を行ふに至つた。斯くて「伯林バクダット政策」なる計企は起つたのである。然るに獨逸にとつて最も困難なる出來事起つた。それは巴爾幹問題である。

是に於て獨逸は國家の生存に關する重大問題として該事件を観察し、之に對する策を講ずるの必要を感じ一九一三年の春即ち未だ巴爾幹の第二回戦争が終らない前、帝國議會に十億萬馬克の臨時軍事費を要求してその承認を得た、その際宰相ホルウエツヒは議會に於て汎スラヴ主義と汎日耳曼主義との決闘は早晚避くることが出來ぬであらうといふ旨を演説して今日の大戦に對する暗示を國民に與へてゐた。然し「伯林よりバクダット政策」は巴爾幹戦争の結果終に英佛露の握手によつて水泡に歸するの已むなきに至つた、即ち巴爾幹半島に於ける勢力は汎日耳曼主義者が敗者の位地に落ち汎スラヴ主義が勝者の榮冠を頂いたのである。

然るにサラエボの一弾は獨逸に大なる好機を與へた。彼は「伯林バクダット」政策の水泡に

歸したその返報を今回の大戦に要求してゐるのである。否單に其返報なるのみならず「英國滅びずんば獨逸起たす」といふトライチエケの建言に依り、飽まで英國を滅ばす可く、その致命傷たる印度を攻略せんとして茲に「伯林より印度へ」といふ語を生み出したのである。

波斯に於ける獨の暗中飛躍

「伯林より印度へ」を計企する以前、即ち「伯林バクダット」政策時代に於ける獨の波斯方面に於ける暗中飛躍は極めて大なるものであつた。

波斯は千九百七年の英露協約に依り、北方を露國の勢力範圍と定め、中間の地帯を兩國勢力の緩衝地帯として殘し、その南方を英の勢力範圍となすことに協約された。所が獨逸はこの緩衝地帯に於ける英露双方の不干涉を利用し、波斯宮中に於て活動し同國の國民黨即ち英露の勢力に反抗して波斯の獨立を唱ふる一團に巧みに喰ひ入り之を煽動した。殊に這回の大戦開始以來波斯の中立を利用し叛亂を起さしめて波斯を攪亂し勢に乗じてアフガニスタンを動かし、陸路直ちに印度國境に迫り、他面印度の叛亂の煽動の密謀と相俟つて、英國を危地に陥れやうと謀つた。こ

の間テヘラン駐劄公使ロイス公及其の後継者フワツエルの陰謀と暗中飛躍と相俟つて一時テヘランの政府は中歐同盟に傾き獨逸公使の入國の荷物は、機關銃やその他の軍器の密輸入となり、歐人の訓練せる憲兵の將校殊に瑞典將校は獨逸の買収する所となつて、首府は勿論地方到る所獨逸領事副領事は常に土民を懐柔し、叛亂を煽動し、獨逸公使館及領事館は叛亂陰謀の根據地となり露軍占領地以外波斯内地に暴徒諸所に起り、同時に獨逸の願使に従ひ、メソポタミヤの土軍は進んで波斯國境に闖入し、ケルマンシャーは土軍の手に歸し、終に土族を使嚇して攪亂に加擔せしめクルド族の騎兵は長驅テヘランに迫り内部の陰謀に相應して巧みに王を拉して亞細亞土耳其に蒙塵せしめんとする迄に火の手は昂つてゐた。此間英露の領事はシラスに抑留せられ露の副領事は暗殺せられ、獨逸と土耳其との連合陰謀隊の活動は極端に走らんとした。幸に露軍南下してテヘランを救ひ、波斯王は誘拐を逃れ、首都は平靜に返つた、英軍は波斯灣頭より上陸し英露兩軍南下してテヘランを救ひ、波斯は漸く平穩に復し、印度國境の不安も一掃せられたのである。獨逸の波斯に於ける活動は斯の如くして失敗に歸したけれども其手段の狡猾且つ巧妙なるに至つては大に警戒を要する所である。

その次には波斯灣内殊にアラビア沿岸に於ける獨逸の陰密なる活動も亦注目し得るものがあった。獨逸慣用手段たる商館を以て探偵機關とし權利獲得の機關となすの策は此處にも行はれた。一千八百九十六年獨逸のウォンクハウス商會なるもの、突然波斯灣東岸キシウム島の西リンガーに商店を開き眞珠類其他の介殼買収を始め、土人アラビア人と親むに努めた等、當時同地方に住する獨逸人は僅に五六人なりしにも拘らず、翌年同東岸ブシールに副領事館を開設し、茲に波斯灣に於ける經濟的活動の幕を開いたのである。ウォンクハウス商會は次第に發展を企て千九百一年には眞珠の名産地ブシールに本店を移し、バスラ港、ブンデル、アバス、バーレンに支店を設置した、羽翬已に成りて該商會は益々土民間に手を伸ばし漸くアラビア沿岸に活動を初め出した。今同地方に於ける英獨の反目を英國發行の「戦争時報」に據つて調査して見ると「バーレン島に於ける同店員バーレン會長の部下に毆打せられたるを名として或る政治的の要求をなしたが、英國領事館は急遽軍艦に投じて、該地方に赴き之を阻止したることや。獨逸は更らに土耳其を動かさし、シドハトバシヤ時代の遠征を根據としてエハカタル半島の灣全部の眞珠採取の獨占權を同商會に特許せしめたが、英國はアラビア沿岸諸會長に對する土耳其たる主權の主張に抗議し終に之を阻

止することを得た。仍て獨逸は轉じて同半島ビタ港前面の波斯灣中央の小島ヘルルの租借權を土耳其帝より獲得せんとした。同島は波斯灣に於ける眞珠貝採取船の中休場として有名である、海軍貯炭所として好個の小島である。之も英國の抗議に依つて沙汰止みとなつた。轉じて同商會はシャルガー港の前面アブムサ島に着眼し同島産鑛採取權を買収したがシャルガー會長は此特許の讓渡しを承認しない、英國は會長との條約に基き外國人に對する此の讓渡を承認せず軍艦を派し土人會長の兵と共に同島に赴き獨逸商會の採鑛者を島よりリングガーに送還した。此時獨逸人を射撃した事件があつて國際問題を惹起し獨逸新聞は囂々として英國の波斯灣に於ける越權を酷評したが事なくして止むだ。時に千九百七年であつた、而して千九百六年獨逸の漢米瀛船會社が、始めて波斯灣航路を開始するや、同商會其の代理店として活動し、人をして同商會の背後に於ける獨逸の大勢力を知り得せしめたのである、此の如く一商會を以てして十數年陰忍強志次第に勢力を張り、有ゆる機會と口實とを設けて波斯灣上殊にアラビア沿岸に於ける土地獲得に苦心の慘膽たりし其努力の跡を見れば、獨逸が如何に波斯灣上に飛躍せむとする野心の盛であつたかを窺ふことが出来るであらう。

露獨の講和と印度の危機愈々逼まる

以上は、露獨單獨講和以前に於ける獨逸の「伯林、印度」政策に對する努力であつたが、露獨單獨講和成立後の今日に於ては、最早獨逸の大野心の一部分が成就されたといつても差支ないやうな危険状態に迫まつて來た。彼は恐らくメソポタミヤに於ける勢力の挽回と共に、波斯灣頭まで進出し亞細亞土耳其全部を其手に確實に把握し、バクダツト鐵道を完成し亞細亞土耳其の開拓所謂中歐大獨逸帝國の資源たる植民地を得て、軍事上經濟上牢固として抜く可からざる勢力を茲に確立し、進んで海に於ては波斯灣に英國と權を争ひ、陸に於ては波斯を侵しアフガニスタンに達し、英國と勢を競ひ、印度を海陸より脅威するや必然である。此は今回の戦争に於て獨逸が勝利を得たとしての假定から推論したものであるが、現戦争の成行如何に依つては今日に於ても決して安神が出来るのではない。否我國に於て西伯利問題は相當注目されてゐるが、それ以上本問題は緊急を要す可き問題である、それは唯單に英國の植民地としての印度問題許りではない、東洋の大問題である、我國の危機である。現戦争の小亞細亞方面に於ける戦局の開展を一寸述べて

我が帝國の一大危機を警告しやう。

日本は終に爆弾上に置かれたり

我輩は「日本は終に爆弾上に置かれたり」とさも仰々しい外題をつけたが。少し許りの戦争の成金や何にかを無性に喜んでゐる人々には極めて奇矯の言のやうであらう。然り我輩と雖も其奇矯の言語ならんことを希ふて已まないものである。然し事實は我輩が如何に陰險するとも時々刻々に我國の危機を告げてゐるから已むを得ない。

見よ獨逸は已にウクライナを蹂躪した、巴里亦砲彈の見舞を受けてゐる。此際巴里が陥落するや否やは豫言することはできないが。東部戦線即露西亞侵略に戦つてゐた兵力は騎虎の勢に乗じて小亞細亞より印度に進むに定まつてゐる。我輩は此に印度今日の守備殊に陸上守備に付ては多く公言する自由を有しないから讀者の判断に俟つより外ないが、その公にされてゐる部分は、印度兵の佛蘭西戦線にあることや、武器は革命勃發豫防の意味に於て〇〇されてゐることや、から考へて見ると、實に前途大なる何物かが横はつてゐるやうな感じがするのである。然らば印度に

對し獨逸が侵入するか、少くとも印度を脅かすやうのことがあれば、日本は出兵するであらうか。この質問が自然起つて来るであらう、我輩は之に對しては唯一言然り「するであらう」にあらすして「せねばならぬ」と斷言するに躊躇しないのである。

獨逸東進して印度が愈々第二の戰場となれば、印度は勿論第二の地中海である、波斯灣は第二のアドリアチック海となり、陸に於ては波斯は第二の巴爾幹となりアフガニスタンは第二の土耳其となり、印度の争奪戦となる順序である。獨逸は最早波斯地方に鋒を向けてゐる。印度の危殆巴に目前に迫まつてゐる、そして我等は日英同盟の責任と與國の交誼との外我帝國々防上から大に之に備ふる所なくつてはならない、我輩が大戦来るといふのは、北は西伯利より、東は印度より巴に敵は攻めかけて來てゐるからである。よし幸にしてそんなことがなかつた所が今回の戦争は決して徹底的に平和を得られるものではない、必ず第二の歐洲戦争が起つて來る、而して第二の歐洲戦争が起るのは、第二の巴爾幹か、西伯利か、支那かを舞臺としたものであることを考へたならば、誰か「大戦来る」を叫ばずしてゐられやうか。

回教徒煽動

小亞細亞、波斯、土耳其は回教徒の根據地である、彼等が耶蘇教を厭ふこと蛇蝎の如きは、その教義の異つてゐるといふよりも寧ろ歐洲文明の發展と共に、耶蘇教徒が彼等を壓迫するからである。而かも彼等は極めて自尊心強く、その一度團結するや頗る鞏固であつて何物をも覆さずんば已まない決心をなす、唯彼等はその勢力の優勢ならざるによつて漸次に領土と共に衰亡し回教亦昔日の如く振はざる有様であるから、常に耶蘇教徒に對つて應復手段を講じ以て自家の衰退せる勢力を挽回しやうと試みつつあるのである。恰も可し本年三月露獨單獨講和成立し、露境土勃講和條約に於て、その第七條には「波斯及亞富汗斯且の自由獨立國家たる事實に鑑み、締約國は此等諸國の政治的經濟的獨立並に其領土保全を尊重するを約す」との規定が出来上つた。之れ則ち亞富汗斯且が英國の保護邦となれる現在の事實と衝突し、一九〇七年英露協約中亞富汗斯且關係の部分と相杆格するものである。勿論前記の締約國が之を承知してゐない筈はないから、承知してなしたとすれば是明かに小亞細亞地方を以て第二の巴爾幹たらしめんとする烽火であるとい

ふ可しである。此の烽火を擧ぐる一方彼等は回々教の擁護者らしく装ふて盛んに之が煽動策にとりかかつた。今其の煽動文の一節を譯載して見やう。

「光輝ある歴史と、有望なる將來を有する我親愛なる回教徒諸君、

諸君が壓迫せられてその領土を失ひ、教祖絶大の勳功を彼の耶蘇教徒に掠奪せられんとしつ
つあるを知れりや。

諸君が領土を失ひ、自由を奪はれつつある正に諸君及我親愛なる回教徒の教祖に對する耶蘇教徒の大なる横暴なり、借越なり。而して彼等はその教徒の發展を名として總ゆる迫害を諸君の頭上に加へんとす、斯の如きもの十年ならんか諸君は諸君の祖先の有したる名譽と、教祖の與へたる歴史とは、恐らく彼の横暴なる耶蘇教徒の蹂躪する所となり。諸君は棲むに家なく、祭るに地なきに至らんとす、是諸君の忍ぶ能はざる所なる可し、亦仁俠を以て誇り、義氣の歴史に富める我獨逸民族の黙視し能はざる所なり。

諸君は今回戦亂の原因を知れりや、是一に回教徒に對する、耶蘇教徒の壓迫のみ、迫害のみ、而して耶蘇教徒は世界何れの宗教よりも其勢力甚大にして、教徒の力亦強大なり。我獨逸民族

は即ち我回々教徒を此恐る可き毒手より救ひ以て教祖昔日の威令を輝かさんがため、如何に絶大なる犠牲を拂ふとも躊躇することなく起てり。

實に現今世界廣く、國多しと雖も諸君のために唯一の味方となり、諸君のため熱烈なる教祖の敬慕者として諸君の最も信頼するに足るは、我獨逸帝國を外にしては斷じて之なき所なり。今や戦亂は、その終局を物語る迄に、極めて明瞭に我獨逸の勝利を指せり、是諸君の熱誠なる教義が徹底して我忠勇武烈なる獨逸民族に了解されたればなり。吾人は諸君が唯教祖のため教徒のため其旺盛なる信仰心と、優秀なる武力とが自然に我獨逸のために最も力ある可きことを明言せんと欲す。

諸君が我獨逸を援助して、其戦争の終局をして有利に收めしむるは、一に諸君の教祖と諸君の同胞のためのみなり。」

獨逸は斯の如くして回教徒煽動にとりかかった、一時獨軍の旗色の悪かつた際は、元來が事大主義の士民だけ獨逸を愚にしてゐたが、露西亞の力及ばざるやうになるや、獨逸は再び此方面に向つて絶大の力を揮ふやうになつて來た。

獨兵の高加索上陸、愈々東洋政策復活さる

最近巴爾幹からの情報に據れば、獨逸は同方面に於て種々の陰謀を企ててゐるものの如く、最近獨逸の巴爾幹方面に於ける運動は三千の獨兵が高加索のポチーに上陸したりとの外電によりて著しく注目を惹くやうになつた。高加索は目下土耳其と平和會議を開きつつあるが、土耳其の要求條件は露國より獨立したる高加索を獨逸、埃、土三國をして分割せしむるの結果となるであらう。そして土耳其の高加索に對する要求の主なるものを擧ぐれば、

一、黒海及沿海諸州は土耳其の主權下に置くこと。
二、獨逸皇族を南部高加索の王とし埃獨大公をアルメニア王となすこと。

等でパツーム會議に於て高加索の獨立を認めたる獨逸並に土耳其が却て之を自己の手中に收めんとするものであつて、高加索の承認し能はざる所なるは勿論のことである。此に於て土耳其は武力を以て問題の解決を計らんとしたるものの如く、先にポチーに上陸したるは獨兵とあるも或は土耳其兵ではあるまいかとの疑問も起されたが、露國過激派の公表する所亦獨軍の上陸とあるか

ら、近頃に至つて獨逸が新たに此方面に活動を開始したと思はれる。

獨軍の高加索上陸は之を單に高加索占領の目的とのみ見る事は能きない。實に我輩の常に叫び得る獨禍東漸である。元來獨逸は此際極東に手を伸ばすは西伯利と、印度方面とであつて、西伯利は二十萬近くの俘虜が居るが、要するに俘虜であるからさう大した活動は能きない、然し浦鹽と伯林と連絡のついてゐる今日の事だから滿更ら之を捨てて顧みない譯にはゆかぬ。然し我等軍事専門家からいへば西伯利俘虜の蠢動は、此際獨逸の印度侵畧の牽制運動であらうと信じられる、即ち世の注意を西伯利に集めること、日本をして西伯利に對して備ふる所あらしめ、印度派遣を困難ならしむる方畧と見るのが稍々真相に近いと觀察するが穩當らしい。故に今回獨逸のポチー上陸は、その近東及極東政策の復活と見ねばならぬ。

獨逸は今回の戦争により東洋唯一の根據地たる膠州灣を奪はれ波斯並にアフガニスタンに失敗して所謂三B政策の根柢を覆へされたが、露國の解體と同時に東方に於ける封鎖は先づ解かれ羅馬尼亞との單獨講和の結果巴爾幹通路を開き茲に獨逸の東漸政策は復活の機會に際したるもので先に土耳其が波斯に侵入してダブリツクを占領したり今回獨軍のポチーに上陸したる等しく東方

問題と相關聯するものと解せねばならぬ。

我輩の手に達した情報に據れば、波斯は既に土耳其と相提携したとさへ傳へられてゐる、曩きに波斯問題に付て述べた通り千九百七年英露協約によつて相互の勢力範圍を定めたるは、全く此の獨逸の三B政策に對する防禦策であつたことはいふ迄もないことである、土耳其の勢力の伸張する所即ち獨逸勢力の浸潤せる今日、波斯と土耳其との提携が果して眞なりとせば（我輩は諸種の事情と戦局の今日よりして眞と信する者である）印度脅威の如きは獨逸にとつては朝飯前の事である。印度脅威され東洋の平和攪亂さるるは最早研究問題とするには餘りに事實が逼迫してゐる。獨兵は最早ポチーに上陸してゐるではないか。

日米の衝突

米國露西亞に秋波を送る

「露國民の上に獨逸勢力の加へられ、露國民が自由のために奮闘し來れる全効果は、茲に障害を受けて失敗に歸せんとし、露國民の目的に代ふるに獨逸の希望を強制せんとするの際に當り、予は米國民全部が露國民に對して感ずる同情を勞兵會大會開催を機として表白せんと欲す。

米國政府は不幸にして目下直接有効なる援助を與へ得るの地位にあらず、然れども斯る援助を與へんとするの念は切なり。予は露國勞兵大會を通じて若き露西亞の健全なる發達をなし、再び完全なる統治權と獨立とを恢復せしめ、歐洲及近代世界に於ける露國の偉大なる立場を復活せしむるため有ゆる機會を利用す可きを證言す、露國民が專制より脱離して彼等自ら主宰者たらんとする運動に對し、米國民は衷心より其成功を祈るものなり。」

米國も我が與國である、彼も獨逸を以て敵となし現に二百萬の兵士を歐洲戰場に起たしめんとしてゐる國である。他の與國が露西亞の背信行爲に對して忿怒と不信とを禁する能はざる折柄、殊に英佛等の與國が日本の西伯利出兵を懇願的に要請してゐる今日即ち本年三月上旬米國大統領

は露國莫斯科に於ける勞兵大會に傳達せしむる目的を以て、同地の駐在米國領事に宛て電信として送つたのである。

平和と人道を以て國是としてゐる米國のことだから其巧妙なる辭令を以て飽まで露國を救ふといふのは無理もないことである。しかし同じく救ふといふも自ら與國としての責任もあれば義務もあることを忘れてはならない米國が此等の責任及義務に付て特に西伯利問題に付て如何に解釋してゐるかは我輩の知る能はざる所だが、「米國政府は不幸にして目下直接有効なる援助を與へ得るの地位にあらず」といふ所を見れば、彼は露國に對して目下直接援助を與へ得る國を何國と決めてゐるに違ひない、或はその何國が我邦であるかも知れぬ、然らば我邦に對して米國の對露政策は斯うであるといふ可きが、今日與國としての當然の友誼である。勿論彼我政府間には幾多の交渉が致されたらう、しかし其等の交渉は未だに何等纏まつた即ち具體化したのを見受けな

いのは、我國民のみならず英佛兩國の極めて遺憾とした不審に堪へないことである。或人は曰く米國は民主國なり、世界の諸國をして民主化せしむるは抑も米國民の理想である、而して現在の露西亞は專制から股體して民主化したものである、故に背信行爲ある露西亞政府といへども米國は之を援助するのに躊躇しないといつてゐる。夫れ或は然らん、豈夫れ然らざらんや、その然りとす所以は米國の理想實現を土臺として考察するからで、その然らずとなす所以のものは米國々策樹立の上から考察すると、何物か我輩の頭に殘るものがあるからである。頭に殘る或る物とは何であるか、米國民の露國民に送れる秋波と、其西伯利發展の實際である。

米人の西伯利發展

如何に健忘性に富んだ我國民でも、今を距る十數年前米國人が西伯利亞アラスカ鐵道敷設の計畫ありし事を記憶するであらう。この大膽なる計畫は米國シンデゲードの企計に係り、其代表者ロング、デ、ベン大佐によつて露國政府に交渉されたものである。計畫の内容は詰りアラスカからベーリング海峡の地下を經由してカンスク市に延長し西伯利鐵道の停車場を聯絡せしめんとしたものであつたが、當時同シンデゲートは、此鐵道布設の目的に就て左の如き條件を提供した。

- 一、西伯利アラスカ鐵道は、其收入の如何に拘らず一切政府の補助を仰がざる事。
- 二、鐵道沿線左右十二基米間の地上並びに地中に藏する物件の収益を得ること。

- 三、契約期間は九十年とす、但三十年経過したる後回收するの權あるものとす。
 - 四、鐵軌、車臺、機關車等を購入するに當り其四分の一は露國製造所に注文すること。
 - 五、勞働者、人夫等には露國人を使用すること。
 - 六、露國の植民政策に従ひ、西伯利移民の輸送を援助すること。
- 大畧以上のやうな條件であつたが、當時露國の大任會議は賛否相半すといふ位であつたので、若し此際米國政府が一層の努力を試みたならば、或は成功したかも知れなかつたが、米國政府も今日のやうに實力はなし、また露國政府も今日のやうに實力失墜をしてゐなかつたこととて、米國政府は餘り力を入れなかつたのみならず、露國陸軍側が非常に反對を叫んだので、終に大臣會議の結果否決といふことになつた。

元來ベーリング海峽より、カンスク市に布設せんとする鐵道の周圍は、到る處人跡未到の大山脈及河川によつて横斷せられ、その上沼澤あり、湖水ありツンドラ（水苔）の繁茂せる個所ありて、之に架する鐵橋陸道等頗る長きを要し且つ其數亦決して少くない、また鐵道竣成後といへども多數の雪除け車は勿論のこと、極寒のため軌道の破裂する怖れがあるので自然それに對する準備も必要である。凭んな具合で他の鐵道計畫とは全然其趣きを異にするがその費用の總計は約四十億留で其中ベーリング海峽地下線の費用のみで既に十五億留を要する計算であつた。

しかし當時其計畫者は進歩せる技術と、潤澤なる資金とを以てすれば、此絶大なる事業も敢て難事とするに足らぬと確信し、また一方竣成後の収益を見るに、元來世界市場に於ける露米の競争産物は全く同種類であるから、随つて此線路に依つて兩國間に頻繁せる貨物の交換ある可しとは考へられぬ、加ふるに鐵路に因る貨物は概して貴重品高價品に限られ他は悉く船舶輸送に托せらるる有様であるから、此亦頗る僅少たるを免かれぬ、乗客といへども亦其速力に於て快速力を有する汽船は敢て劣る譯でないから特別に鐵道を選ぶとも思はれない、要するに皮相の觀察では該鐵道の設計は極めて無謀の企といはねばならぬ。而かも米國人が民間の一シンヂゲートで政府の補助をも仰がず、自己の營利事業として進んで之に四十億の大資本を投せんとする其眞目的は果して何れに存するであらうか、それが例の亞米利加式といへばいへないこともないが、それにしても餘りに大袈裟である。

米國の極東に對する大野心

話は随分古くなるが、今から五十年前即ち一千八百六十七年六月二十日米國が七百二十萬弗を以て露國から買取つたアラスカの事に頭を廻らして見れば、かのアラスカ西伯利鐵道の計畫も畧々其真相を捕へることが出来るであらう。

元來アラスカといへば誰でもすぐ世界の金産地たることを聯想する位に有名な所である、米國は七百二十萬弗の巨資を投じたが五十年後の今日までアラスカに因りて得たる富は實に其六十倍以上に相當してゐる。そしてその主なる収益が金鑛によつて得られたことは勿論である。中にもかの千八百九十九年頃採金の豊富を以て世界の耳目を聳動せしめたクロンダイク鑛山等は最も優秀なるものである、そこで我等の想像は米國人の慧眼なるきつと彼は第二のクロンダイクの金鑛が必ずベーリング海峡を超えて、西伯利方面にあらねばならぬと睨むのだと觀察することが出来るであらう。

所が以上述べ來つた通り、營利會社であつて無謀な企やうな大袈裟な事業を計畫し、また之

に對して政府の補助を仰がぬといふ大膽なシンデゲートの影には何物か大なる怪物が隠れてゐるのではあるまいか位の觀察は敢て識者を俟つまでもなく明かな事である。然り其影には半官半民の東北西伯利調査會社なるものが隠れながら其系を操つてゐたのである。該會社は表面は一シンデゲート組織になつてゐるが我滿鐵見たやうなもので基礎亦なかなか鞏固である一九〇〇年より向一〇年間アラスカ及東塞加半島鑛物探險の特許を露國政府より得て其調査に従事してゐたが、露國政府の國防政策から露國人にも外國人にも決して許さなかつた、沿海洲海岸を距る百露里以内の地點に於ての鑛業權すら二つ三つ持つてゐる位であるから、彼の鐵道計畫の十二基米で好いといつて無慾のやうに裝ふてゐる裏面には存外大慾が竊むでゐるかも知れぬ。

然し米國のこの大袈裟な要求に對しては、さすがの露國大臣會議も之を否決し去つた、今其否決した根本ともなる可き露國鑛山技師の意見を見るに彼は

「單に經濟上の問題にのみ止まらば、何人でも我西伯利の富源開拓に着手しても構はぬ、一度經濟上優越を占むれば、勢ひ之に政治上の要求が随伴し來らざるを得ぬが、而して此事は地方住民の未開なる地に於て最も甚しいのである。要するに米國シンデゲートに同地鐵道布設權を

許可するのは、之取りも直さず東北西伯利一帯に彼等米國人の經濟的また政治的勢力範圍を擴大せしむるものである。近くトランスバールに於て米人がブルース土人の土地に資本を投じて其地中の礦物を収益せんとしたる事實を見よ、我等は此の如き歴史を繰り返すことを欲しないのである。」

と即ち彼等は經濟上の發展は望む所だが、之に隨伴する政治上及國際上の諸問題が必ず露國の不利を招くといふ論據の上起つて反對したのである。勿論西伯利のやうに人文開けず人口亦稀薄なる地に於て此の如く米國の大資本が放棄せらるるならば、その結果は米國の極東發展となると共に、露國の勢力は事實上極東方面から驅逐せらるることになるのである。露國の之を退けたのは、彼等にとつて非常な幸福であつたのみならず我東洋乃至我日本國民として、東洋平和のため二つなき幸福であつたのである。

露國革命後の米國の活躍

ロマノフ王家と米國の國是とが何れだけ接近してゐるか知らぬが、露國が新しい自由の國と

して米國の同情を招いてゐるのは並大抵ではない。

といふまでもなく米國は民主國であつて、舊露西亞は極端なる專制國であつた。その政體の不一致の點あるは矢張國際關係にも亦圓滑な點は見出されなかつたのは當然のことであるが、久しく兩國間の修交條約が中絶されてゐたのを以て直ちに政體の相違から來たものであると考へるのは少しく早計に失するものである。實際戦前に於ける米露の關係は敢て修交條約を必要とする迄接近してゐなかつたのである。所が今回の大戦は計らずも兩國を結び着けた。それは無論英佛の幹旋も大に力あることであらうが、抜目のない米國の外交政策が寧ろ此好機逸すべからずとなし相接近したのは勿論のことである、就中革命後露西亞が國歩艱難に陥るや米國の對露親切といふものはそれはそれは戀人の病を見舞ふ位他目も羨ましい程である。

兎に角米國は、新しい露西亞に對つて世界唯一の同情國となつたのは事實である。從來その財政上の援助及舅姑役であつた英國からその權利を譲り受け、大なり小なり露國の財政上に嘴を容るることになつたのである。殊に最も其援助振りを露骨に發揮したのは、米國前國務卿ルートの訪露であつた。幸か不幸か國務卿の訪露は終にその目的を達することは能きなかつたが、彼等が

西伯利に對する大野心を包蔵してゐるのは、その頃の露國新聞に據るも明かなる事實である、當時の露國新聞によれば、

「ケレンスキー内閣時代露國鑛山局長スリアブキンは米國對露鐵道委員スチープンスとの間に露領樺太の石油、石炭、鑛業權及アルタイ山高加索鑛、ウラル鐵道及び沿海州鐵道讓渡及沿海州に於ける鑛山採掘權の讓渡等を契約したと傳へられてゐる。

前記の契約が無効に了はつたのを見て我等日本國民は自警の手を放しては可けない、第二第三のルートが、大に義侠と同情とを振り廻して露國を訪れるだらう。西伯利の地が其一部分でも日本以外の手に渡るやうのことがあり、また經濟の大勢力が他國の手に移るやうなことがあつたらば、我等にそんな野心がないだけ之を默視することは出來ないのである。

米國大統領の對露政策なるものは、之を一言にして盡せば「露國民をして米國に頼らしむるにあり」といつて可いが、彼はその豊富なる財力と絶大なる國力とを以て徐々に而も確乎に露國民力の回復を期待してゐる、米國は此目的を以て經濟上及外交的辭令の援助に依り比較的温和の手段で、露國民の歡心を買はんことに努めてゐるのである。

先づ今日に於ける米國の對露政策は、英佛白等の軍事政策に引き代へ、平和手段に依つて露國民を獨逸の危險から覺醒せしめんとしてゐる。併し此英佛の計畫と米國の方針とは未だ妥協的計畫ないため英佛は共同し或は共同を餘儀なくされてゐるが、米國は單獨行動を取つてゐる。即ち西伯利より歐洲に至る輸送能率の増進を以て露國を救済せんといふ名目の下に遺露鐵道委員スチープンス少佐が二百幾十名の部下を率ゐてウオロクダに滞在せるが如きはその第一の例である。第二の實例としては、露國の窮狀救済のため、米國赤十字社の活動を實行せんとするもの、第三は露國にある軍需品を悉く米國に買収して獨逸の掌中に歸するを防がんとするにあるが、之には頗る多額の資金を要することは勿論である。併し目下政府が三百十億弗乃至三百三十億弗といふ巨額の收入を調達せんと計畫しつつあるのも、第三の目的を遂行する爲だと傳へられてゐる。尤も此の軍需品中には棉花及油を含んでゐる、然るに國家の利益と地方の利益とが相一致しない米國では、その南部諸州選出の議員中、政府が斯の如く棉花の買収をなさば、南部諸州の同産品を賣るに障害ありとの理由で大に反對運動を試みてゐる。

畢竟するに此等計畫の目的とする所は、孰も露國救済にあることはいふまでもなく米國は露國

の歡心を得て延て之を聯合國に及ぼし以て露國對聯合國の融和を計り、兼ねて露國民が聯合國に感謝すると同時に獨逸に反感を煽らしめやうとの計畫である。しかし彼の日本兵西伯利出兵に於ても極端なる反對説が相對してゐるやうに、本問題も亦幾多の迂餘曲折は免れないだらう。尤も米國がその露國對聯合國の感情を窮狀救済に據つて求めやうとするのは、平和を國是としてゐる國柄としては尤もの事であるが、第一困難なのは露國に於ける獨逸の勢力が、そんな位のことでは掃除することが能きるか否かである。露國人は開戦當時に於て已にその閣僚に獨探を有した國民である、露西亞は我等聯合國々民からいふと、獨逸のため亡びてゐるが、今にも露西亞は獨逸に依つて國を建つる方が、何れの國に頼るよりも最も容易なことであるさへいつてゐる。殊に從來の歴史的關係からいつてもまた地理的利便からいつても獨逸の露西亞に於ける勢力は、深く而して長く、逆ても他の列國の及ぶ所ではない、我輩は米國の情が却つて仇にはなるまいかと氣遣つてゐる、否寧ろ米國が救済のため貢ぐ財力は現在のままでは却つて獨逸の利用する所となりはしまいか、これは獨露の關係を幾分でも知つた人は、直ちに首肯されることであらう。

米國政府の日本出兵拒絶説

六月二十九日ロイテル通信華盛頓電報は、左の如く報せられた。

「非公式の報道に據れば日本政府は協商國に對して西伯利出兵要求を拒絶するに決したりと、但し當地の官界及協商國大使等は之を以て露國の復興を援助し、又獨逸の勢力東漸を打破せんとする米國及協商國の目的を棄却する意味には認めず、日本の出兵拒絶は實際其計畫に従ひ露國に於ける法律及秩序を回復せしめんと努力しつつある分子を掩護せる露國の親友(米國か)を鞏固なるものとして目せられ居れり。」

これに依つて見れば英佛等の聯合國が頻りに日本出兵を要望してゐるにも拘らず、米國は終に之を拒絶したといふことになる。米國の露獨關係觀察の立脚點及政策と、協商國の對露關係が其見方に於て根本に異つてゐるから味方揉めが起つて來るのであらう。協商國としては今日日本が出兵してくれば非常に助かる所があるが、それかとして米國を強要して出兵を承諾せしめ、若くは米國に反對して即ち米國を切り離して日本に出兵をして貰へば、米國がこれまでのやうに協商側に

對して努力してくれないだらうといふ心配もある。日本は日本で米國から英佛側を從來のやうに援助してくれないとすれば英佛は嘔困るだらう、彼等の困るのを豫期してまで出兵する必要はない、また義理が許さない位な考へで躊躇してゐるに違ひない。併しこれは到底百年議論し評議した所が纏まる可き筈はない、何故かなれば、前述の通り米國と協商國との出發點を異にしてゐるからである。のみならず西伯利が例へ大動亂になつた所で米國一家としては餘りに痛痒を感じない地位に居るからである。或は日本が出兵したならば何か日本は西伯利に對して野心を起すやうのことはあるまいかとの杞憂があるからである。また米國として西伯利に發展するのを日本出兵によつて妨げられるのは米國の損失であるからである。此に我輩は斷つて置くが日本が例へ出兵するとも、その目的は露西亞の救済と、聯合國の利益と、日本自身の自衛上との三つの外何等の野心等はないことである。日本は決して西伯利を第二の巴爾幹となすことを欲しない。然しこの儘で行つたならば露國の救済も、聯合國の利益も、或は之をなす事が能きずして日本は自衛上のためのみ出兵することになりはしまいか、米國人の所謂「西伯利は然くまだ逼迫せず」といふのは、日本が自衛上兵を出すまで逼迫してゐないといふ意味だらうか、獨禍東漸し印度亦獨逸の囊

手に罹るやうな危険状態に陥つてから日本が出兵するのは「日本を眼の上の癩と考へてゐる國としては都合が好いかも知れない」が聯合國の一たる親善國の米國がそんな横着な不道德な考がな

いことは我輩の讀者と共に確信せんとする所である。

さうでないとも米國參戰の意義も自ら消滅することになり、また米國は全然自家發展のため兵を遙々歐洲までも送つてゐるといふ侵略的意味になつて了ふのである。

米國の對支政策

米國の東洋に發展せんとするは、他の歐羅巴諸國の東洋發展と同じく自然の國である、少くとも米の經濟的に發展せんとするの趨勢は到底之を阻止し得べきものではない。而して今次の大戦は更らに此發展の勢を驚く可き程に激成した。我日本でさへ、戦時に膨張した事業の捌け口を戦後如何に調整して行くやを今から苦心してゐるではないか、況して米國の如きに至つては、其豊富なる資力を以て猛然として我東洋方面に發展して來るに相違ない、而して此發展の目標となる最も著しい所を尋ねれば言ふ迄もなく支那である。

米國の對支發展は、勢ひ支那と特殊の關係にある諸外國の所謂專屬的勢力範圍主義と衝突することである。外交的辭令を弄する事を避けて事實を有りのままに言へば斯く斷ずるの外はない。蓋し我日本を初め、英吉利や露西亞はそれぞれ勢力範圍を確定獨占して他國の侵入を許さない。要するに此等の諸國は其勢力範圍を擁して所謂門戶開放機會均等主義の文字通りの適用を許さない、而かも此適用を許さない範圍をジリ／＼と擴張してゐる。此等の獨占的勢力範圍が漸々に擴張されるものとするれば、他國が黙つて視て居れぬのは當然である。况んや初めから此種の勢力範圍を有せざるに於てをや、更らに况んや米國の如く早晚支那に大發展をなすべき必要に迫まられてゐるものに於てをやである。故に米國の對支發展を自然の勢已むを得ずとすれば、支那に勢力を有する諸國は、之と何等かの形に於て一種の衝突を感ずるのは亦已むを得ない、我等も亦少くも米國の經濟的發展と衝突を覺悟し、之を如何に處置して兩者の經濟的利益の調節を計るべきやを豫め攻究するの必要がある。

この意味の衝突は米國が餘程以前から自覺して居たことを記憶せねばならぬ、其一つの例は明治三十二年九月から十二月にかけて米國々務卿ヘーが我國を初め英、佛、露、獨、奧、伊の六國

に向け、支那に於ける機會均等門戶開放主義を提案した事である。恰ど此頃諸外國は、獨逸の膠州灣占領を初めとして、それぞれ租借地の確定を競争してゐたから、米國では餘程氣が揉めたものと見へて、將來に於ける自國の經濟的發展の妨害せられざらんが爲めに、勢力範圍又は租借地を極めても外國の既得の權利には何等干渉すべからざる事、又以上の地域内に於ける各國商船、各國商品は全然同等の取扱を受く可き事等を提案したのである。要するに之は自國の支那に於て有する、又は有し得可き權利の、將來に於て傷けられざるべき消極的要求であつた。然るに之は紙上に於ては大體賛成されたけれども、實際に於ては十分に尊重されないで、米國は終に積極的に進んで支那に自國の利權を設定せんと欲するに至つた。之は即ち明治四十二年十二月國務卿ノックスが、滿洲鐵道の中立を提議し、若し之を聽かずんば米國は進んで錦愛鐵道を布設すべき事を提議した事によつて露はれてゐる。之は日露兩國より翌年一月二十一日を以て町寧に拒絶せられて泣寢入となつたが、要するに此頃から米國の態度は餘程積極的になつて來た。此所置に對して世上には餘りに米國が無遠慮だとか、或は外交界の儀禮に嫻はないとか、又は言ひ出した事を直ぐ引き込ませて平氣であるとかいふ種々の批評があつたが、それ等の點はどうでも可い、

兎に角米國の人心は支那に對して消極的態度より漸次積極的態度に進んだことを認めればよいのである。

又其頃奉天領事たりしスーレートと唐紹儀との默契の結果米清同盟の説が起つたのも、考への中に入れて置く必要がある、之れも明治四十二年の出來事である。當時唐紹儀の親分袁世凱は段々排日に傾き特に滿洲に於ける日本の跋扈を抑へんとして、東三省の經營に大改革を加へた。即ち總督に徐世昌を擧げ、其の下に三省の巡撫として唐紹儀(奉天)朱家寶(吉林)段芝貴(黑龍江)を配し、而して唐紹儀を奉天に駐めて滿洲外交の中心たらしめた。此時奉天駐在の米國總領事スーレートは二十餘歳の青年を以て盛んに活躍し、或は法庫門鐵道問題を起し、或は粵漢鐵道借款問題を起し、米清兩國の接近を暗示して、交々我國の不安を激成した。此等の事から自然支那中央要路の人の間には、米清同盟を空想するものが起り、やがて米の好意に恃んで日本の跋扈を抑へやうといふ底の發案が、袁の容るる所となつて、團匪事件に關する賠償金の返却に對する答禮使といふ名義で唐紹儀自身米國に使用することとなつた。明治四十一年十月初、彼は本國を發し、暫らく我が東京に足を止めて、十一月八日橫濱を發し同月下旬桑港に着いた、傳ふる所によれば

彼は袁の密旨を受け福建省内に一海軍根據地を提供する條件の下に、米清同盟を締結せんと欲したることである。その後日本の新聞には十二月三日發紐育電報として唐の白室館に米大統領タフトを訪問したことを報じ、又十二月二十一日の電報は突如として「米國政府をして米清同盟に等しき外交上の聲明をなさしめんとするの計企は失敗せり」と報じ來つた。要するに米清同盟は一場の惡夢に歸して了つたけれども、之は必ずしも支那人の空想にのみ歸する譯には行かぬ。其年の夏、紐育ヘラルドの如きは、日本の侵畧的行動によつて米と清とは同様の損害を被つてゐるから、兩國は同盟して日本に當るべきであるといふやうなことを唱へたこともあるから、此同盟説の芽は、或は米國方面にあつたかも知れぬ。聰明なる政治家は無論斯かる愚論にとり合はないとしても、兎に角斯の如き思想が一部の米人の間にあつたことは之を見通してはならない。現に同盟説はお流になつたけれども、之に次いで清國と米國政治家との間にはいろいろ密接なる關係が出來、所謂三都澳問題なる厄介な事件もこれから發生したのである。三都澳は臺灣の對岸なる福建省の一港にて遙かに我が淡水港に對峙するものである。ここに支那政府が米國の金で海軍根據地乃至船渠、貯炭場を設けると云ふ事件が起つたのである、之には日本も餘程面喰つて嚴重な

る抗議を以てやつと收まりをつけたと聞いて居る。大正四年日支交渉の談判に於て、福建省沿岸に於ては造船所、軍用貯炭所其他軍事上の施設は何國にも許さざる事、又外國の資本によつて之を爲さざる事を約せしめたのも、その由來する所は蓋し偶然ではない。要するに這般の米清接近は一時の極端なる反對的現象に過ぎないのかも知れないが、然し兎に角、米人中には一部の排日支那人と相應じて、支那を助けて日本を抑へやうといふ考への者もあつたことは明白である。

終りに注意す可きは米國は明治四十五年三月、六國借款より脱退して對支政策の方向轉換をしたけれども、之によつて米國は全然支那に對する積極的經營の希望を拋棄したものは見る可からざることである。米國の脱退は畢竟片意地なるウィルソン一人の考へに出たもので、之が果して米國民多數の意見なりや否やは一の疑問である。且又支那經營から手を引くといふことは、少くとも今日の米國の大勢が許さない。故に大勢論の見地より判斷すれば、米國は今後益々東洋に發展の手を進む可きものと見なければならぬ。而して今日まで實は、米國は飽くまで所謂專屬的勢力範圍主義に反對して來つたので容易に他國と相並んで思ふ通りの發展をなし得なかつた。米國にして今後大に經濟的發展をなさうとするならば、或點までは不便であらうが專屬的勢力範圍

主義を承認しなければならぬ。少くとも既成の事實は、之を承諾してからかからねばならない。然るに今回の大戰が計らずも日米兩國を結び付け、支那方面に對する日本の優越權を認められたのは、日本としては大成功といはねばならないと同時に、米國としても其の膨大なる資本を特に東洋に限つては、日本を経て放資する、少くとも日本と協定の上放資すると定めた方が如何に利益であるか解らない、問題は唯果して米國が之を容れ得る雅量ありや否やである。若し不幸にして米國が之を容れなかつたならば、支那に於て日米の或種の衝突は免かれぬまい、我輩は豫めその覺悟と準備とをなさんことを我國民に計るのである。

米國の對日怨恨

一 米國の太平洋降服

我輩は日米問題の將來に於ては、彼の一部の排日思想及恐米病者等のいふ如く悲觀するものではない、然し米國と日本とは西伯利に於て相對峙せねばならないのと同時に、太平洋を以て互に

相隣接してゐる、従つて自然幾多の難問題が湧き出さないとも限らぬ。今茲にヤール、クロアの「旭日旗の織る處に如何なる意味ありや」の一文を翻譯して諸君の前に提出することゝしやう。以て米國人が如何に太平洋問題を研究しつゝあるかが解るであらう。

「此通牒亂發時代に於て我が國家の世界的偉力を過信するが如きことを措いて先づ我等の祖先が贏ち得たる光榮にして我等が失ひたるものを想起するも一興である、試みに見よ、我米國の國境は税關所に於ては尙ほ暹羅より墨士哥に至る地點を國境の如くに見做しつゝあるに拘らず、其實際に於ては此等の國境は漸次減少しつゝあるに非ずや、境界なるものはその國家の勢力又は發達に依つて定まるもので、その範圍は即ち其勢力の如何に依つて必要となるのである、敢えて地理上の區劃を要せんやである。

斯く肉眼を以て見能はざる國境は我太平洋上に於て存するのである、この舞臺たるや實に將來の大事件を演ずる所である、然れども有体に言へば我等は紅き血潮を曇らざる商戰に依つて將た又興業、外交等に依つて我米國はその國境たる太平洋より擊退され退却しつゝある。

今茲に過ぎにし歴史の一頁を緋けば一千八百六十年當時迄は我米國が世界海運上に於て貿易上

に於て世界の驚嘆に値ひする程の發達をしたのである。然り同時期中には我が米國程に急速の進歩をした邦國は他に見ることが出来なかつたのである、是れ即ちベットフォード及びセーラム時代の事であつた、當時我が米國船は海上到る處に航行し、七大洋沿岸中未だ世に知られざる港灣を開いたのである、故に米國旗は海外に熟知せられたのである、而してこの無數の小商船は太平洋上に於ても成功し、當時歐洲諸邦に競争者ありしにも拘はらず、此等無數の船舶は絶大の勢力を有するに至つたのである、ペリー提督が未知の日本を開いたのも當時より僅か數年前のことであつた。

日本の發達が今日の如くなるべしとは當時何人も何國も思つて居なかつたのである、又此邦國が俄然我米國の強敵たる可しとは豫期しなかつたのである、太平洋は實に米國の有であつた、哥倫比亞河が發見せらるる前に既に印度洋に至つた、我商船は廣東よりリバプールに對して茶を運送した、華盛頓が米國大統領として就任した後一ヶ年内には布哇貿易を企てたのである、太平洋上の貿易が如何に我米國に執つて早かつたかと云へば第一議會に於いて支那茶に對する租稅問題を議した事實に於ても之れを知る可しである、而して支那貿易に於て我米國海運業が英國の次席

であつたことに見ても判然である、世界の各海運國が此新進の邦國に勝利を譲つたのである、實に一千八百〇五年當時に於ける我米國の支那貿易は一ヶ年一千萬弗であつたが、今日のそれよりも重大視せらる可き繁昌であつたのである。

太平洋に於ける第一の汽船は支那貿易に使用せらるる爲に米國に於て建造せられたものであつた、即ちボストン會社が支那廣東に於て貿易を營んで居たのである、而してこの營業は桑港に於て米國商舖が開かれた時代より約五十年前の事である。

我米國の商業が太平洋に於て最も盛大であつたのは一千八百六十年である。其當時瓜哇の港灣に出入する米國の船舶は極めて稀れて米國々旗を見ること甚だ少なく、恰も瑞西のそれを見るに同様である。

二 東半球の一角

之れも一千八百六十年頃の事である、布哇の港灣には油くさいヤンキー捕鯨者が一ヶ年に五百餘人も滯留して居たものである、當時太平洋の遠洋航海に従事して居る船舶は九百隻もあつたが

其内八百隻は星條旗を翻して居た、今は亡んだマスカット帝國と貿易して居た米國船舶は歐洲諸國の商船を合した數に對して殆んど三倍もあつた、我等は廣東より紐育に貨物を輸送した墨士哥智利、秘露及び支那の貿易上最も重要な地位を占めて居た、故に一時我米國は支那貿易の輸出入十分の九を支配して居たのである、此等はボストンの運命を定むるに其基礎となつたものである、英國旗或はその他の國旗は既に太平洋上より驅逐されて居る筈であつた、而かも米國商業を害するが如きことはなくして之を追ひ拂ふことを得たらうと思ふのである、我等は自國製品を輸出運輸すること恰かも外國品を運送すること同様に盛大にやつて居たのである。

實に當時の前後五十年間は米國が東洋に於ける外交上の振興時代であつた、然るに今はこの時代の事も多く忘れられたのである、只日本を開いたといふことが能く記憶されて居るが、併し一世紀の昔には印度の彼方に強力なるマスカット帝國の横はつてあつたことを知つて居る者果して幾人あるだらうか、波斯灣よりサンヂムルに亘つた廣潤な邦國であつた、而かも一ヤンキー政治家は此のマスカット帝國のサルタント通商條約を結んだのである、親交を約したのであつた。此沿岸に上陸した米國人の難船者は皇帝自身の費用を以て米國のホームに歸らすことを望み給ふたや

うな事實を知つて居る者が何人あらう、千八百六十年我米國はポルチオと條約を締結し、暹羅と五十年間の通商關係を結んだ事實を知るものが幾人あらう、或は布哇王が米國保護の下に其邦國を保持せんと我大統領に親書を送られた事、或は我米國艦隊が臺灣の海賊狩りをして成功した事又は支那に於ける米國公使は支那朝廷の待遇した最初の外國使節であつた事等を知つて居る者は果して幾人あるだらうか、或は吾人が朝鮮と小戰鬪を構へた事、又は上海の重要工業區劃が嘗て米人居留地であつたこと及び或は膠州灣の一角は米人の殖民地であつたこと、又は我米國と比律賓群島との商業取引がマニラ灣内に於て我艦隊と西班牙軍との間に合戦をした當時よりも嘗て大であつたことを知つて居る者があらうか、一言を以て掩へばペリーが江戸灣の守備を冒して通商を日本に乞へる當時に我米國の有する太平洋上の商業關係が如何に今日のそれよりも比較的重要に且つ大なるものであつたかと云ふ事を知つて居る者が幾人あるであらうか。

千八百六十年は實に太平洋に於ける我勢力の絶頂を印した時代であると同時にその衰微の始めであつた、同盟義勇遠征艦隊は南米の南端ホノン岬附近からその姿を隠し、ニューイングランドの商船や捕鯨船は無數に散在して居たのであるが、此等も悉くその業を收めて本國に潜むに至つ

たのである、エムデン艦其他の獨逸軍艦が今回の戦争で太平洋を荒らした事件に比較して此等の小コンフェレート義勇艦隊は多くの海賊船を取り治め、能く捕鯨船や多數の遠洋航海船に安全な保護を與へたのである、然り南北戦争前にはニューイングランド沿岸を根據としてその海外的發展が盛んであつた、戦後は市俄古其他の中西部を發展の中心としたのである、かくして西部南部即ちテキサス、コロラド、加州その他の地方に對する商業企業發達が盛大となり遂に海運業に止めをさす迄にその時代の變化を生ずるに至つたのである。

三 太平洋の存在を忘る

ペリー提督が日本を訪問して以後四十年間米國は太平洋の存することを忘却して居たのである思へば日本の門戸を開いたのは一般に爾かある可く想像されたる如く米國の新功積時代の先導ではなかつたのである、然り之れ却つて成功の時期を閉ざしたのである、新たに無爲不變の時代を開いたものであつた。

米國南北戦争後我が工業家、政治家及財政家等の意は一に西部の富源開發に注がれたのである

斯くして米國の海運業は全く杜絶するに至つた、支那と米國との距離はその以前よりも遠隔の關係となつたのである、外交的に將た又經濟的に我が米國はその世界的外觀を失ひ、全く嬾妍楚々たる地方的美を現すに至つたのである。

デウエー將軍が西班牙艦隊を粉碎するに至り米國は再び太平洋を發見した、而して十九世紀の終りに於てベットフォード及セーラム時代の舊精神が復活したる如きの觀あり、太平洋上に於ける米國の活動は大に見る可きものがあつた、歴史の進みは迅く久しく豫期せられたる布哇併合は忽ちにして實現された、而して現今に於ける我等の時代に於ては之を以て自ら満足して居るが、五十年前に復活せる積極的政策の豫期せる結果なるものは決して之に限られたものではなかつた然り我等はグワム島を獲得し比律賓島を占領した、實に我が地理的國境を擴大すること遠く太平洋を横斷して之を定め得たのである、而かも我演劇的進捗は之を以て限られない、比律賓島内の團匪尙擾々たる間に於てヘー卿は支那の門戸開放主義を列強諸國の承認によりて確保するに至つたのである、即ち極東に於いてモンロー主義の發見兄弟を設けたのである、而して米國勢力を第一歩とせる支那内地々方に對し殊に急速なる發展策を講じたのである、此モンロー主義は支那に

執つては宛かも米大陸諸國に對すると同様の意味がある、否な確かにあつたのである、只之には二つの異點がある、それは(一)我南米に對するモンロー主義は他の列強に依つて協賛せられたものでないが、支那に於けるこの主義は列強の承認を得ると共に數ヶ條の條約を之に包含するのである、(二)他の異點は南米に於ける歐洲の侵害は猶微弱なるものがあつた、故に我南米隣邦は寧ろ此主義に對して感謝の意を示さなかつた、然るに支那に對する歐洲の侵害は甚だしく彼等に對して不快の感を與へ且つその利益を害しつゝあつた爲め支那は此主義の確保を喜ぶこと大にして、之れに依つて歐洲の勢力布殖を防止することを得たのである、故に此主義の確保は極東に於ける米國の發展第二期の第二頂點であつた。

今世紀に入りて數年間我海運業は其優勝の地位を回復することを得ざりしにせよ、太平洋の狀態は之れを南北戰爭に比して尙米國の大洋たる觀があつた、馬尼刺は如何にも米國風の都市として發達し東洋に於ける米國の觀を呈してゐる、日は我が西沿岸に没して數時間後其東方の群島には赫々たる旭日の登るのを見るのである。

我等は滿洲貿易に於て主要の位置を占めて居たのである、而してその將來に於ける發展の見込

みは充分あつた、我等は門戸開放主義を設け、北清事件の賠償金を返付し且つその港灣を租借して米國殖民地を設くる如きことを拒んだ爲め、支那人民は我等米人を以て最も親密なる友人と目して居るのである、斯くして米國の貨物は到る處の支那市場に於いて歓迎された、支那の政治家は我顧問を喜びその學生は多く遊學の爲めに送られた、又我等は朝鮮の開發にも努めたのである而して我等の要するものは單に再び米國の太平洋を回收し、その海運業を復活せしむるにあつたのである。

四 日清日露戦役と米國

我等が此美望せらる可き地位を保ち之れを楽しみ得たのは實に僅々五六十年の間であつた、然り支那開放主義を設け得たのは既述の如く我米國が太平洋に於ける第二成功時代の頂上であつた、而してこれと同時に衰頽に赴く初期であつたのである、殊にその太平洋上よりの勢力撤退たるや恰も我第二期發展がドラマテックに實現した如く甚だ突然の事であつた、千九百年後間もなく吾人は之を棄つるの止むなきに至つた、而かも何等の紛擾を起さずして當時有せる多數の特權も

勢力も之れを放擲したのである。

我が第一の損失は滿洲の貿易であつた、即ち日本は日露戦争に依つて一敵國を倒した許りでなく實に同時に二仇敵を破つたのである、其一是露國が帝國主義を以て極東の侵畧を企圖したる野心を碎き、他は米國の商業的野心を斷たしめたのである、露國は暖水港を得んが爲めに滿洲市場を開きつゝあつた、故に若し米國にして其商業的機會を固執せば日露戦争に依る日本の獲得利權は甚だ小なるものであつたのである、然り日本は一方に於いては露國に勝ち他方に於いては米國を破つたのである。

日露戦役中には日本は滿洲より米國人その他の外人を悉く追ひ拂つた、此禁足令は戦後に於いても一ヶ年繼續せしめた、米國人が愈々滿洲に來ることを許された當時は既にその大なる商業利益は死んで仕舞つて居たのである、外人商業排斥の棍棒は振り廻され、類似商標の窃用は頻りに流行し、而かも日本商人に對しては運賃の割引がある、此等の便益は遺憾なく日本雜貨を滿洲市場に紹介した、肝心要めの鐵道が日本の支配に屬しつゝあるを以て又如何ともすることが出来なかつたのである。當時日本商人の如何に多く米國商品の商標模擬をなしたるかは今尚日本の大

都市に於いて、容易に之を知ることが出来る。試みに日本人八百屋に於けるオレンヂを見よ、その自國産オレンヂの包紙には加州「サンキスト」の名を署し、大坂市に於て製造せらるゝ石鹼にはアイポリソープの偽物がある。

將來の歴史家は恐らく日露講和に關して東洋に於ける美妙の笑草を發見するであらう、抑々日露講和たるや米國の暗示で米國內に於いて調印せられたものであつた。而して米國人の環視中に其局を結んだものであつた、斯くして米國人はその外交の成功に自ら満足する處が多かつた、之れは日露兩軍が鎬を削つて戦つた地方の米人商權及びその投資事業を保持し得べしと信じたからである、奉天は米國の要求に依つて、外國貿易地として開かれたる都會である、然るに今や日本の滿洲商業に關する中心地となつて居る。滿洲は實に我米人にとつては封鎖されたのである。米國人は一人として境界内に鐵道敷設の權利がなく、電話電信の設計をもなすことが出来ないのみならず、一噸の石炭も一英加の耕作も之をなすことが出来ぬ事になつた、米國は斯く迄にその勢力を減退したのである、是れ其第一退却であつた、然らば我米國の第二退却とは何であるか。

五 米國の大損失

米國の第二の損失とは何ぞや、曰く朝鮮の放棄是れ也である、即ち滿洲を棄つるや否や時を移さず我が第二の退却が始まつたのである、我米國は久しく此不幸なる但し有望なる邦國に於て勢力を有して居たのである、抑も朝鮮が泰西諸國と通商條約を締結するに至つたのは我が米國が之れに先鞭を付けたからである、既に米國人の頭には何の記憶も残つて居ないが、當時の條約文を見ると兩國政府は友情を示す爲に若し他の邦國が不正の侵害をなす場合には互ひに調停の勞を取るべきことを約したのである、故に朝鮮人は之を重大視し米韓兩國は攻守同盟を結んで居ると解して居たのである、而して少なくとも朝鮮在留の米國人に對しては此意味の態度を示し大に好遇を與へたのである、而して在鮮米人には此種の重大責任を感じて居たのである。故に京城の水道も朝鮮の釜山もその最初の鐵道も京城街鐵も市區改正も凡て米國人の建設に係るものである、余の思ふ處にては米國土以外の海外では米國風の右方回轉主義を執つた街鐵は只此京城の街鐵のみである様だ、然り朝鮮はその邦國の發展を凡て米國式にせんことを望んだのである、即ち米國願

問の注意を容れその投資を喜び迎えたのである。

然るに當時日本は急激に露國の勢力を朝鮮の北方境界より驅逐し、その併合計畫に熱中しつゝあつた朝鮮王妃弑殺事件の如き慘酷なる芝居は日本の代表者に依つて行はれたものであつた、又其朝鮮に對する國辱損害要求の如きは明白にその不正の壓迫であつた、故に當時朝鮮は米國に對して其援助を乞ふたのである、勿論鮮人は米國の武力援助を豫期して居なかつた。然れども彼等は慥かに我米國の有力なる援助を乞ひ得ることを信じて居たのである、在布哇の朝鮮人八千名はその代表者を華府に送つて米國の干渉を願つたのである、その書中には米韓條約に依れば「我等の米國に對して其援助を要求し得べき條項あり、而して目下は我等が最も此援助の必要を認むる際なり」云々といふ文句があつた、而かも在鮮の米國人は日本が飽迄此米韓條約を無視せんとするの態度に驚いたのである、故に早速華府に電報を打つて米國政府の盡力を促がしたのである、覺醒を迫まつたのである、然れども此等の請願は何等の功がなかつた、華府政府は之れに反對を主張することなく何等の理由無しに其公使館を撤退して朝鮮の殖民地たることを默認したのである、斯くして日本の併合後は布教事業を除き、朝鮮に於ける米國人の事業は悉く中絶の有様となつた、更らに近來は朝鮮に於ける米國宗教學校に對して制限を加へつゝあるを以て所謂「朝鮮」の國土に於ける我米國の光威は全く亡滅するに至るものである。

朝鮮を援助すべき義務を負へる我米韓條約は朝鮮人に依つて甚だ重要視せられたる如く日本人も亦事實之れを重視したのである。故に日本に於ける排米思想は加州に於ける日本人排斥又は土地問題の惹起する以前に於て既に業に存在して居たのである、米國は飽迄小王國の保存を主張するであらうと豫期したのである。日本の抗議に反して我米國が布哇を併合し、滿洲に於ける我商業の活動は痛く日本人の感情を害し、是れ日本人をして移民問題以前に於て排米觀念を抱かしめたのであつた。

六 洋上の退却

滿洲及び朝鮮に於ける我が敗北は僅かに比律賓群島の保存を殘した、而して支那に於ける門戶開放主義建設の餘勢を認め得たのである、然れども歐洲大戰の開かるゝや此門戶開放主義は遺憾なく日本の爲に攻撃された、敢て吾人は茲に日本の對支要求なるものを詳論するの要がないが、

元來門戶開放主義なるものは支那に於ける列強の機會均等及び領土保全を約せるものである、然るに日本は自稱後見者となつて支那の市場をその利益の爲に保有する、且つ滿洲併合の準備をなし、假令全支那を統治することを期せざるにせよ必ずこの滿洲はものにする所存で居る、勿論支那の門戶開放主義は殆んど死んだと云ふ如きは云ひ得ないかも知れぬ、而し既に其致命傷を受けた事は事實である、而して我米國に對する公正の支那であつた歴史と友情は全然消滅する事になつた。

曾つて、日本が支那に對して最後の通牒を發し、且つ北京の城廓を攻めんとして既にその軍隊を大陸に上陸せしめた、當時支那政府はその最後の瞬間迄回答を延引せしめたのである、そは米國が僅かに十五年前に建設し得たる門戶開放主義を保護し防衛する爲めに一言日本に對して言ふ處あるべき事を一縷の望みとして居たからである、然るに我米國當局者は何等言ふ處がなかつた斯くして支那は止むなく日本の高壓に属することゝなつたのである。

我が最後の退却は即ち目下問題となつて居る比律賓放棄である、之れに依つて米國は益々太平洋に於ける勢力を減じ、其開國以來未曾有の微力となるであらう、我祖先の臥薪嘗膽に成れる成

功も之れを失ひ、世界の殖民史上に於て錦上華を添えたりし我が殖民發展史も之れが爲めにその聲名を貶すに至るべきである。曾つて英國が五十年間に於て印度殖民に成功したるよりも更に急速であつた比島の發展も之を無にする譯である、舊比島の威は全く失つて今や新古なる米國殖民地としてその有望なる光景を示して居る、比島も何の甲斐なく棄てらるゝのである、島内の人民は漸く一國語の下に教育せられ政治思想を鼓吹せられ、他の亞細亞人民に比して大いにその自治的精神に富むやうになつた、勿論布哇及びカイロー人民に比して遜色なく却つて優つて居る、否な日本に於ける地方自治又は其國政よりも組織的に進捗して居る、比島の有権者は能くその投票を尊重すべきを知り、この權利を善用する日本人が今尙之を夢みつゝある處の投票權力を有して居る、其投票權者の範圍も日本に比してその範圍が廣い、故に同島が全然獨立し得る場合の到來又は時機がある、比島の今日に於ては我米人は其礦山に山林に耕地に多額の投資をして居る、然るに我米國當局にして之れを放棄すれば此等の事業は墨國に於ける事業に比して更に危険である、團匪の蜂起は鏡にかけて見る如く明白である、我等が考慮しなければならぬことは墨國に於ける實例である、殷鑑遠からず大に戒しむべきに非ずや、墨國に於ける米國人の事業の荒廢は勿

論米國外交當局者の方針が與つて力あるものである、墨國を去れとか充分の保護をなし得ずと云ふ如き政策は全く米人の事業を破壊するものであつた。然れども事業家は若し政府にして保護を加へ得ずとせば我事業の此處に存する限り自衛の策を講ずると言明して大いに奮闘して居るものもあつたが此等不都合なる事實は尙比律賓群島に於ても豫期しなければならぬものである。

七 終に日本の勝利たらむ

我が米國が比律賓群島を放棄するに至らば米國の西方國境は布哇た以て限らるゝに至るべきである、然して支那に於ける我門戸開放主義、滿洲に於ける投資事業の朝鮮に於ける有望状態は勿論、最後に比島の所有を失ふ事は是れ僅かに歴史上の事項として世の物語りに殘すのみで、若し彼等にして再び之れを得んことを決して血を見ずに成功を期することは出來ないのである。然らば我等は何故に斯くの如き太平洋上の退却をなしたのであるか、而してその退却に依つて生ずる眞實の結果は如何。

二十年前には滿洲は我が綿花事業の大顧客であつた、故に米國有数の財政家中之れが爲めに其

資本を投じたものも少なくなかつた、然るに日露戦役は我米國の綿花紡績業に對して引續き大打撃があり、遂にその輸入の市場であつた牛莊にある米國領事館は何等設置の必要を認め得ざるに至り、數ヶ月前に國務省の命に依り之れを閉鎖せられ領事は免の字となつた。思ふに過去十年以來に於いては假令一弗の資本と雖も米人に依つて滿洲に投せられたものがない、是れ如何に我米國の利權が此の方面より驅逐されたかを證すべきではないか、朝鮮に於てもその併合前には米國の資本が盛んに融通された、然れどもその事業の多くは日本人の經營に變じてしまつた。朝鮮が日本の殖民地となつた以來一弗の米貨も之に投せられた話を聞かぬ、我等の貿易は尙其米韓の舊條約に依つて保護されて居るが之れも其滿期近くなつて居る、滿期後の關稅は到底今日の如き便利なく我國産に對して高率の關稅を課せらるゝに至るは明白である、故に朝鮮に對する我貿易は單に日本が之れを供給し得ざる貨物のみに限らるゝ事となるのである。暗黒より逃がれ去つて文明の幸福を得んとする數百萬の朝鮮人は著しくその進路を變更するに至つた、即ち彼等の學べる米國思想は日本のそれに變じ基督教義は之れを神徒主義に替ゆるに至つた、而かも外國語として必要であつた英語修學は日本語研究に移つたのである。

支那に於ける門戸開放主義の破壊は朝鮮に於ける結果と殆んど同様のものを實現しつゝある、日本が支那に於ける勢力布殖は著しい。米國の鐵道敷設もその企業範圍も之れが爲に大々の制限を加へられるに至つたのである。福州に於ける造船業船渠築造及び武庫設立契約の如きも遂に立消えとなつた、殊に彼の漢冶萍製鐵の如きは支那のクルツプと稱せらるゝものにして、事業が其緒に就いて漸く數年將に大事業たらんとするに至つて日本はその特權を自ら收めて米國の投資を拒ましむる事となつた、斯くして米國太平洋沿岸の供給よりも安價に競争し得んとしたる折角の大事業も米國人の爲には全く畫餅となつたのである。

比島引揚げ後に於ても勿論其貿易を失ふに至る事當然である、目下の比島市場は米國品には自由供給の便利がある、然れども斯くの如き事實はその獨立後に於て之れを期し得べきでない、恐らくは我が商業の門を閉ざすこと滿洲と同様であらう、然りかくして太平洋は最早米國の有ではない即ち日本の統治家に在るものである、我等が退却すると同様の割合に日本は前進しつゝある日本はその船舶の航路補助として年數百萬弗を消費して居る間に米國旗は全くその奮領を棄て、太平洋上よりその姿を没して仕舞ふ、然り今日の米國政策が果たして賢明なりや否やは將來の歴史家が之れを判斷するであらう、思ふに彼等は過去四十年間に於ける我内國事項が遂に太平洋を失へる原因たるを結論するであらう、而して既に撤回したる國境が再び之を求めその貿易を回收するの要ある曉に於て彼等は果して平和の爲めにその權利も理想も喜んで之れを捨てんとする國家の卑怯を如何に説明せんすべきか。

支那問題と日米の衝突點

米國は「支那門戸開放保護のために日本と戦ひ得可きか」と云ふ事に付て深く研究してゐるらしいが、其適否は第二の問題とするも先づ代表的意見としてオーケー、デービス氏の「極東に於ける日本の活動」を記載して見やう。

「日本と戦ふの道は支那を通して存在する、若し我米國にして日米戦争を開始せんと欲するならば此道を探るを以て容易とする、然れどもその開戦後に於ては甚大の困難あることを豫期すべきである。我米國市民が日米戦争を開かんとしてその決心をなした時は彼等が容易に此亞細亞本土に關して自由にその口實を經、開戦の機會を受け又はその戦因を發見することを得べく此等の名

稱は市民の選擇自在たることを得るのである。彼等をして支那に於ける支那の發展計畫に干渉せしめよ、彼等をして舊中華帝國の人民及び領土の上に深慮と周到の用意を以て日本帝國を建設しつゝある日本の企圖を妨げよ、彼等が之を爲したるとき、次に來る可きものは實に莫大なる戦備を爲さざるべからざることにあることは明々白々の事項である。

何となれば日本は支那に着眼すること甚だ密である、その眼光は常に此大陸に注いで居る、我等は長時間に亘つて日米戦争を喋々した、而も極めて不注意に甚だ怠惰に之れが論述に耽溺した何人と雖も之を禁せんと動めなかつた、而かも或者は此戦争を容易になし得べきを信じ之を輕妄に企圖するものがあつた、我等の多數はその戦因を隨時に認め或は移民問題或は支那問題或は比律賓問題を以て實現し得ることを説き愚なる主張を反覆した、疑もなく比律賓群島は我等が之れを保留する間は防備の必要がある、然れどもその時と金と人を費して之れに強力の防備を爲すは我米國政府は如何なる當局者が之れに衝ると雖も此努力を爲すべきや否やは寧ろ問題外の事項である。

比島が今日の状態に保持さるべきは之れ結局の事實にして比群島に對し更に大資を投じて國防

を爲すが如きは不可能である。故にその現状に於いて若し日本が我米國と交戦せざるを得ざるに至らば勿論比島は日本の攻撃地點として好適の地たるや明らかである、然れども日本は比島の運命に關して我等と戦争はしない、日本は我等に對し幸運の人質となつて居る、比島の運命に就て多く考慮しない、只他の原因に依つて日米戦争を開始することあらば日本は先づ第一に比島を扼せんとするは當然にして我等は勿論之を豫期しなければならぬ、然り日本が眞に之を欲するものは支那である、比律賓群島ではない、而も日本の保持せざるべからざるものは此支那である、何となれば日本が必死に求めて居る出口を日本に與へ得べきものは支那である、我等は之を以て單に日本の野心として考慮すべく慣らされて居る、而かも主として軍事上の野心と解し此野心が日本を嘔つて此處に至らしめたものと解釋し來たのである、然れどもその野心の背後には強固なる經濟上の必要が潜んで居るのである、之れが救済の道としては僅かに唯一の方法を有するのである、即ちその人口過超に對する日本の救済策は眞剣にして他より拒絶され得ない必要である。

日米兩國人間には斷定的葛藤を生ずる數ヶの點がある、之れを認識しないといふことは怠惰である、愚である、我等は日本人を好まぬ、何となれば彼等は經濟的に我等を破り得る能力がある

からである、彼等は我等よりも低廉に産物を賣ることが出来る、我等は彼等が我等の市場に來ることを許し得ない、彼等は我市民と同一條件の下に於てこれを破ることが出来る、若し我等にして彼等に自由入國を許さば彼等は我國土より我等を驅逐する我邦土は最も彼等の注意を惹いて居る處である、これには多くの理由がある、殊に彼等の好むものは西沿岸である。

日米は到底相容れず

日本人が何故に渡米を欲するか殊に西沿岸地方を好むかは氣候の佳良なると高給を得ることが出来るからである、一般に日本人は節儉である、故に彼等は米國人よりも低廉なる給料を得て相當の生活を爲し得る、彼等はその數年間の蓄財を所持し母國に歸つてホームを營むのである、日本人は又我等を好まぬ。何となれば我等は優勝の權威を以て彼等を高壓した、彼等はこれが爲に大いにその人種的驕傲と個人的自尊心を損傷されたからである、我等はヨシ人種的ならざる迄も彼等に對して社會上の對等を拒んだ彼等が我等に憤怒するのは是れが爲めである。

嘗て桑港市民が日本學童隔離問題を起し單に日本人たる理由を以てその公立學校より放逐せ

んとするや忽ち日本人の逆鱗に觸れた。日本人は決してこの侮辱を忘れない、我市民は永久に彼等の寛恕を受くることは出来ぬ、加州土地問題に就いては日本政府はその不作爲の牢獄中には是れを投じた、是れは日本政府が好んで此方法を選んだのである、當時斯くするを以て好都合と認められたからである、然れども此等の問題は日本の都合に依つて何時にても復活せしむることを得るのである、日本人民が此問題に依つて深くその屈辱を感じて居ることは日本政府が執つた手段とは別問題である、日本政府はその冷靜なる處置を執るに時機を誤らなかつた、人民は政府の決意をする迄待つて居る、是れ彼等が欲するものはその最上の策なるを以てある。

何となれば日本は漸次民權擴張の域に進んで居るとは云へ尙中央集權の強い國である、政府の態度が明瞭ならざればその輿論の力も微弱である、然らば日本政府の欲する者は何であるか、曰く支那である是れを欲する理由は如何、然り支那否支那のみ彼等に對して其絶對需要の出口を供することを得るからである、日本は元來小群島國であつて、稱して本島といふ、その最大島即ち東京、京都、大阪、神戸、下關及横濱の如き其主要都市所在地は日本全土の過半面積なりと雖も僅かにカンサス州のそれよりも大ならず、而して日本全部一百餘の島嶼を合するも十四萬七十六方哩

に過ぎない、是れを我米國の一州に比すればモンタナ州の面積に相當するのみである。然るに今日此狹隘なる地方に居住する日本人老若男女は實に五千三百萬の多數である、而してその大部分はその本島に住するものである、この事實に依つて我米國市民は果して、試みに我モンタナ州内に五千三百萬の人民を移殖せしめたりと假定せよ、然らば一夜にして彼等が米國各州に大移動を爲し、モンタナ州に於いてはその一方哩に適合する平均定住者に減する迄其移動が續行され離散が實現されるに相違ない、又假りにその五分の四即ち四千萬の人民をカンサスに移住せしめたりとせよ、その結果は果して如何、急忽退去せんとするものなきか、豈に夫れ獨りカンサスのみならんやである。

假令カンサス州内にはその六分の一を收容し得るとするも六分の五はその州境に立つて居なければならぬ譯である。是れを見ても日本人の海外移住が當然の必要といふことが判明する、或は曰く支那人程農業に熟練しその能力を有する人民がないと是れを實證的に論述する者が多いが、一度日本の地を踏みてその農作状態を視へ、僅かに三本の草が繁茂して居る地と雖も是れ日本人に執つては少なくとも二人位のルームになつて居る事を發見し得べきである、此等は僅かにその

面積モンタナ州の如き地上に五千三百萬の人民が密居して居る一結果である、然れども是れ決して日本經濟問題の總てを意味するものではない。

米人の認むる日米協約の價值

華盛頓スター紙は先頃締結せられた日米新協約に付て皮肉なる反問をなした、「若し日本が他の何れの國に對しても支那に於て優越權を有つてゐる理由を其領土の接近せるがためといふならば他の何れの國よりも遙かに廣大な接觸點を亞細亞に有する露國はそれに相應じ、且つ非常に大なる優越權を支那に獲たであらう。

米國が承認したと稱する優越權なるものは如何なる價值のものであるか、過去の經過に徴すれば、米國の外交は實際の政治及經濟上の事實を認めたのであつて、特權抱負或は意志を承認したのではない、斯の如くにして千八百二十三年に時の大統領モンローは西半球に於ける歐洲諸國の政治上特殊の位置が存在することを承認した。千八百二十三年國務卿ヘイは支那に於て各國の利權及び勢力範圍の存在を認めてゐる、石井ランシング覺書に關し支那政府自ら聲明せる態度より

判斷するに、支那に於ける優越權なるものは對支那との現行條約の上に實際獲得したる利のみに關するものである、日本に付ては如何に日本が解釋するか見ておなければならぬ。

支那は弱國でその國民はそれを自覺して居り、支那政府は自尊心に富むで近年非常に苦い経験を嘗めて居る、支那は短氣でなければ子供らしくもないので善い意味に於ての神經質で理解的である。故に友邦國は此點を特に考慮しなければならぬ、日米兩國がこの場合に新たな協約をなしその發表をなしたといふことは斯かる考慮をなしてゐなかつたやうに思はれる。支那が誤解することは無理ならぬことで華盛頓に於ても初め支那が覺書を讀む時には不快を覺へるであらうと言ふことは豫期してゐたが、併し支那をして新事件に對し満足せしめ且つ適當に了解せしむべき準備は一もされなかつた。急に驚かされたために支那は急速にそして恐らくは充分に思考することもなく、憤慨でない迄も尠くとも協約の締結された方法に對して遺憾とする旨を發表するに至つた、支那政府が受取つた第一の公式通牒は協約が成立したといふ、日本政府からの發表の形式であつた。そして駐米支那公使は公式の通牒を北京から受取つたのである。

併しながら斯かる方法によつて通告されたのは獨り支那のみではない、米國でも又日本でも國

民に向つて何等の準備を與ふることもしなければ豫告を與へやうともしない、それ處でない一般國民は新聞を通じて如何なる協約或は政治上の計畫も交渉されてはゐないといふことを信じさせられてゐたのである。石井特使が布哇に着した當時から繰り返し々々特使來訪使命が戦争にのみ關するものであると聲明されてゐた、故に自然この協約はそれに關する人民全體の利益を向進する他何物もないものであらうか、其内容には何も惡意あるもの或は隠れたる事實は存在せないのであらうか、何故に秘密に急速に而かも排外的に協約が締結せられたのであらうかと言ふ疑問を生ずるのである。

日本の優先權とは何ぞ

斯ういふ具合で秘密から秘密に葬り去られた此新協約なるものに唯一つ新事實即ち支那に於ける日本の優越權を米國が承認することが含まれてあると言ふ結論の一致がある。是は日本が摘發した如く既に諸外國が認めてゐる處で、米國のみが承認してゐなかつたのである。千九百十五年の五月に米國は支那に於ける日本の特權を含む如何なる協約も其効力を認めないと宣言した。降

つて本年六月に内政問題に付て直接支那政府と交渉した際にも米國は支那の事件に對して日本が優越權を有する等いふことは毛頭考へてなかつた。故に支那人は主張と憂慮とを以て、何故今日に至り米國は日本が支那に於て特權を有するといふ肯定をなすのであらうかと質問するのである。「領土的親近は特種の關係を生ずることあり」といふことは特別の利權或は權利を與ふる理由にはならない。利益問題に關する優先權を除いて他の優越權なるものは吾人が支那に向つて統治權の全行使を否認し、覺書中他の部分及他の約束効力を構はぬことにせぬ以上は、日本に絶對許可することは出来ない。併し若し協約にして或種の優越權を日本に認むるものでないならば、如何なる新事實を有するのであらうと支那人は質問するのである。支那の領土保全は尊重され支那の開放は持續せらる可しといふことであらうか、此の事ならばケイ氏の覺書より最近石井氏の力説に至るまで日本は繰返し日本との條約にも支那に對する聲明にも、諸外國との條約にも又は日本政府の宣言にも其主義を公表して居る。

要するに本協約に認めらるゝ日本の支那に對する優越權なるものは何も新しい權利の獲得や利權の占收ではなく、唯從來米國のみが認めてゐなかつた日本の支那に於ける權利を認めたままである。紐育イブニングポスト紙のいふやうに「此協約を土臺として若し吾等が特種の行動に關し東京と一致せぬ場合があれば何時でも抗議をなすことを得る」性質のもので、米國では一般に「若し米國がこの協約に反對して石井子爵が空手で歸國したならば反對黨は非常な勢力を得たであらう」と即ち石井子の顔を潰さないまでに之に承認を與へたまでのことで、決して特殊の意味の存するものではない。

◎米人の見たる日本の對支政策

大膽なる外交政策あるのみ

日米の親善を標榜し、平和主義人道主義を國是とする米人も我極東に對しては極めて非平和主義で非人道主義である。否神經過敏である。ノックスの滿洲鐵道の中立宣言や、ウイルソンの六國借款脱退や、悉く米人の神經過敏から來たものである。曩きの日米宣言に就いても所謂外交的辭令を除いては、米人の多くは日本をして東洋の盟主に推すのには種々猜忌の眼を放つてゐる、少くとも彼等は「日本があゝいふから何れ何とかなるさ、暫らくの間だから日本に任せて置く」

といった風に日本の對支政策を見てゐる。殊にウォルア、ウォルクの如きに至つては「日本の對支行動中には吾人の憂とせる獨逸人の虚偽よりも一層注意を要する或るものが潜んでゐる、否、少くとも潜在してゐる。日米兩國は單純なる表面上の辭令のみに依つて、難局を蔽ひ以て禍根を生長せしめんとするよりも、寧ろ互に事實の前に面接して解決を速かならしむると可なりと信ずるものである、吾人及日本が此問題に對して採る可き方途は、一に大膽にして友誼ある外交策あるのみである。支那の門戸開放及び領土保全に對する日本の態度に就て、更らに奮と同じき不安を感ぜざるを得ない場合に立ち到つたのである。」といつてゐるが、これが米國々民一般の對日感情と推測であると思ふ方が我輩の考へである。我輩は過去の日米問題中殊に移民排斥問題に付て米國に對して不愉快を感ずるものである、米國は何時もいふ通り平和人道を以て國是としてゐる、しかし米國に依つて苦しむつゝある、或は米國國是と矛盾せる政策の結果たる黒人九百萬の壓迫を考へた時、米國また頑強なる帝國主義の唱導者たりと斷言するに憚らないのである。

平和と人道に人種的偏解があらう筈はない、一視同仁を主義としてゐる米人に日本移民を排斥し、黒人を驅逐する政策がとれやう筈はない、是正しく米國々是の矛盾である。彼の常にいふモ

ンロー主義にした所で、此を東洋までも擴大するならば何にも態々モンロー主義などといふ必要はない、それは獨逸の世界政策と何等異なる所はないではないか。我輩が米國に要請するのは、米國が米國に於てモンロー主義を宣言するやうに。日本が東洋に於てモンロー主義を宣言するは快よく認容して貰いたいのであるとの一言である。若し之を互に承認することが出来なかつたらば、ホーマーク將軍ではないが、やつぱり日米戦争は免かれなだらう。

◎米國參戰の眞目的

一 モンロー主義の擴張

元來米國の外交に對する方針はモンロー主義の一點張であつた。而して此モンロー主義にも二方面があつた。一は南北亞米利加に於ける獨立國の問題に關し、歐洲列強をして干渉せしめざることを、二は米國合衆國は歐洲に於ける問題に關しては全く干渉主義を固守することであつた。之が爲め米國は終始外交上に於て孤立の状態にあつた。而して歐洲列強と外交問題に付き或る特殊の協約を締結するか、又は同盟條約を締結するか云ふことは、合衆國の建國の主義に反す

るものとしてゐたのである。然るに今回の歐洲戰亂に對し昨年四月米國は獨逸に對し宣戰を布告し、聯合國と歩調を對にし、此の大戦の渦中に投ずるに至つた。這は從來合衆國が固執し來つた處の方針と全く異なるものであるといはねばならぬ。加之米國の歐洲戰亂に参加せることは、歐洲大戰の大勢に最も深甚なる影響を與ふるものである。故に米國の參戰に付ては種々なる議論がある、而して其真相を知ることがは、歐洲戰亂の大勢を判斷するに就き最も重要な問題である。

先づ我輩は第一獨逸に對する米國人の憤怒を以て其參戰の目的として掲げたい、米國民はその戰爭の發端に於て獨逸が條約を一種の反古といひ、之を無視し白耳義の中立を侵害したることに付き、獨逸に對して甚しく反感を有するに至つた、蓋し米國民が多額の義捐金を爲して食料品を白耳義に送り、白耳義の窮民を熱心に救濟せしも之が爲めである。勿論合衆國民の人道に對する感情が白耳義民に對して多大の同情を表するに至つたことは事實である。併しながら白耳義の窮民を熱心に米國民が救濟した反面には、獨逸の中立違反に對する反感は多大なるものであつた。加之獨逸は多數の間諜を使用し米國に於ける獨逸系の人民を煽動し、米國に於て反英國の氣勢を鼓吹せしめ、動もすれば米國の軍器彈藥工場等に於て労働者を煽動し、同盟罷業を企て甚しき

至つては工場を破壊するが如きも決して稀ではなかつた。而して米國に於ける獨逸大使館付のメキシコに於ける陰謀等が暴露せらるゝに至つて思慮ある米國人も益々獨逸人に對して惡感情を増大せしめた。

而かもルシタニア事件は、米國民として堪へ難き侮辱なると共に、米國の輿論は最早開戰熱の頂上に達して了つた。其上獨逸潛航艇政策は對歐貿易の大障害となつて最早米國は中立國としての利益、或は同情を寄ることが絶望となつて了つたのである。

その第二の源因は「若し獨逸が勝つた場合」或は「聯合國が勝つた場合」を豫想した米國の恐怖であつた。前者は獨逸の世界政策即ち中歐大獨逸帝國の實現に對する米國の恐怖である。言葉を変へて曰へば、獨逸の勢力が強大して中歐大帝國を建設し、小亞細亞から波斯、波斯から印度に及ぼすのと、一は露國を通じて極東に及び、他は地中海の海上權を握り重ねて太平洋に出で、或は南洋諸島を其勢力圏内に入れた場合を豫想すれば米國の將來も亦危しといふ可きである。その上南亞米利加、或は墨西哥方面に於ける獨逸の襲來は如何に米國人の神經を刺激したか分らない。

或は一部論者のいふが如く、米國は中立國として最も長く獨逸と國交を結んでゐた國であつた。それだけ彼は獨逸をよく知つてゐる、彼のゼラード(駐獨米國大使)等が如何にしても獨逸が勝つと信じてゐるにも拘らず、米國大統領の師父兼顧問といふ格のパークス大佐は最早獨逸の壽命も長くはあるまい、今聯合國に加擔して居れば、後日講和談判の時幾分の發言權を得るだらうといふこともあるが、これは餘りに穿ち過ぎたことといはねばならぬ、なる程此頃のやうに外交が悉く打算的になつてゐるから、各國決して自家の利益とならないことには手を出さないが、米國今日の奮發から見ても然く推測するのは禮を失する甚しいものである。然し或程度まで參考として置く必要がある。

それでは、聯合國が勝つた場合は如何かといへば米國の最も苦痛とする所は英國の發展である。「日の没らぬ」といふ位だから、英國の植民地は到る所にある、此尨大なる植民地に於ける英國の植民政策が、此頃米國のそれる發展策即ち南洋、南米に於て、殊に東洋に於ては、何時も英國の次位に坐はつてゐなければならぬことになる、これも米國としては随分苦痛なることである。それと今一つは米國の尨大なる經濟政策から來たことも亦争はれない事實である。經濟政策

に就ては後日更めて論ずることとして、此には米國の參戰の眞目的の概念を捕へて置くことにする。

米國の取る可き國際政綱

今後米國の取る可き國際政綱に就て米國政論家ウォルターリップンの唱へてゐる説は頗るに値す可きものと信ず。彼は

「此の複雑なる問題の解決方法を講究するに當つて、先づ世界各國の地位目的等を一通り識別して置くことが有用だと思ふ。今日世界の舞臺に立つ國民といへば先づ第一が英、露、獨、日、米の五大國だと思つてよい。この五大國が各々世界政局の首要動因となつて、國際上の大勢を支配する。次が之を圍繞して動く第二等國である、即ち佛、伊、澳、匈の三國である。此等の國は固より國として國際上重きをなすだけの勢力はあるけれども、終に獨力を以て世界の形勢を左右することいふまでには至らぬ。此の次に更に第三等國がある。即ち羅馬尼、勃牙利、スキャンデナヴィヤ諸國、亞爾然丁、智利の諸國であつて、伯刺西爾も恐らくこれに入れてよからう。世界の形勢を

打算するには此の第三等國をも是非念頭に置かなければならぬ、各自左までの勢力は無いにもせよ、其れが甲方に傾向すると乙方に偏依することに依つて、世界の均勢は破れるのである。先づ此の三種の國家が所謂世界國家の協調團に發言權を有すとも云ふべき國である。

此等の諸國以外に、叙上の諸國が、勝手に言合せて所謂國際政局なるものを作り出す所の基礎となる國土がある、即ち阿弗利加及び拉丁亞弗利加の殆んど全部、土耳其、波斯及び支那が即ち是である。今日世界の國家協調團が相互商議の目的とする處は専らこの各劣等國に關する事柄であつて、その商議は種々の形を取り、時としては此等の國の中の、或國を押へつけ、勝手に之を支配するといふことを主眼とすることもある、例へば摩洛哥事件、バグダット鐵道問題、英露の波斯定約、若くは支那に於ける列國の角逐等である。時としては諸大國が己れの利益威望を増進させる目的の爲にすることがある、例へば歐洲大國が巴爾幹各國を捉へて甲若くは乙の外交團に引き入れんとする等の陰謀密計である。時としては豫め戰略上の形勝を占め置かんとする努力の形を取ることもある、例へば獨逸がレヴァントに伸長するの素地を作らんとし、或は大西洋沿岸に海軍根據地を獲得せんとするが如き類である。時としては國際評議上に優越の發言權を收めん

とする目的を以て作戰の好方法を未然に準備するの運動となることもある、例へば獨逸が自ら稱して「海上の自由」といふ海上權の制限に關する其の抗辯等である。

二 汎 米 政 策

一國が對外政綱を定むるに當つて、眞に公明正大、一點の私心無きものならば、何よりも先づ劣等國を輔導啓沃して其の自強自富を致さしむべきである。例へば支那、土耳其、カリビヤン各國の如き諸國に對しては秩序を維持し活力を賦與することを以て、其の大目的とすべきである。苟も廣く人類社會の爲めを思ふものは此等の弱國を輔沃して列國外交戰の對象となる其哀れむべき地位より脱せしむることに熱烈盡瘁せねばならぬ。其の方法を云へば、例へば其の國の財政を整理し、行政を近代的となし、經濟的資源を開發せしめ（己れの目的に利用するのではない）人民を教育する等の如きである。凡て國家が進歩開發して近代的となり、殷富強大とならば、列國間の帝國主義的利益交換の目的物たる地位より救はれて、自身國際評議上に發言權を有し得るやうになり、同時に世界の禍因を絶つこととなる。世界人類の爲を思ふものは必ず斯く信じ、斯く

願ひ、斯く盡すことであらう。

歴史及び地理より察するに、米國が劣等國の爲めに叙上の政綱を定めて腐心盡力すべき大地域は世界に二ある、拉丁亞米利加と支那である。從來米國は此の二大地域に對し、漠然ながら一定の政綱を有して居て、列國の振合から見れば其の目的は先づ高尚であつた。モンロー主義は、その形式の茫漠たる嫌ひあるにも拘はらず、目的は明白である、拉丁亞米利加を輔助して其の自ら進歩發展するの機會を得せしめんとするのが我が決意の表示である。

拉丁亞米利加中には既に此の程度にまで成功したのもあるけれども、その餘、殊にカリビヤン海に面する所の諸國は尙其の域に到らずして、今日の世界に獨立國が必要とする一定の政治的能力を具備するに至らぬ。我輩の宜しく決定すべき當面の問題は、我がこの政綱を遂ひ、これ等劣等國の復活を圖るには、進んで積極的の干渉すべきであるか、或は保護すれども責任に當らずといふ消極的政策を取るべきかである。我輩は現在此兩政策を併せ行ふて居て、墨西哥に對しては干渉がましき一種の放任主義を取り、ハイチ及びサン、ドミンゴに對しては積極的政策を取つて居る。我政策にこの差別ある所以は、主として墨西哥に干渉くるはハイチに干渉するよりも面

倒なるが故、即ち一は多大の勞費を要し、一は之を要せぬ故といふのであるが、予は決してこの理由を以て間違つて居るとは謂はぬけれど、實際それでは困ることが出来る。即ち墨西哥の事であるが、今日のやうに、一面にはその自由行動に放任して置き、一面にはその自由行動の惡結果を來す場合、墨西哥を保護すといふが如き矛盾した政策は何時までも取り得べくもない。若し墨西哥に自ら發展する望みなきものとすれば、我輩は斷然之に對して一種の消極的干渉を行ふか、然らずんば歐洲と重大な葛藤を醸す場合屠く之を引受くるのである、今日の儘では濟まされぬ、孰れか一方に取り極めて掛らねばならぬ。

米國の墨西哥に對する方法は尙疑問なるにもせよ、我が目的は明白である。我輩は墨西哥に安定進歩の政府を實現せしめんとするものである。此の目的を貫徹するの手段として、我輩は外交上の忠告財政上の壓迫に依るべきか、或は一部若しくは全部の武裝的干渉に依るべきかは今之を斷言しかぬれど、兎に角我輩が斯る目的を達するには、成るだけ強制手段を用ひざることを以て根本の方針とすべき事と思ふ。我が對外政綱の中心は拉丁亞米利加の復活である。然れども此の政綱を推行せんには、亦一面に世界列國のその後を控へて居ることを忘れてはならぬ。事の必成

を期するには、先づ以て歐亞各國が我國の復活政略を如何に見つゝあるかを究め置くが必要である。此れは困難なる問題であつて。勢ひ揣摩臆測に亘ることを免れぬが、先づ以て露國だけは算外に置いて可からう。此國は拉丁亞米利加に對して我政策に反對するやうな野心を有つてをらぬ次は英國であるが、英國とても然り、我がこの政綱に反對せざるのみか、反つて賛同することゝ思はれる。如何にも米英兩國の商業家、資本家間には激烈な競争が行はれつゝあるけれども、それは商業上の競争である。英國は英國としては拉丁亞米利加を征服するやうな意圖はなく、米國と略ぼ同様に中南亞米利加の進歩發達を望むものであるから、彼我兩國は一切の死活大問題に就て協心戮力し得る地位にある。

獨逸が南米に對して心中如何なる計畫を有するかを知るは困難であるが、兎に角獨逸が南伯刺西に一帝國を起さん志有りとは人の言ふ所である。蓋し獨逸人中には斯かる夢を見て居るものもあらう、見て居らぬものもあらう、必ずしも國論一定せりといふ譯ではあるまい。現在では獨逸の政策は一處に固定して居て、即ち専ら近東に向つて居る。獨逸が海上に優越權をも占め得ずして、急遽南伯刺西に大殖民地を起さん等は、自ら近東政策の成功を阻礙するものではあるまいか

一方米國には第一等の陸軍を蓄へ、一方大西洋には海軍を浮べんことは當分の所その擧に及ぶべしと思はれぬ。且假に所謂獨逸禍なるものありとするも、米國には心配が薄い。南伯刺西は地理上、米國の方へよりも英國の方へ近いのであるから、斯る場合之が弊を受くるものは米國でなくて英國であらう。孰れにも此の獨逸禍は南伯刺西が他國の手に容易に征服せらるゝやうな弱い場合に臨んでのみ始めて實現すべき性質のものであるから、英米兩國が海軍協商を締結して掛らば、全然獨逸の危険を未萌に芟除することが出来る。此の協商には佛國が加はり來るに違ひなく伊國もきつと加はることゝ思はれるから、海上權は不可侵となる。海上權が不可侵となる以上は何處の國が拉丁亞米利加を征服せんとした處で成る事は出来ない。

三 英米協商の必要

我が政綱は既に拉丁各國の復活に在りとするれば、我が政策は英帝國と條件を明確にして協商を遂ぐるが緊要であるまいか。我が將來の望みは緊つて兩國の協商に在る。我輩の今日は孤立の地位を棄てざるべからざる場合である。外國貿易の擴張は外界との接觸を次第に緊密ならしめたの

みならず、外國に資本を貸與し、商船及び海軍を興すの計畫も今起つて居る。我輩は往く所に於いて英帝國と稱する世界人種の四分の一の大團體と出會する。我輩はこの大團體を無視せんと欲して無視することが出來ぬ、我輩のみならず、世界的強國は皆左様である。そこで我輩は英帝國に對して敵對か親善か、態度を極めざるを得ない、必ず速かに極めねばならぬ。獨逸は約二十年前態度を決し英帝國に向つて、海上權を争はんと試みた。其の結果、今日の戦争となつて思量に及ばざる禍害を世界に加ふるに至つた。我輩も今前年の獨逸と同様に去就向背を決せねばならぬ場合に臨んで居る。若し我輩にして智慮あり、人道の觀念があるならば、必ずや自尊的態度を失はざる範圍内に於て、親睦を圖らんと欲するは誰も異議なき所であらう。加奈陀、若しくは濠洲及び新西蘭に就ては特に一々言ふを須ひぬ、此等は何れも民主主義の國で我輩と希望を同うし、東洋人の危懼を憂ふも點に於ても我輩と感を同うして居る。英米兩國の如く利害相同じき國柄でありながら實に協同する能はずとなすならば、世界に又と協同し得る國はない。無論この協同を妨ぐる所の小原因は相互に在る、米國人は小學時代からインヂャン及び赤眼を我が自然の敵なるかの如く教へ込まれて居る。商業上の競争は更に尠からずこの僻見を増長せしめつゝある、又米

國に在る迷狂的な愛蘭人及び獨逸系政治家は政界上この僻見を現在せしむることに務めて居る。我國から云つても、英帝國から言つても、この僻見を去ることが急務である、歴史上の古き記憶を呼び起して米英相協商せんとする我輩の努力を破壊するに放任するは許容すべからざることである。

戦後英帝國の組織改造は其多き大問題中の一大問題であることは眼識ある觀察家の皆言ふ所である。その如何に定まるかは知るべからざるも、其の五自治殖民地が同等の發言權を以て英帝國の外交政略を決定する一の帝國を組織するに至るべきは其の多くが期して疑はぬ所である。左様なつた曉、我國は單に孤立的加奈陀、若しくは濠洲、若しくは新西蘭と相鄰るのでなくして、聯邦民主の一大團體と相鄰るのである、我國は尙彼等は無視すべきか、或は之と挑戦すべきか、我軍權主義者の主張に従ひて海軍を擴張して以て之に對抗すべきか。事此に出づれば我等は自敗の道を開くのみならず、自由の大義に反抗して戦ふものである。英語民族の分離は其の各部をして攻撃に暴露せしむる所以で、英國は勢ひ東洋征略主義の諸帝國と不自然の聯合をなすか、否らすんば自滅を招くの外はない。英國は富強とは云へ、獨力以て永久に帝國防衛の經費と人力とを支出し

得べしとも思はれぬ。我輩とても世界に一の同盟も有せずして世界に立ち獨力以て孤立の費用を支拂ふことは出来ぬ。我輩は單に我が領土の安全を望むにもせよ、或は此の西半球全體の安全を望むにもせよ、其志孰れにあるに拘はらず、我が志を成就するには英國と明確なる協商を遂ぐる外取るべき道はないのである。

英米協商は實に我が對外交綱の基礎たるべき政略である。我輩が願ふ所の世界、即ち安固自主獨立の民主國が開發の程度低き諸國の指導者として立つ所の世界を起すは偏に米英兩國との協同に依らざるを得ぬ。然る上は佛國及び拉丁亞米利加も此の協同中に附いて來り、伊國も亦來り加はるであらうから、我輩は茲に強大なる安全界を建設し得る。無論この安全界には正義が完全に行はるゝと誇稱するは無用である。米國の黒人、英領印度人、愛蘭人、埃及人は尙壓制を受くるであらうが、然かも我輩は外部の憂患を絶つに於ては、我輩は此等の諸國の解決に向つて心力を集中するの餘裕を得るのである。

四 支那問題と日米の衝突

將來の最大政治問題といへば恐らくは支那問題であらう。大國なれども弱國なる支那は今日列強の征畧及び經濟的利用の險難に臨んで居る。ジョン、ヘーの豫言は將に適中せんとする。暴風雨の中心は土耳其及び巴爾幹から支那に移動し、今後數世代の間支那は震動混亂の状態に陥るであらう。世界人類の四分の一は此處に關係し、此處に利害を有するのである。國際主義の語に幾分現實の意味ありとせば、其れは何處よりも支那に行ふべきである。支那に必要なものは時である、開發の時である、自ら近代的施設を行ふの時である、己れの實力を見出すの時である。我輩が拉丁亞米利加に行はんとする任務は即ち支那に對し一層の大規模を以て行ふべきものである。我輩は孤立無援の地位にある間は日本の野心に對抗することが出来ぬ。若し何等かの形を以て西歐聯合なるものが出来るとすれば、日本の強梁を制することが出来る、而してこの聯合の中心たるべきものは英米の協同である。

比律賓を保有すべきや否やの問題は此の大問題に由て定まるべき喫緊なる一問題である。我輩は英帝國の協心戮力する望なしとならば、我輩は殘念乍らも支那を補助するの志を抛たねばならぬ、之を抛つ上は自國の安全を保する爲め、比律賓の前哨陣地を引拂ふべきである。支那が日本

の手に落ちれば比律賓は立場を失ふ、支那と共に滅びざるを得ぬ。日本が支那に於て完全なる優越権を占むる時は、我輩は其の前に横はる此の蕞爾たる無防禦の領土を所有するも無用である。然かし米國は其の志を固執し、英佛兩國と協同提携して飽く迄支那を保護せんと欲せば、比律賓の領有は一箇の保険である、我輩は相當の保険料を拂つても是非之を保有せねばならぬ。

五 英米獨は親近す可し

現戰爭の最中に於て英米協同を談ずるは世界を導いて永遠に反獨同盟を組織せんと欲するかのやうに見えるであらうが、予は爾か思はぬ、英米協同の結果は全く之と反對に親獨主義を來たすことと信ずる。何となれば今日獨逸を大國の地位より抹殺せんとするは不可能なることであつて此の戰爭が獨英間の戦闘である間は終局の勝敗は到底つくべくもない。英國の責任ある官吏は之を知るが故に、獨逸を敵とした永久の經濟協商を建設せんと計つて居る。獨逸の復活を許さば二代中には必ず英帝國に向つて再び戰爭を挑み來ることと見て居るのである。

假に英國の策此に出づることせば、世界の前途は實に暗澹として戰慄すべきである、人道上より

考ふれば忍容すべからざることである、我輩は全力を盡して斯かる反獨協商の發現を防止しなければならぬ。此の豫防法としては外にない、予の所見を以てすれば、矢張り英米同盟である。英米同盟にして成らば英國も佛國も充分安心して戦後獨逸と調和政策をとつてよい。予は一個人としては米國は英米同盟の一條件としてその獨逸との調和を主張すべきことと思ふ。英國は米國との同盟に因つて、亡滅の患を免るゝならば、復た獨逸を憂ふことは無い。獨逸と調和親睦して何等恐るべき所なく、獨逸とても平生英國に對する不平がなくなることゝならば、國內の形勢も一變して自由主義が勢力を得ることゝならう。此の戰爭の費用は莫大である、これを計量するの時節到來するの節、獨逸人民にして世界は獨逸を倒滅せんと共謀しつゝありなどいふ危保を絶ち得る限り、再び戰爭をいふものなく、自由主義は勢を得て現在の治者階級がその地位を保存する機會はなくなる、戦後獨逸の寡頭政治が有し得る最良の味方は英露の魔鬼であるけれども、若し英國がブリア人に對したると同様な寛弘政畧を取つて獨逸に對し、獨逸に向つて民主々義興の機會を與へたならば、獨逸は復々侵略主義に訴へる必要はない、一個の新獨逸なるもの茲に起り來つて世界各國はこれと平和の交際をなし得るであらう。我輩にして英國と適當な協商を遂げ得

るならば、この親獨といふ大目的をも併せて成就し得ること、予は確信して疑はぬ。

六 米國と白耳義の中立

然かし協商は容易なるものでない、殘念ながら現在には之を致すべき誘因が少ない、我が局外中立は白耳義の外、友を作らなんだ。予の指揮した如き協同は理屈一點で存立せしめ得べくもない、或る戲曲的、義侠的な實際な行爲に由て馴致せねばならぬ。

予の考ふる所を以てすれば、今日米國が英米及び佛米親善の動機となし得る機會は一つある、白耳義の中立問題である。米國が開戦の始めに獨逸の白耳義中立侵害に對し直截劃切に否認の意思を開示せなんだは又となき一大機會を逸したものである、英國、佛國、米國の識者は大抵爾か信するのである。今日に至つて左様いふ感情が益々強くなつて來たやうに見える。これは予も正しく機會を失したものだと思ふが、然かし政府のみを非議するは公平でない。實際當時はこれに若え及んだものはなかつた。寧ろとも口に出して高唱したものは一人もなかつた、ローゼヴェルト氏が始めて之を論じたのも千九百十四年十一月八日、即ち中立侵害後三ヶ月目のことである。

兎に角米國は白耳義に對して何とかなさねばならぬといふ議論は今日熾んである。之れを爲すは今日まだ後れたりとはせぬ。戦後白耳義は再び列國に擁せられて中立國になされるに相違ないから、米國も列國の仲間に加はつて中立の保證者たるべきである。爾かすれば政治上二箇の事業を成就することとなる。白耳義に對しては國際上獨立の地位を與へて、獨逸人も白耳義が獨り佛英兩國のみの潜在的同盟であるといふやうな誤つた考へを棄つるやうに成り、第二には白耳義は英佛兩國に取つて眞の防護となり楯となることである、即ち米國は此に由て英佛兩國に對し現實的な或る利益を與へるのであるから、米國は之れが返禮として公々然、英佛兩國に向つて、拉丁亞米利加、極東に關する協商、海軍及び經濟上の協約の締結を要請しても毫末恥かしくない。

七 英米の海上協約

然かし英米聯合の眞の堅めたるべきものは海上權協約である、海上權協約の必要なることは如何に説いても過ぎたりとせぬ、米國の將來は繫つて一に海上權の將來にありといつてよい。潜在的敵が海上權を占むる能はざる限り、米國は敵襲を受くるの虞がないのである。モンロー主義の

安全若しくは新汎米主義の安全は一に海上権の確不確に關する。支那の將來も海上権を握る各國間の意向に依ることである。

海上権は久しく英國の握有に歸して居たが、千九百年頃から獨逸が海軍を擴張し英國と拮抗せんとするに及んで、形勢は俄然一變した。英國は此の形勢を見て、今日では最早單獨で總ての海洋を勝手に制することは出来ぬと悟つたから、海上権の分割ともいふべき形勢と相成つて、自國の艦隊は之を北海に集め、そうして西太平洋は日本に、地中海は佛國に、カリビヤン海は米國に引渡した。此の取り極めは現戦争の今日に至るまでも、可なり効力を保ち、世界の公道は一時的の外は閉鎖されずして濟んだ。聯合國の手に海上権を制して居る事實は中立國の平和文明に對して大裨益である、何人も正確に此の裨益の程度を推算することは出来まい、若し反對に獨逸が海上権を握り大洋を戰場としたとすれば如何であるか。我輩はこの安全を享受することは出来ないのである。海上権は各國の手に一體として保たれた爲め、我輩米國人は戦争の最悪な効果より免れることが出来なかつたのであるが、若し然らざりしならば米國を始め中立國の大多數は非常な損害を受けたに違ひない。

獨逸は海上権を暴虐と論じて居る、如何にも或る意味から云へばその通りなのである。一小島國が世界の政局に指導的役目を取り得るのもその海上権を握るが故で、海上権の握有といふことは即ち自國以外の各國に非常の壓迫をへ得るといふことである。然かし海上権は獨裁的權力なりとはいへ、陸軍戦勝の場合とは根本から筋が違ふ、その權力は本體に於て流血的でない、人家を荒廢し、燒棄し、破壊し、倒壊するものでない、我が海上権にして十分強固ならば戦はずして勝を制し敵を屈せしむることが出来る。其一國人民を飢饉に陥れ得る點から云へば、その戦勝の効果は殘酷であり、悲惨であるが、然かも陸軍とは違つて直接に人を殺戮するやうな猛惡な性質はない。非交戰國に對しては手心を加へて使用し得る。海上権は威力である、然かもこの威力は中和的なもので、文明國人が之を握らば差別的に使用し得るのである。

一切の武力的強壓具の中、海上権は最も穩當で、同時に最も有効な武器である、國際警察上の理想的武器である。然かし海上権の人道主義に稱ふことも、又其の効力偉大なることも海上権の統一及び優勝が根本要件である、海上主権の分裂は殘忍なる海上の無政府状態を來す。權力相匹敵すれば軍備の競争となつて、さうして其の競争は一國を破産の域に陥れ、其の事已に既に各競

爭者にとつては不斷の戰爭である。

英國の海上權は專制的とは云へ、獨逸が海上權に由て心中に企圖するが如き計畫をして成就せしむれば無政府状態を馴致するは疑ひない、予は斯る無人道よりも尙英國の專制を忍ぶべしと思ふのである。一國が海上主權を專擥するは三四國が互ひに海上主權を相爭ふよりも遙かに増しであることは、宛かも一國內に於て有能者の獨裁政治は無數の小黨派が紛々擾々相分れて政權を爭ふ政體よりも國民に取て害寡きが如きものである。

然かし今日の狀態では、英國は最早手一つに海上權を專有することは出来ぬ、英國も之を知つて既に之を其の同盟國間に分割して居るし、又獨逸からは海上權を挑まれて居る、若し最悪な場合ともならば米國からも挑まるゝことであらう。夫の英國の日本との同盟の若きは結局砂上の樓屋、英國の頼む能はざるものであるといふことは凡ての觀察者の看取する所である。英國が孤立とならば、我輩は何時海上權の分裂といふ最大禍害に接するかも知れぬ。

米國たるものはこの重大なる事態に著眼して外交政略を考定せねばならぬ。此れは實に大問題である、この以外の問題の如きは之に比すれば論ずるに足らぬのである。今日米國の民生的全對

外政綱、即ち拉丁亞米利加に對する政綱、支那保全の政綱は既に危險に頻して居るが、若しも海上權の統一優勝が破壊された日は、即ち此の全政綱破壊の日であると覺悟しなければならぬ。

我輩は英帝國の各自植民地と一團となつて此の海上權保有の任務に當るが緊要である。英本國、加奈陀、濠洲、新西蘭、南阿弗利加、其れから米國と此の諸國が一體となつて協心戮力海上權の握有を分擔し保有すべきである、英米兩國の協同に依て此の權力を維持し得たならば、此の權力は獨り手に益々強大となる、佛、伊、中南米各國は此に因つて裨益を受くることであるから、若しその強大となるを見れば必ず俱に來り加はつて一層之を強固ならしむるに努むるであらう。之に反し海上權は分裂して一國として優勢を占むるなきやうにならば其結果は凡て反對となる。我輩は世界政局の不斷の混亂騷擾、陰謀、同盟の常なき離合、軍備の破産的競争といふ悲境に接するであらう。

八 英米協商を希望す

予は此種の同盟を締結するは容易とはいはぬ、米國の人心を改化して此の同盟を締結せしめ、

英米協約の具體的基礎を發見し、共同政策を施行するの機關を創定する等の問題は此中に含まれるものであるから決して成功容易とは言はれぬ。予はその困難なることをも認むるのであるが、然し之を困難とせば此の同盟以外に如何なる良策あるか。危険少く困難ならぬ方策が他にあるか。何人も米國の武裝的孤立政策を主張するものはあるまい。孤立は不可能事である、問題外に置かねばならぬ。英帝國が如何なる運命に陥ることも構はぬ、海上權が分裂することも介意するに及ばぬ。我輩は英國の商業、英國の商船、英國の海軍と競争しても決して禍敗を受くるやうなことは無い。斯ういふ工合に豫期しなくては此の孤立政策は行はるゝものでない。孤立論者は畢竟無頓着論者である、世界の事情の變化しつゝある事情如何を想像しながら、その現實の事情に應せんともせぬ無頓着論者である。

常設調停仲裁々判所に依る平和同盟といふが如き廣汎なる一切の問題も先づ西歐の自由國の手中に海上權を統合保存するが根本である。英國、米國、佛國、汎米各國及び最終に獨逸が互ひに先づその經濟的利益を調和し、その經濟的資源を聯合して後、西歐同盟として一致の外交方針を取らば、即ち一國となつて行動するに非ずんば調停も仲裁も行はるべくもない。世界が最先に必要な

とする所は國際平和機關の設置よりも寧ろ各國の結合である、此の結合なくんば夫の腐儒の徒が只管ハイチに完全なる憲法制度の必要を喋々して、國內相闘ぐ所の小黨派の一致團結せしむるの急なるを顧みざると同様何等益する所はないのである。

自由主義者の國際上に自任すべき所は各自由國を聯合し、其の手中に壓倒的權力を聚集し、其の力と賢明の政略とに由て各國間の親善を圖ることである。各自由國が權力を集中し、人民保護の楯となるに非ずんば、如何に巧妙な機關を工夫し、如何に立派な國際公法を編成することも愚である。到底永續すべくもない。

此に於てこれを視れば、米國人一般の希望としては、頻りに英米の同盟を希望してゐるやうである。此れ或は可能かも知れぬ、英米同盟が可能なりとすれば、その勢力の東洋に及ぶものは何であらうか、言ふまでもなく支那問題である。英國が米國の力を藉りて東洋植民地に發展を試みる時、米國は英國の助力に因つて南洋に其根底を愈々強固にするだらう。而して此兩國が東洋と南洋とに其辛辣な腕を振ふ時、東洋の盟主たる日本は果して如何なる使命を有するであらうか、而して日英同盟が如何に變化されるであらうか、我輩は英米協約の可能なる理由を充分に認め得

るだけ、それだけ東洋をして孤立せしめねばならぬ事を悲しく思ふのである。

果然米國は帝國主義也

曩きにもいつた通り、米國の外交政策は一にも二にもモンロー主義である。モンロー主義は我等から考へると帝國主義か軍國主義か將亦平和主義かは知らないが、その米國建國の大主義が、不知不識の間に帝國主義に變化し去り、更らに「亞米利加は亞米利加人の亞米利加なり」といふ民族主義の大理想に基き、同國が全米の盟主となり、茲に汎米主義なるものを生ずるに至つたことも亦明かなる事實である。

所謂モンロー主義の變化を歴史的に調べて見ると、彼は西米戦争以來殊に着々として帝國主義は實現せられてゐる。此を地圖に就き太平洋方面を一瞥したならば直ちに彼の帝國主義の争ふ可からざるを看取し得るのである。否彼のモンロー主義の如何に擴張せられたかを推知し得るのである。即ち布哇島、ガム島、比律賓島の三海軍根據地は太平洋に作戦する艦隊のため、有力なる據點たる可きは、恐らく専門家の説明を要せずして明かなる事であらう。

布哇島の占領は、モンロー主義の手前、紆餘曲折多年に亘り躊躇してゐたが、千八百九十七年帝國主義を標榜せるマツキンレーが大統領となると、併合問題再燃し幾多在住民の反對があつたに拘らず、千九百年に至つて終に併合された。

布哇群島中最も價値あるはオアフ島で、布哇群島の政治及經濟的中心たるホノルル港も、太平洋上に於ける海軍根據地たる眞珠灣も、此オアフ島にあるのである。該島に於ける米國の駐屯軍は、約二萬五千に増加する豫定になつてゐる、現今では一萬近くであるとのことである。眞珠灣の防禦は可なり完全で、十二吋、十四吋の巨砲が裝備してある。その軍港としての諸設備殊に諸種の工場、彈藥庫、貯炭庫等は盡く備はらざるはなしといふことである。ガム島とは呂宋の直東マリア十群島中最南にある最大島で、馬尼刺を距る千三百七十二哩、布哇ホノルルの西方三千三百哩、我横須賀の南方千三百二十哩で、我帝國の現に占領しあるマルシャル諸島との中間に在る其大さは淡路島と略ぼ同一の小島であつて、米國より比律賓に至る航路上、布哇と共に中繼としての要衝である。海底電信の陸揚場であつて米國のため頗る重要視せられてゐる。ガム島唯一の港をアフラと稱し、大艦八、九隻を容れ得べく、唯港岬平低にして外海より通視砲撃せらるゝの

不利あるのが缺點である。比律賓は特別に紹介する必要もあるまい、大小三千以上の島嶼より成り、大さは我邦に比し臺灣、樺太を除きたるものに略は等しい、群島中最大なるものは北部にある呂宋島であつて、馬尼刺港は該島にある。その廣濶なる全世界の艦隊を容るゝに足るといふ。防備は頗る堅固で、守備軍は約二萬人を算し、内約五千人は土人斥候隊である、尙島民を以て護國軍を編成し得るやうになつてゐる等總て天下周知の事であらう。

以上の如く太平洋上に有力なる海軍根據地を獲得して居る上に、その上陸の諸設備を完成してあるのである。加ふるに大正十一年には實に百八十六隻、八十二萬噸の海軍大擴張が完成するのである。此大艦隊を有するに於ては、太平洋と南支那海との制海權を得べきことは無論である。

加之將に二百萬の大陸軍を有せんとするのであるが、假りに之を要するやうな場合があるとするれば、南支那に可なり有力なる陸兵を上陸せしむることも亦決して不可能ではない。斯かる場合が若し萬一にも之あるに於ては我邦の軍需品等は北支那より仰ぐの外なく、我邦の命脈は一に支那に係るといはねばならぬ。而して我邦の生命を維持すべき資源たる此北支那が、若しも外力の壓迫を受け其供給の道を杜絶せらるゝ恐ありとしたならば、威力により之を防禦する手段をさら

ねばならぬ。しかし米國は正義人道を重ずるの國であつて、日米間に干戈を交ゆるが如きことは萬々なきを信ずるものであるが、萬一にも米國が戰を欲するに於ては斯の如く優越の地位に居ることを注意せねばならぬ。

米國實業家が世界的に活動せるのは敢て今日に始まつたことではない、彼の千九百十五年創設せられたりといふ、米國々際社團が、南北米、歐羅巴、亞細亞等到處に着手せし其企業の大規模なる、殊に支那に於て大運河の改修工事と、南北四ヶ所總計二千四百吉米の鐵道敷設工事とを支那政府より請負ひたりとの風説を耳にするに至り、さすがに歐洲列強をも晒然たらしめた。今歐洲諸新聞に掲載せし所に依り、其社團の如何に大なるものなるかを左に紹介しやう。

(一) 社團の成立

シカゴ市にナショナル、シティバンクと稱する一銀行がある、米國に於ける最も有力のもので其總裁をウァンダーリッヅと云ふて財界の巨人である。同氏は豫て米國銀行組織の尙ほ幼稚であつて現時観々として膨脹しつゝある國際的財界の需要に應じ得ざるを遺憾とし、之が改善に努力してゐたが、近時に至り世界各地の事業は一層好望を示し、殊に戦後は需要の増大殆んど

底止する所を知らざるの状況であるのを看取し、驟然立て此社團を創立するに至つた。

(二)社團の資本金

社團の資本金は五千萬弗でナショナル、シティ銀行に依り組織せられたるものであるから、何時でも同銀行より融通を受け得可きは勿論、米國財界の有力者モルガン、クーン、レーブ等と密接の關係を有すと云ふことである。社團の鞏固な事以て知る可きではないか。

(三)社團事業の範圍

社團の事業は多種廣況で殆んど世界に跨り、且其計畫は皆大規模であつて、米國人の特性を發揮し、世界の事業を一手に握らんとするの概がある。

其企業には農業あり、工業あり、商業あり又貸附業務には國家の財政に對する借款あり、港灣道路、鐵道、運河等の公共土木に對する資本の融通あり、米國のためにはその生産物を外國に消費せしめ、外國の原料品を米國の産業界へ供給すべき仲介者となり、米國の輸出入貿易を振興し、米國の資本及其企業熱を遠く海外へ發展せしむ可き好機關である。該社團の益々發展するに伴ひ勢ひ米國の商船を増加し、航海業を盛大ならしむることとなる。それは國に充分の商

船がなければ、海外貿易を著しく發展せしめ得ることが困難なのは云ふ迄もないことである。

(四)現に着手せる事業

社團の創立後僅かに一年餘に過ぎないが、事業の發展は實に驚くに堪へたるものがある。今其重なるものを列擧せば、

- 一、創立後其翌年十二月までに契約せし資金貸付数は千二百三十六件で、其範圍は殆んど世界各國に亘り、即ち南米三百四十七件、北米三百二十六件、歐洲諸國二百五十六件、亞細亞諸國七十三件、西印度二十九件、墨西哥二十六件、濠洲及亞刺斯加四件である。
- 二、太平洋メール會社の株券を買收し、その管理權を握り、尋でモルカンの航業トラスト繼承者として有名なるインターナショナル、マーキャントイル、マリナー會社と協同し、英國航路の數線も株券買收に依りその手に歸したといふことである。
- 三、速かに船腹の不足を醫する爲め、社團は造船業にも着手しガムテンの紐育造船會社を買收し且其船渠をも擴張した。
- 四、社團は露國に手を伸し、其鐵道敷設、鑛工業、炭鑛業等を引き受け、又露國政府と契約し

政府所要の軌道及運輸材料を納入することゝなつた。

露國方面の事業に關しては既に英、佛企業家の指を染め居るものが多く、殊に英國の會社は最近其勢力を擴張し居るため是等に對し多少遠慮しつゝあるやうであるが、それは英佛企業者とは追々協議すべき筈なりと稱してゐるのである。

五、支那方面に於ける事業の既に發展せるものは、大運河の改修に關しては日本より、長城外の鐵道布設に關しては露國より、各々抗議を提出したところであるが、社團は契約と同時に米貨五十萬弗の手附金を支那政府に交附し而かも其名義を鐵道布設に關する調査研究費とし、此調査に基く敷設事業を將來社團に一任すべく契約しありと云ふことである。

要するに大運河といひ、オールドヌ沙漠を貫通すべき鐵道といひ、經濟上の確算不充分なる事業に、無難作にも莫大の資金を投下せんとするの勇氣は、所謂米國式であつて一見怪むに足らざるやうであるが、支那の將來に關し確乎たる見込みあり、大に活躍せんとするの決心がなくてはこんな英斷は出来るものではない。

米國が支那及亞細亞諸國に對してその龐大なる經濟的援助をしてくれることは、實に我東洋の

ため大に慶賀す可きことである。然し彼のベールリング鐵道計企の際露國の一技師が政府に建議したやうに、經濟的發展は曠て政治的發展である、殊に未開の地に於てさうであるとすれば、東洋に於ける彼の手足を伸ばすことが、將來如何なる大問題を惹起するかに就ては、我等の刮目して見ねばならぬことである。總じて經濟的發展といふものは水の地に潤するやうに目に見ゆるやうで見へないもの、而かも一度潤ふたものはなかく乾かす事が出来ないから、戦後米國の經濟的發展、殊に東洋に於ける發展に對しては、大に注意すべきことを今から前以て注意して置かねばならない。

◎米國の軍備擴張熱

國防充實準備

米國が歐洲戰亂參戰以來、その軍備擴張に費す努力は、未だ曾て同國の歴史に見る能はざる程のもので、彼がその龐大なる經濟力を以て參戰の目的を徹底せしめんと計りつゝあるは勿論のことだが、若し夫れ戰爭決了後此等の龐大なる陸海軍が如何に始末されるか、或は世界の國防問題

に如何に影響するかは我等の片時も忘れてならない大問題である。今米國に於ける軍備擴張熱の如何に旺盛であるかに就て少しく述べて見やう。

先づ陸軍に於ては、その壯丁登録法案が上下兩院を通過して、大正六年五月十八日大統領ウィルソンは二十一歳乃至三十歳の米國壯丁に對し六月五日を期して兵役簿に登録すべきことを命じ左の要旨の陳述書を發した。

「我國の對抗しつゝある強國は、威力を以て其の意思を世界に強行せんと試み、此の目的を達するために軍隊は擴張し戦局を變せしむるまでに至れり、今次の戦争には吾人が平生口にしつゝある特殊の軍隊なるものなく、國民皆兵にして軍旗の下に立つも、留つて地を耕し工場に勤務するものも均しく兵なりとす、即ち吾人の軍用上に編成訓練すべきものは一個の軍にあらすして國民全部なり。我國民は全國皆兵の目的を貫徹するため、一致團結して共同の敵に當るを要す、米國々民は國內一切の男子の勤務を必要とす、然れども是れ各人を擧げてその最も悦ぶ所の地に用ひんことを欲するが爲めにあらすして、共同の福祉を致す上に於て、その最も善く適したる勤務に用ひんことを欲するがためなり。全國民は猶ほ一のチームの如く人各々其最も適する所の任務に

服す可きなり。茲に指定したる期日は各人が皆出頭して、其任務の割當を受く可き日時を定むるものなり。此の一事は長く我國の歴史に於て最も顯著なる事件たるべく、之を別言すれば米國々内の男子が國民の理想を護衛するため、一致協同して行進する所以なり。」

と又此と同時にパーシング少將統率の下に、約一箇師團の正規兵が新設され、速かに師團戰場に派遣すべき旨の命令を發し、その附屬陳述書に於て義勇兵團の編成を許可せざる旨を示した。而して米國が二百萬の常備陸軍を有することになるのは前に述べた通りである。

尙ほ米國は此等の大陸軍國たると共に、大海軍國たる計畫が確立された。それは大正六年十二月上旬米國海軍卿ダニエルの發表したる、海軍省報告に依つて見るに、一九一八年會計年度の海軍豫算として無慮十億三千九百六十六萬五千三百三弗を計上した。參戰以來米國海軍の内容には著しき進歩と充實とを見る事が出来るといふ。即ち一九一七年以來滿十ヶ月間に於て米國海軍力は非常の發達を遂げ、一九一七年一月一日以來其將校は四千五百名より一萬五千名に、其海軍兵六萬八千より二十五萬四千名に激増してゐる。海軍兵屯所は百三十ヶ所より三百六十三ヶ所に、文官備人は三千五百名より六千名、海軍豫備兵は僅々數百名に過ぎなかつたが、今は四萬九千二百

四十二名、海軍一ヶ月の経費は四百萬弗より六千萬弗、服役艦船は三百隻より千隻、病院艦は千六百名より七千名、海軍國民義勇兵は零より一萬六千名、海軍兵團は三百四十四兵團に、水夫は九千九百二十一名より三萬人に増加してゐる。而して海軍航空軍務其他の海軍役務に従事するものは總計十一萬三千六百五十名に達してゐる。戦争續行するに就ての海軍卿ダニエルス氏の企圖に依れば海軍水兵には二萬九千名、水夫約一萬人海軍職務學校には七千名及航空隊には四千名を新たに増加しやうと試みて居る。

海軍々政に關しては海軍卿ダニエルスは急進的意圖を有すと報せらるるが、海軍卿の報告は、海軍將校の昇進は上席年長の理由に由らず、その功績の如何により決定す可きこと及海軍兵學校制度の改革につき力説してゐる、その結論として世界的平和を實現せむとするには國際海軍を支持するの可能なることに言及し、各國海軍はその國家の人口と富とに比例して國際海軍力の單位を定め、以て其維持を割當てらる可きものなることを主張してゐる。

「斯の如き海上政策の適用せらるゝに至らば、米國はその國際海軍に向つて充分なる援助を與ふ可し、現在米國に於ける新舊造船所の資源は、世界何れの國家の造船力にも匹敵する造船力を有

するものにして、米國は前途有力なる造船國たらむ。這次戦争の終熄は、交戦國民をして巨大なる課税を負擔せしむるに至るべく、是の負擔の重荷の下にある國民の永續的災禍なる可し。早晩來るべき講和會議に於て米國はその條約上各國が能ふ限り外國の侵略を挑發することなく、互に海軍擴張を競ふことを餘儀なくするに至らざる條項を規定せしむるに努力すべし」といつてゐる。

此の海軍卿の言によると、米國は世界第一の造船能率がある、従つて世界第一の海軍となること出来る。若し大戰後列強が海軍擴張のため互に競争するやうなことがあれば、米國は之を止めさするやうな手段を取るといつた意味である。米國の勢力を以てするならば、世界第一の造船も出來やう、また世界第一の海軍國たることも決して困難ではない、しかし米國にそれだけの素質が備はつてゐて、他の各國に對し海軍擴張を思ひ止まらせやうとするのは大なる謬見である。何故かなれば例へ既成の海軍は少數なりと雖も、外國として尤も恐るゝのは軍隊でもなければ、軍艦でもない、唯その國の力である。だから國の力の弱いものは何時でも不似合な軍備擴張をやらねばならぬのはそのためである。

眉に唾して見る可き米國の海洋自由論

海洋の自由といふ言葉は随分種々な方面に使はれてゐる、或時は制海權即ち海上の主權者といふ側から無理にも海洋の自由を標榜して海洋を横行しやうと企んだ國もないではなかつた。英國獨逸の如きもその類である。それは米國に於ける海洋の自由問題は如何いふ具合かと觀測すれば何事にも自由の原則を出發點としてゐる國だけあつて、矢張海洋の自由を高唱してゐる。今大統領ウィルソンの海洋の自由なるものに就ていふに、

「去る一月我輩が上院に於て世界の國民は嘗に公海に自由航路を得るのみならず、此等の航路を無拘束に航行するの權利ありといへるは、單に吾人の認容と援助とを要する小弱國のみに就て考慮せるにあらずして、優秀なる列強並に吾人現在の敵國、吾人現在の聯合國に就ても同じく考慮したるものなり、我輩は列國中澳太利並にセルビヤ及波蘭に就ても考慮し、今も尙考慮しつゝあり」と。

而して同一月米國大統領が發表したる講和條件は十四箇條あるが、海洋の自由に関することは

四箇所にある。その中最も主なるものはその第二條であつて獨逸の宰相等が切りに引廻して賛成してゐるのはその條項である。即ち「平時と戦時とに論なく、領海外の海洋に於ては航海の絶對自由權ある可し、但國際的條約を履行せんがため國際的行動によりて海洋の一部若くは全部を閉鎖したるは此の限りにあらず」といつてゐる。

尙此の外に海洋自由の主義を貫徹するために、ダーダネルス海峡に就ては、永久に之を開放し以て國際保護の下に各國民の船舶及通商に對し自由航行を許すべしといつてゐるのは、海洋の自由のため寔に結構なことである。

然らば他國の海峡は自由にするが、自國のバナーマ海峡は何うであるか、他人に海峡の自由航行を勧める前に、先づ自分の海峡の自由通航を實行しなければならぬ。而してそんな理論的なことは度外視することとして、兎に角米國が海峡の自由通航を主張することは好い事である。終に人に之を勧むる結果として、バナーマ海峡は勿論自由通航を許すと共に、その防備の砲臺でも何でも撤廢するだらう。

その上大統領は、成るべく諸國をして萬國の共有たる海洋を十分に利用し得せしむるために各

國に港口を得せしむる事に盡力してゐる、例へばセルビアからは外國軍隊を撤退せしめ、その占領されたる地を回復せしむる外に、海洋に通ずる自由安全の港口を得せしむる事を主張し、次で波蘭種族の住居する地を以て立派な獨立國を組織せしむる外に海洋に出づ可き自由安全の港口をも與ふべしと言つてゐる、誠に至れり盡せりである。

抑も米國が海洋の自由を唱ふるのは、大に國民的自由の一般主義から來る所あり、吾人は米國のためには其海洋自由論は成る可く此一點張りに説明したい。併し何れの國でも決して人類のためとか、自由のためとかはいふが、未だ嘗て人類の眞目的、自由正義の大目的となり大なる犠牲を拂ふことが歴史上未だ見出すことは出來ない。先づ自國の利害得失を考へてから萬事を決するといふ風である故に若し亞米利加も世界の到る處に領地を有し又世界に絶對大の海軍を有すとなれば、或は海洋の自由を言はないかも知れないが、現に亞米利加は海洋の自由を言ひながら自國の國情止むを得ずとして所々に種々の砲臺を築き、航運の絶對自由に反對する行動を執つてゐる。亞米利加本國は勿論のこと、遠く離れた比律賓に軍港堡壘等を設け又日本に近きグワムに迄も軍港を設けて海軍の根據地となさんとしてゐるのみならず、唐紹儀と奉天領事との間には福建にす

ら海軍根據地を置かうと計畫したといふではないか。

尙米國に就て我輩の最も不審とする所は、同國では獨り政府の有する軍艦及御用船に限らず苟も戦争といへば、私人の有する船で敵國の軍艦及商船等を捕獲することの出來る文明國には見る能はざる野蠻風の存する事である。この事に關しては千八百五十六年巴里の會議で英、獨、佛、露等及我日本も協議して「私艦廢止」の宣言をしたが、米國と西班牙とは終に之に加はらなかつた。「私艦」といへば海賊船である。今日文明の戦争に私人と私人とが戦ふやうな蠻行や非文明的行爲は之を海上にするからこそ實がない少ないやうなもの、若し之を陸上に應用されたらそれこそ大なる問題を惹き起すであらう。我輩が眉に蹙して見る可き米國の海洋自由論とは餘りにその矛盾した事が多いからである。

日英間の諸問題

◎英國の對亞細亞政策

一 露佛兩國との對抗

英吉利の亞細亞政策は、何時頃より始まりたるものなりや明確でないけれども、無論産業革命の爲め、英吉利の商業が非常な膨脹を爲した結果、十九世紀の中頃より起り來つたものといふことが出来る。英國が東洋方面に有する利害關係は、第一印度であつて、次は東洋ではないが濠洲で、更に支那に於ける商業上の關係あるを其重なるものとする。そして印度は、如何にして英吉利の手に入つたかを考へるに、一千六百年に於て、東印度會社なるものが英吉利に創立されたが同會社は亞弗利加の南端喜望峰よりケープ、ホルレ迄の間に於ける通商權は勿論、該地方の國々と條約を結び及び戰爭を爲すべき一切の特權を政府より附與された。即ち一商事會社ではあるが附するに國家的行動を爲すの權能を以てされたものであつた。そしてその最初に於ては、同方面に於ける英人の勢力は和蘭人に比して甚だ振はなかつたもので、英人は一時日本にも貿易を開始したが、和蘭人との競争に堪へず、遂に平戸の商館を閉鎖しなければならぬやうになつた有様で

東印度會社の貿易範圍は漸次縮少して印度邊に限られるに至つた。然るに印度に於いては、十八世紀の始めより追々莫臥兒帝國の瓦解を來たすに會せしを東印度會社員等は、奇貨措くべしとなし、をの機に乗じ獨斷を以てその領地を占領した。當時本國政府は是に異議を唱へ掣肘し、けれども、社員等は之に従はずして、其後もクライヴ、ヘスチングス等の力を以て、着々その領地の擴張を行ふた。是に於て東印度會社は事實上莫大なる領地を支配する純然たる國家的任務を行ふに至つた爲め、英國政府は之をその儘に放任する能はずとなし、千七百八十年頃、東印度會社に監督官を置き、之を内閣に列せしむることゝした。但し一般には、印度の英領地は、クライヴ、ヘスチングスの時擴張されたかのやうに思はれて居るが、實は其以後ナポレオン時代に於いて行はれたものが少なくない。次で東印度會社は、一方商事的營業を制限さるゝことゝなつたが、是れ一は産業發達し、又た英吉利の政治上に於ける勢力の中心に異動を來たした結果である。當時英吉利にては其北部に商工業勢力の中心移轉して、之が勢力者は、東印度會社の東洋貿易を一手に行ふてをつたことに反對した爲め、千八百十三年に印度貿易を解放し、其代り支那貿易と茶貿易とを東印度會社の獨占となし、同時に政治上の任務も之に一任して置いた。更に千八百三十四年

に、支那貿易と茶貿易との特權を廢止し、専ら印度を支配する團體となつたが、千八百五十八年印度の大騒亂に會して遂に之を廢止せられ、爾來印度は純然たる英吉利政府の直轄に歸し、印度事務大臣は、内閣の一員として責任を負ふことゝなつた。

之を要するに英吉利が其本國と遠隔の地に於いて、彼の龐大なる印度を占領したのは、主として東印度會社の手に於いて、時の政府の意思に反對した行動の下に、殆んど何等の困難と手數とを要せずして行はれたものであつて、其政府直轄以後に於て、擴張した領土の如きは誠に微々たるものに過ぎぬのである。而して英國が、東印度貿易及支那貿易を漸次東印度會社より開放するに至つたのは、即ち産業革命、商工業發展の結果に基くものにして、又た其開放は、其後英國の對支貿易を盛大に赴かしめる導火線となり、其結果、英吉利は支那と葛藤を生じ、千八百四十二年、終に第一阿片戰爭を起し、南京條約に依つて、支那の五港を開放せしめた。

英吉利は之に次で千八百五十八年より六十年に於て、北清遠征を行ふたが、この時は純粹なる商工上の利益を擁護する目的の下に盛に強硬なる政策を取り、支那に威壓を加へた。當時英國の外交政策を左右せしは、彼の千八百六十五年に死せるパーマーストン卿にして、卿は元來自由黨

出身の外務大臣であるが、其外交方針は頗る高壓的であつて尙強硬な態度を取つた。阿片戦争の如き、或は千八百五十八年より千八百六十年に至る戦争の如きは、冷靜に其是非曲直を考へたらんには、支那側より寧ろ英吉利に不當の名を冠せざるを得ぬ。又當時東洋に駐在したパークスの如きも、頗る強硬な外交をした人で、支那政府に對しては、常に此の威壓主義によつて自己の意思を貫徹するに努めた。然れども其領土には敢て侵襲の手を染めなかつた、是れ英吉利は既に印度の領有を終つた後で、支那には専ら商業上の利益を收むるのを目的にしたのと、更に東洋に於ける競争者として、露西亞の現れ來りて、英吉利の獨り舞臺たるを許さざるに至つた爲でもある。而して當時に於ける英露の關係を見るに、是れより先き、英國は千八百三十年代の末に、阿富汗斯坦に兵を進めて敗北したが、當時阿富汗斯坦の背後に在つて、之を使喚したのは露西亞であつて、其後千八百七十年代に至り英吉利が再び阿富汗斯坦と戦争をしたのは事實上露西亞を標的としたものである。露西亞は彼得帝の時代より黒龍江方面或はトルキハタン方面に向つて南下し、以て現實に英國と對抗の姿を呈するに至つた。

斯の如く、英吉利は南方より進み、露西亞は北方より來た爲め、十九世紀の後半千八百九十年頃に於ける英吉利の對亞細亞政策は、要するに露西亞に對する政策であつて、露西亞と相角逐する形で現れたものである。

今一二の例を擧げてみれば、我國に直接に關係のある問題であるが、千八百六十一年露西亞人ピリレフが小軍艦で來て、對馬に上陸して動かなかつた事がある。其時日本は、之を退去させる實力が無かつたので、英吉利公使オルコックは、海軍司令長官ホークに命じ、對馬に抵り、ピリレフに談判せしめたが、彼は「此處にて薯を作り居る」と答へたけれど「特に斯の如き處に於て薯を作らんでもよいではないか」と威壓を加へ、之を退却せしめた。其後千八百六十五年、英吉利は朝鮮に來て巨文島即ちポート、ハミルトンを占領した。當時出版の英國地圖には、亦く英吉利領土に染めて居つた程であつたが、是より先き、千八百八十一年頃、阿富汗斯坦に於て、露西亞と英吉利との衝突があつた。此時露西亞が、ペンダを占領したる爲め、英吉利は印度を侵すものとして非常に恐慌を起し、而して極東方面に於ても（我々より云へば近東である）露西亞に良港を得せしめるやうなことがあるならば、頗る困難の地位に立つべきことを慮り、之に於て英吉利は朝鮮の南方に在る三島（巨文島の別名）が船艦の碇泊に便利なるを幸とし、露西亞に先ちて之を占

領したのであつた。然るに露西亞は、又た之に對し自ら表面に立たなかつたけれども、暗に朝鮮を援けて之に抗議せしめた爲め英國は二年許りで漸く撤退した。是れ亦た日本附近に現はれた問題であつて、英露の衝突が、其前提を爲し居るものである。更に千八百八十年頃最も喧しかつたのは、バミール問題にして、是は露國がトルキスタンを占領したのに對し、英國は露國が其東部のバミールより、印度に攻め下るべきを慮り、バミールの境界争に付、英露の確執を來したものであつた。

英吉利は、東洋に於て露國以外更に對抗すべき一國があつた。之は佛蘭西である。佛蘭西は他の方面にも其領地を有して居るが、英佛衝突の原因は、印度支那南東に起つた。是れより先き十八世紀の末、佛蘭西は、安南地方に着目してをつたが、會々嘉隆王を援けて、その王位を回復せしむる爲め、爾來安南に密接の關係を有するに至り、千八百七十四年には東京を取り、尙ほ以前に於て柴棍を取つて居つた。而して佛蘭西が、此の印度支那の東部を占領したるに對し、英國も亦た之に對抗して緬甸方面を併合した。但しその併呑は端をその以前に發してゐたが、全英英國の勢力下に收めたのは、此時千八百八十五年である。爾來緬甸方面、印度支那方面若くは、暹羅

島に於て英佛の對抗的競争起り、千八百九十三年には、佛蘭西がメーロン河西方の廣地を暹羅より取るや、英吉利も亦た馬來半島方面に於て大活動を爲した。然るに千八百九十年頃より、露佛同盟成立した爲め、英吉利は亞細亞方面に於て、此二國同盟を敵とするに至つた。然れども外交政策は其場合に應じて變化すべく、必ずしも始終一定の方針により行はれて居るものではないので、英吉利はバミール問題に就て、露西亞と争ふことの不利益といふことを覺るや、千八百九十五年(明治二十八年)に至り、兩國の間に之が妥協を遂げた。是に於て英吉利は表面東洋問題に就て漸く他國と衝突の原因を除いたやうであつたが、此時は恰も世界の形勢に大變化を來した時であつた。是れ日清戦争の結果に因るものである。日清戦争は世界歴史の大局より見るときは、其外交上の局面に大變化を來した重大事件であつて、當時日本政治家等と雖も、恐らくは其結果の大局上に斯の如き大波瀾を捲き起さうとは、考へ及ばぬ所であらうとは云ふものゝ、最近世界に於ける外交の活動は、悉く其結果より出立しつゝある。即ち支那問題の喧しくなつて來たのは是れが爲であつて、從來眠れる獅子視せられた支那は忽ち張子の虎同様に見做さるゝやうになつて終つた。而して一方には、支那分割運動の起る有り、又之が反動としては、拳匪の亂が發生

する、又英吉利は獨逸と共に揚子江地方に於て、領土保全の條約を締結し、以て其地歩の安固を圖らうと期するに至つた。

二 日英同盟の成立と英獨の反感

英吉利の亞細亞に對する外交政策は斯の如く世界の大局に變化を來したと同時に、外交當局にも更迭があつた爲め、自然に從來の方針に變化しなければならぬやうになつたが、大體に於て露國を敵とするの方針は依然變じなかつた。然かも南阿戰爭の際露西亞は阿富汗斯坦の國境に兵力を増加したるに對し、英吉利は之を如何ともすることが出来なかつたから、亞細亞方面に於て露西亞に對抗するには從來の如き光榮ある孤立にては到底不能なるを考へ、茲に日英同盟の締結を見るに至つたのである。されど英國は、最初より日本と同盟する考が有つたかどうかは知らないが、之を媒介したのは獨逸であつて、當時獨逸人は「日本をして露西亞と戦はしむれば必ず敗れん。其結果歐羅巴は當分日本を懸念するの必要なきに至るべし」との考を以て、露西亞に對抗するを目的とする日英同盟を從應することになつたのである、そして遂に之を成立せしむるに至つ

たのである。而して英吉利人も亦決してその内心には獨逸と同じやうな考がなかつたとは云へぬ其同盟を結んだのは、決して日本の隆盛を望んでしたことはないことは、日露戰爭の際、英吉利皇帝すら「日本は能く戦ふも最後の勝利は懸念なり」とて、言外に一種の意味を漏らしたといふことを考へても之を察するに難くない。是れ日本が負くることも償金は自分方より貸與しやう、そうすれば日本は英吉利にて之を勝手にすることが出来るといふ考へであつたかも知れない。要するに日英同盟は英吉利の利害關係に出で、自國の力のみにては露西亞に當ること能はざるにより之を成立せしめたのである。

當時英國の外交當局者ソールスベリー卿は、保守黨の政治家にして、自由黨の政治家ではなかつたけれども、保守黨はヂスレリーの晩年にはグラッドストーン杯とは外交上の方針を異にし、寧ろ昔日の自由黨の如き考を有しておつたとはいへ、亞細亞方面に就ては、ソールスベリー卿は佛蘭西に對し、非常なる反感を抱き飽迄英吉利の植民政策の敵となし、露西亞に對しても亦同様の考へを有してゐた爲め、英吉利は到底佛蘭西と親密にして行くことは出来ない關係になつてゐた。然るに千九百一年(今日の外交所上の分岐點とも見るべき歟)獨逸と英吉利との間に同盟の相

談が起つたが、其時獨逸の要求餘りに過大なりし爲め遂に不成立に終つた。但し其原因は、強ち獨逸の要求過大なりし爲のみとは云へない、偶々其條件中に於て、南亞米利加に對する獨逸の野心を漏らして居た爲であつた。其時若し兩國の同盟成立して居つたなら、世界の外交の形勢は如何に變化したかしのれないが、その不成立は却つて英吉利と佛蘭西との握手を助くることゝなつた。併し乍らその實際を観察すれば、その離合は斯の如き細事に左右さるゝものではなく、大勢の向ふ所は英獨何時か一度は到底衝突を免れざる運命を有したものと見てよいだらう。即ち英獨の衝突は獨逸の急激なる勃興と、その露骨なる行動とに基因して居る。之を獨逸側よりすれば如何に解釋せるか分らぬが、千九百年に於ける獨逸の艦隊法は、脆かにその大失策の一と思はれる。海軍擴張の如きは徐々之を行ふ方が可とすべきであるに、頗る急激な擴張の目的を以て行はれ、千九百十七年迄に全部其計劃を實行せんとしたもので、而かもその法律の前文には露骨にも「獨逸の此の艦隊は、世界第一流の海軍國たりとも、之を攻撃したる時は非常なる損害を與へしむるを得べし」との意味を明記した。即ち世界第一流の海軍國とは、明らかに英吉利を指したものであつて、當時獨逸が世界政策を實行し、盛んに海外に發展せんとする上には、必ずやその海軍に

英吉利をして挑戦せしめざるだけの威力を備へなければならぬことは、言ふまでもないことではあり乍ら、抑々外交の事たる内心如何なる考を藏するにせよ、表面だけは其辭令を婉曲にして熱心平和を希望する態度でなければならぬ。然るに獨逸はその英吉利に對する敵對行爲を法律に迄も明記して憚らないのは、甚だしく英吉利の感情を害した所であつて、兩國衝突の原因繁りて茲に在りと云はなければならぬ。

英吉利は獨逸の露骨なる此行動によつて、其敵は從來の露西亞ではなくして、獨逸であると爲さなければならぬやうになつた。然れども是れは歐羅巴方面の事であつて、亞細亞方面に就ては左したる變化はなかつた。明治三十八年八月に於ける日英條約改正の時にも、依然露西亞を目的として締結したが、當時英吉利は、露西亞が東亞方面に南下することが出來ないとしても、或は印度方面に侵入するなきやを保せずと爲し、此の條約に於て日本をして印度に出兵するの義務を負はしめた。然るに露西亞は、間もなく日露戰爭に於て敗北した爲め、英吉利は露西亞よりも、獨逸と印度以西の方面に於て、非常なる確執を生ずるに至つた。千八百九十八年、獨逸皇帝のバレストアインに旅行するや、バクダット鐵道の敷設を計劃したが、その目的は伯林から地中海を通

過し、土耳其を経て波斯灣頭に直通せしめ、以て一朝有事の際、英吉利が印度に送兵するよりも獨逸は早く印度境上に有力なる出兵を爲し、英領印度を脅すの通路を得んとするに在つた。而して英國はこの計劃の進行に伴ひ漸次不利益の地位に立つの止むなきに至る。是に於て從來露西亞と對抗したる政策を變じ、千九百七年に於て英露協約を締結し、西藏、阿富汗斯坦、及び更に波斯に關する協定を遂げ、以て互ひに利益を侵犯しないこととした。即ち千九百七年の英露協約なるものは畢竟獨逸を目的として成立したものと見なければならぬ。

三 日英條約改正の眞意

次は日本に直接關係のある千九百十一年に於ける日英條約の改正であるが、此條約は餘程奇妙なものと思はれる、是より先き、千九百五年の日英條約は露西亞を相手として居るに拘はらず、その後局面の變化は、日英兩國をして、一朝有事の際には、極東平和の爲に露西亞以外の第三國と戦はなければならぬやうになつたが、第三國とは、亞米利加らしい形勢を呈するに至つた。是に於て英吉利は日米の衝突したる場合は、日本に對し好意的中立を守ることが出来ないといふ考

へから、先づ日本と亞米利加との戦争を豫防する爲に、千九百十一年に於ける日英條約の改正を行ふに至つたのではないかと思はれる。然らば即ち露米は、共に事實上日本の敵となすこと能はず、獨逸は膠州灣を有したけれども、日獨の衝突ある如きは、その時代に於ては豫想せられてをらず、千九百十一年の條約は甚だ無意味なもので、伊太利が一昨年其同盟國に答へた三國同盟條約の解決の如き論法を以てすれば、日本は今回の戦争に於いて必ずしも日英條約に基いて起たねばならぬといふ理由は無いのである。要するに此改定條約は其同盟力に依つて對抗すべき相手國を空虚としたもので、英吉利は唯此條約によつて、東亞の現状を維持し、露西亞との協約に依つて、西部の利權を擁護して行かうとする目的の爲にしたものに外ならぬのである。

四 英國の領土侵略觀念

更に一步を進めて考ふるに、英吉利は、領土侵略の野心のあるか無いかといふことに就て、余は之に對し、英吉利は領土侵略野心は絶無であるといふことが出来ぬが、餘程少ないと思ふ。或は國內の一部者に其の考へがあるにしても、民主監督同盟側の勢力案外強くして其の實行は甚

た困難である。要するに英吉利の亞細亞に對する政策は、印度を保存し、支那その他に就ては、専ら通商上の利權を伸張して行くことを眼目として居るもので、一九一四年六月中旬バクダット鐵道問題に就て、獨逸及び土耳其との間に協約を成立させたやうなものは、此の鐵道を獨逸の軍事上に使用させぬやうにしたに過ぎない。即ちこれ印度の安全を圖り、支那に於ても通商上の利益を擧ぐるをその主眼として居るものではないか。

英吉利は現在印度方面に於て、如何程の利害關係を有して居るかといふに、英人クラモンド氏の調査によれば、其の人口は、英本國並びに全領土を合し四億四千八百萬人にして、此の中印度は二億九千八百五十萬人、即ち全人口の六割を占め、英本國は僅かに全人口の一割四千五百萬人に過ぎない。又濠洲は、英吉利の對亞細亞政策を決する上に於て、最も重要な根據地であるけれども、その人口僅かに四百八十萬人にして、全人口の百分の一強に過ぎない。次に英帝國全體の富は、二百六十億磅即ち二千六百億圓にして、其内英本國百六十五億磅、全富力の六割三分に當り、印度は三十六億磅、全富力の一割四分である。更に收入を擧ぐれば、英吉利人全體の收入は三十四億八千六百萬磅であるが、是れ亦た本國を其主となし二十一億四千萬磅即ち六割一分、印

度は六億八百萬磅にして全體の一割七分、濠洲は頗る低下して僅々百分の四、七である。印度は斯くの如く、英國の全領土中最も重大な價値を有して居るから、英吉利は近來印度に一種の國民思想起り、統治上頗る困難を嘗めつゝあるに拘はらず、飽迄これが領有を保持せんと努めつゝある所以のもの、實にこゝに存すといふべきである。

又た英吉利の海外に投資したる金額を見るに、其金額は三十五億五千四百萬磅（是には英の領土は勿論、日本南米その他諸外國をも含む。但し政府の公債、或は貸金を示せるもので、商業的投資は含まぬ）其内印度は四億四千七百萬磅海外投資額の一割三分を占め、濠洲は四億八百萬磅全投資額の一割一分である。又た試に日本及び支那に對する投資額を見るに、日本には七千四百萬磅（七億四千萬圓）にして、即ち我々に貸與し居るは、全投資額の百分の二に當り、支那には三千八百萬磅（三億八千萬圓）即ち百分の一、一である。此數字に考へて見ても英國が濠洲に重きを置く所以が察せられる。又た通商貿易以外、印度の領土と對支貿易とを、他く迄維持しやうとする理由を窺ふに足るのである。併し英吉利は果して何時迄現状を維持し得るか、遠き未來はいざ知らず、近き將來に於ては、大英帝國瓦解を來し、印度の領土を放棄するやうなことは萬なかる

べしと思はれる。即ち英吉利にては到底斯の如き重要な利害關係を有する印度及び濠洲を手放すことはあるまい、又た之を手放さねばならぬやうな場合には、目前立到ることはないと思ふ。

五 戦後の英國と我が外交の目標

然らば英吉利は、此度の戦争後果して從來の地位を維持することが出来るかといふに、成る程海軍はドーバー海峡よりアイスランド迄も、悉く軍艦を並べて封鎖を行ひ、獨逸の潛航艇をして一時を暴れさせたが、近來にては英吉利の海軍は、獨逸の潛航艇の來るのを樂しみにして居るやうな頗る元氣な状態である。今日の割合を以て進んだならば、當分其海軍は先づ動かないものを見る事が出来る。然らば英吉利は、何時迄も現状を維持して行くかといふに決して樂觀を許さないものがある。英國が獨り海軍力を待み、制海權を有し、其本國を外國から襲はれる懸念がないとして、他國は之を力と恃むに足る同盟を爲すことが出来るか否か、現に佛蘭西邊にては、英國に對し「英國は今回の戦争に、直接の損害を受け居らず。然るに我々は斯く苦しみ居れるに非ずや」として、不平を鳴らしてゐる者があるといふ。これで見ても將來若し歐羅巴大陸に於て、何れ

の國を問はず、覇權を占めんとする國の起つたとき、英吉利が之に對し、今日の如くその陸軍弱くして、之に有力なる抵抗を試むるの力無き以上は、歐羅巴諸國をして、何れも英吉利と同盟を結ぶの不利益を感ずるだらう。然るときは一方に於ては、獨逸は此機會に乗じ、獨逸に對抗するを目的とする諸國間の同盟の離間に努めることだらう。而して歐羅巴諸國をして、以上の如き考へを起させない道は、唯英吉利の陸軍をして他國を畏懼せしむるに足るべき實力を備へしむるより外ない。即ち徵兵制度を施行して、充分な常備軍を備へさせない限りは、早晚佛蘭西や露西亞をして、英吉利と握手しても無益であるといふ考へを起させるに至るだらう。果して然らば其時英吉利以外の國が、悉くその艦隊を揃へ、英吉利に向ふたとしてみれば、英吉利は尙ほ克くその制海權を保つて行くことが出来るであらうか、そしてその時に至つても、日本は飽く迄英國の御供を爲して行くのが好き方法であるか。又英國が徵兵制度を施行するやうになるかならぬか、固より五年六年の後の事は分明しないけれども、今後日本は先づ此の點を一つの目標として外交の方針を定むる必要があると信ずる。

今日の日支談判に於て、英吉利が故障を申し込んだとして、頻りに怨言を聴くが、こんなことは

英吉利の立場からすれば寧ろ當然の事である。

即ち我外交當局者に故障を言はしめない爲に此故障があるもので、何國を問はず國際間の親密を維持せんとするには、外交の力量は、その根底をなすべきものである。然るに自らその力を忘れて徒らに英吉利を怨んだ所で何の要にもならぬことである。唯我國民が、飽くまで之を恃むに足ると思ふは大きな誤解であることを知らなければならぬ。然らば日露同盟を介して、獨逸と提携しては如何といふに、ハーバート大學のミンスターベルグ氏は、亞米利加に在つて盛んに親獨論を鼓吹する爲め亞米利加の親英主義者から攻撃を受けて居るが、この人の最近の著書中には「斯くの如き事を言はゞ或は獨逸人は不快に思ふか知らぬが、日、露、獨の提携は決して難事ではなから」と言ひ、更に「亞米利加邊にては、中立國と稱しながら協商國に軍器を供し、獨逸を惡口するものがある、斯る中立國よりも、寧ろ敵國なる日本の方が遙に勝つて居るではないか」と言ふて居る。先頃濠洲で召集された獨逸人の妻君が、その歸途船中にて、英吉利人や亞米利加人よりは非常に輕侮されたが、之に反して日本人からは篤く待遇された爲め、其馬尼刺に着するや、頗る事に告ぐるに日本人より受けた厚意の狀を以てしたといふ事を聞いた。但しその事の如きは何れ

本國へも報告せられて居ることであらうが、要するに獨逸人は現在にても日本に對し、その感情比較的に良好なるが故に、此同盟は他日必ずしも成立しないものと思はれぬ。唯だ今日迄列國と共に敵對して居た日本が、獨逸の強盛なるを見るや、忽ち之と提携しやうとする如き態度は、餘り日本人の腹を見透さるゝ事にもなり、又政策上に於ても、之を面に出さない方が宜しいと考ふ。併し乍ら先方にもその意有り、又此方にもその氣有り、互に意氣投合するとしたならば、何時にても之を實現しても惡くはなからうと思ふ。

◎日英同盟の價值

一 日英同盟の由來

日英同盟が明治三十五年英京倫敦に於て締結され、明治三十八年及び四十四年に改定された以來、この日英同盟が英國外交の樞軸をなして居ることは我輩の大いに嬉しく思ふ所である。我輩は今後共にこの同盟の永久に支持せられんことを切望する一人である。

この日英同盟を謳歌する心は、我同盟國の多數の識者も同じものであらうと思ふ。しかして英

國の上下も日本に對し好感情を有し、今回の大戦に於ける我海軍の活動に就ては異口同音に褒賞して居るといふ有様である。これ等は皆英人が同盟を尊重して居ることを示したものである。

併し吾人は同盟の英國に及ぼした効果や英人の同盟尊重を云々する必要はない。我輩はこの同盟が日本及び東洋に及ぼした影響の一端を叙して、熱心に同盟維持を希望すれば足ると思ふ。

先づそれは日清、日露の兩役を比較するに勝るものはない、日清役後は例の三國干渉で遼東遼東附となり、就中當時獨逸公使グドシュミット男は林外務次官に對し「遼東を還附する方が日本の爲に利益なるべし」と脅迫的覺書をさへ讀み上げた程、我國の地位は憐むべき姿であつた。然るに日露戦争の時は、日英同盟が嚴存して居た結果、露國の友邦佛國が參戰することもなく、また虛に乗じて地盤を東方に張らんとする獨逸の野心を防止することも出来た。また海上權を有する英國の好意的中立によつて、各種の通信やら、材料供給やら世に知られぬ種々の便宜を得た。又それだけ露の海軍は不便を感じた。その露和の如きも他より妨害を受くることなかつた。また東洋に及ぼした好影響と云へば、支那分割の中止、その本土の保全が著しい例である。それは一八九八年獨逸の膠州灣占領に其端を發し、支那本土分割の勢が生じ、佛國、伊國の如きまで種々讓

與要求を始めたが、二十世紀に入るに及んでこの事は中止した。これ支那の獨立領土保全、機會均等を主義とする日英同盟の賜に外ならぬ。殊にこの同盟が印度の平和に貢獻した點に至つては頗る大なるものがある。

由來「光榮ある孤立」と言ふことは、一見結構のやうだが、今日の如く國際政局紛糾の時期には到底不可能の事で、矢張り協商とか同盟とか言ふやうな形姿をとるを避け難いのである。そして我國が矢張り同盟邦を有するものとするならば、どうしても英國が適當と言はなければならぬ。世上少數ではあるが、往々日獨同盟論の聲を聴くが、我輩は全然その價值を疑ふのである。獨逸人の非凡なる精力、驚くべき組織力、科學の進歩一世を凌駕せる點、熱烈なる愛國心の邦人に髣髴たる所等は吾人の推賞して置かざる所であるが、また他の一面には詐略縱橫、目的の爲には手段を選ばずといふことが商賣にも俗事にも現はれるが、殊にその外交に於てはビスマルク以來之を特色として居ると思はれる。

之に反して英國人は常識的で、着實で、ローマンチックの處もなく他人の想像を動かし、その崇拜を受くる性質も無く、大抵今日の事に支配され、明日の事を考へても明後日の事迄考へる事

はないといふやうな風がある。小さな利害の打算に忙しいので、何だか功利的許りに見へるが、他方から見ると、正直で、約束を重んずるといふ美風がある。英獨兩國の國民を比較すれば先づ斯様な有様である。そこで若し味方を要すべくんば不信義の獨逸よりも、信義ある英國の味方こそ貴いものである。

第二には海軍力の問題を考へて見なければならぬ。今日日本が英國と同盟して居ても、東亞に於て我陸軍力を壓倒すべき實力も便宜も露獨にはない。之に反して若し獨逸と同盟を結び英國を敵とするならば獨逸の援助は毫も日本に届かず、英國の民族的同邦たる米國をも敵とし、太平洋に於て英米兩海軍を相手にするの地位に立つものである。この點は現在の日米國交と英國との關係を了解する者の察知するに苦まぬ所であらう。かくの如く東方海上の形勢に對して獨逸に援助力尠きは言ふ迄もない、是れ果して島國たる我國に有利な同盟であらうか。殊に考慮すべきは供給品の問題である。その一例をあぐれば戦争の必需品たる鐵は如何。獨逸は目下戦争の爲め一年二千七百萬噸の製鐵を要しつゝある。然るに我國の製鐵材料は日本、支那、朝鮮に於て僅々二十萬噸を得るに過ぎぬ、他は悉く之を歐米に仰いで居る。遠き將來は兎に角、若し今日英國を敵と

し印度洋その他の航路が閉鎖されるに於ては、我が戰鬥力は如何になるべきか、棍棒を振つて戦へる一昨年露兵の運命を再びするに於ては、百萬の勇兵も亦多くを望むことを得ないだらう。我輩は以上の如き理由の下に、日獨同盟よりも日英同盟を望むものである。そして英國國民も亦歐洲に於て獨逸と衝突し、若くは競争する限り東亞に於ける日本との同盟を希望することは無論である。

併し我輩も茲に一言しなければならぬことがある、それはこの同盟の前途を望見するに二三の大難關の横はつて居るのを認めざるを得ないのである。これは残念なことであるが、然かもこの事たるや昭々たる事實である。

「日英同盟は無論今後久しく揺かすこと能はず、鞏固に繼續するであらうが、然も豫め此等の難關を發生すべき分子を回顧し、解剖し以て國民に之が救治の機會を與ふるも、必要な事項ではなからうか」と。

この意義に依つて、我輩は少しく下項に平素の所思を吐露して見やうと思ふ。

二 日英對支關係

日英同盟の味方たる吾人が、第一に憂懼しなければならぬのは矢張り支那に於ける日英關係に外ならぬのである。

日英同盟は云ふまでもなく支那の保全を根義とし、門戸開放、機會均等を旗幟とし、以て露國の侵畧、獨逸の野心に争つて來たのであるが、今や露國は醜然日英兩國の味方と化し、獨逸は一九一四年の我が膠州灣占領と共に東方活動の地盤を失つた。そして今後の競争は却つて主に同盟國たる日英間に行はれるやうな形勢を示し今日已にその片鱗を示して居るでは無いか。

競争の一端は先づ貿易に現れた。戦争前に於て日英間の對支輸出額は一八九〇年より一九一三年の二十三年間に於て、英國の對支輸出貿易は四倍弱の増加に反し、日本は十二倍の激増を示すに至つた。尤も香港、印度を加ふれば猶優勢を稱へることが出来るが、香港は物貨集散の中樞港で其輸出には種々の分子が含まれて居る。無論英國民の頭腦に於ける對支貿易なるものは之等を指してゐないことは勿論である。今後日英輸出競争で最も重大な分子となり、最も激甚な競争を

見るべきものは綿製品である。綿製品は支那の貿易に於て最要位を占め、次に阿片、砂糖、金屬、石油等の順序になつて、年々のその發展率も毛製品に及ぶべくもないので、英國では特に有望視して居る次第である。然るに一九〇九年より一九一三年の五年間に於て、日英米三國の平織綿布對支輸出額は、日本は四倍半に増加し居るに反し英國は一割の増加を示し、米國は却て五年前の大割に減退した。而して今後は支那自身に劣級綿布の製造業が勃興すべき形勢にあるので、我國民も之に壓迫され劣級綿布の製造を止めて、英國民と同じ優級品の製造に移らねばならぬことになることを思へば、彼我の競争の激甚となることは察するに難くない。殊に大戰開始後、我が對支綿布輸出額は戦前に二倍し、英國の獨占した生金巾、晒金巾、細綾巾等皆我掌中に落ちた以上戦争終了後は必ず活潑なる日英商戦を見るものと期待せねばならぬ。

人或は「商戦は世界の共通の現象のみ、何ぞ國際の問題に於て多くを説く必要あらん」と言ふものがあらう。予も亦その然らんことを希望する。然かも英國綿製の産地たるランカシャの政治的勢力に想到する時は、冷淡に看過することは出来ないものである。

しかしてこのランカシャの政治的勢力といふものは實に偉大なるもので、最近ロイド、ジョー

デ内閣になつて、印度の戦費寄附問題に關して又復課税問題が起つたが、之に對するランカシャの運動は旺盛で、内閣の地位問題さへも喋々するものがあつた。若し印度の軍費十億圓の寄附がなかつたならば、同税の破れたことは勿論である。

ランカシャはそして幾多の有力な下院議員を有して居る。ポルトン出身のトーマスター氏や法律家のパーロー、雄辯家スノーデン等鮮々たる人物である。又たランカシャ系が英國新聞界に勢力を有することも想像以上である。しかして此派と日本の關係は如何といふに、彼等は支那に於いて日本とランカシャとの利害不一致の爲屢々排日的態度を示して憚らないといふ風がある。それは或は英議會の質問に討議に、或は新聞紙上に現れる。大正四年日支交渉當時激烈な排日的論文を掲げて、同年支那引入れ問題等でも日本を罵倒したマンチエスター、ガーデアン及びデイヴニユースが、如何に英國の人心を蠱惑したかを思へば思半ばにすぐるものがあらう。

併し我輩は此のランカシャの對日競争、及びこれに附隨する感情の疎隔あるを以て、日英對支貿易競争を廢止して、日英同盟に資せよといふものではない。唯記憶すべきは「物質的利益關係を有する反目的分子が存在すること」これである。固より他方には日本を信頼し賞讃し、同情す

る英人も少なくはないが、之は大抵「利益關係」に縁のない淡泊な連中であると思はねばならぬ。予は敢てランカシャ問題を過度に重視するのではない、之によつて直ちに日英同盟が動搖することも云はぬが、之が他の有力な原因や條件と相俟つて合するに至つては決して樂觀を許さないと思ふのである。

而して此の所謂「他の有力なる原因、條約」となる危険なものは、中部及び南部就中揚子江流域及び其附近に於ける日英軋轢ではあるまいか。

其の實例は皆近年の出來事で、その内重要なものを擧ぐれば、第一南海鐵道問題である、これは日本が日清戦役の結果臺灣を領刻するに至つたが、同地は一葦帶水、福建省と相對して居るのでその防備の爲にも、安全の爲にも外國を福建省に據らしめてはならぬ必要があつたので、一八九八年支那と福建不割讓約を結び、同省の經營はなるべく日本でやらねばならぬが、今日の所其經營を有利ならしむる爲には同省だけでは不可能で、更に奥の江西方面に進まねばならなかつた。然るに英國は揚子江流域の權利を擴大に解釋して、江西にさへ及ぼし一九一四年我國の資本になる九江南昌間鐵道の萍鄉に延長されるを阻止し、自己の南京長沙鐵道に含ませたのである。之が

爲に湖南湖北より楊子江に出た萍郷の石炭を九江に呼び寄せ楊子江に出さうとする我が鐵道政策は失敗したのであつた。第二は大倉組が第一回の革命の頃江蘇鐵道に十五年の期限で三百萬圓貸しつけたのが、英人が運動して期限終了前に、英人から借入れて之を償還したことである。第三は我資本を投入することに決定した安慶、正陽關間の鐵道が失敗したのも、英國の反對に出たのである。若し夫れ一九一五年日支交渉に關しては、我が當局者に言ふに忍びざる失態を演じたから予は之を説かぬが、南方鐵道案の不成功は裏面に英國の反對の預つて力あつたことは世人周知の事實である。その他招商局問題、漢冶萍問題等でも日英間に種々面倒が起つたことは、今更言ふまでもなく。

斯く軋轢の發生することに、我國では英國のみが無理を言ふと説くものもあるが、さう單純に論斷し難いのである。楊子江方面に於ける英國の歴史に對しては、我國民は冷靜な態度で、寧ろ或る程度の同情を以て之に對すべきである。由來西洋人就中英國人は最も權利思想が發達して、些細の事をも主張して放棄しない特色がある。故に殊に利害關係の加はつた場合には猶更その「正當の權利」を主張するのである。これは單に日本人ばかりでなく他の歐洲人に對しても同様であ

る。唯問題は彼等の正當の權利といふのが眞に正當の權利であるかといふことである。

英人主張の根底は、言ふ迄もなく楊子江方面に於けるその特殊的地位である。これは如何にも頗る根深いものである。由來英人は一六三七年頃已に支那に入り、一七〇〇年には舟山列島方面に活動し、一八四二年には支那に迫つて、上海を開港せしめたのでも、楊子江は自分で開いたものゝやうに思つて居る。そして一八九八年にはマクドナード公使の名を以て支那總理衙門との間に楊子江沿岸不割讓の外交文書を交換し、同年英獨銀行團間に山東及び黃河方面を獨逸鐵道經營の地域とし、楊子江流域を英國の鐵道經營の地域とするの協約を締結し、翌一八九九年露國外相ムラウイヨフ伯、英國大使チャルススコット氏間にも長沙以外を露國鐵道經營區域とし、楊子江を英國鐵道經營區域とし、相犯すなく相妨礙する無きを約束したのである。かくして英國は楊子江方面を以てその勢力範圍としたのであつた。そして十九世紀末に獨露の活動に端を發して勢力範圍主義が支那に適用せられ、讓與論やら、分割論やら矢筈しかつたが、十九世紀より二十世紀に入ると、團匪事件と米國々務卿ジョン、ペイの門戶開放の宣言と熱心な日本の支那援護等で表面は勢力範圍主義は消滅したやうであつたが、實はそうでなく一時潜伏して居たもので、一九

一二年革命以後は再び十九世紀末の如き利権競争が勃起して來た。そして英國はこの間に自然自然に揚子江畔の地盤を固うして來たのであつた。そしてこの 子江の下流のみならず、上流及び南岸方面に地盤を愈々固くして緬甸、印度方面との聯絡を造らんと遠大な雄圖を企圖しつつあるのである。

而して英人が從來如何に揚子江を重視して居るか、將た自己の勢力範圍と信じて居るかは敢て我輩の喁々を要せざる所で、無論英人はこれを重視し、勢力範圍と確信し、東亞に於ける彼等の根據であつてこれによつて極東に一大飛躍を成さんとするのである。

次にこの問題に對する列強の態度に就いては、露國は上記の如く一八九九年揚子江流域を英國の活動と範圍と認めると宣言した。そして英人側では日本も大體之を承認したと主張して居る。之は一九〇一年倫敦であつた日英同盟條約協議の時、日本は朝鮮に於ける日本の利権を主張し、同盟條約そのものが此相互の利益の保護が重なるものであつた。同年十一月林董とランスタウンが會見した時、ランスタウンは朝鮮に於ける日本の利権の非常に大なるものに比すれば、その揚子江に於ける英國の利権の多少尠い感があると謂つた時、林公使は徐ろに揚子江に於ける英國の

利権の莫大なことを説いた程であつた。又た英國が日本の朝鮮滿洲に於ける特殊利権を承認したのも、揚子江に於ける英國の利権の莫大なのを承認したその代償とも云ふべきものだから、日本が今や北方に於ける己れの勢力が確乎として定まつたからとて、南方に於ける英國の優越的地位に彼れ此れ干渉するといふのは餘り不義理で不人情だといふのが英人の日本に對する主張であり思想である。

併し我輩は思ふに英人のこの心配は不必要である。或る一部の者には如何なる議論があるか知らないが、政府も國民の多數も決して揚子江畔の英國の特殊利権を云々するやうな不人情なことはしない。唯英國及び英國人の例の敏腕によつて事業が益々發展してファイースターン、レピエーなども指示して居る南方商業を香港に集中しやうとする政策と相俟つて、兩々相呼應し揚子江流域を最初の英人の考へより廣大にして、南支那全體に特殊利権を確立するに至らば、我が臺灣の對岸福建經營の必要上正當な發展策と扞格を生じ衝突の止むなきに至るといふだけである。問題は揚子江流域の特殊利権その物に非ずしてその範圍の如何に存するのである。然かも臺灣を我が領有とする以上は同盟國たりとし香港より 子江に至る廣大な地域を全然英國に委することは

出来ぬ。こゝに於て難問題が発生するのである。

今は戦争中で萬事中止の姿であるが、戦後は英國が再び活動を開始するに於ては、問題は愈々紛糾を來すのであらう。そしてこの問題が久しく解決されないで日英の衝突を誘ふことになる。前述のランカシヤの排日的分子と相俟つて、こゝに累を同盟國に及ぼすことになるや必然の事である。

三 植民地の排日的氣分

次に吾人の最も注意せねばならぬのは英國自治植民地の排日的態度を取ると同國の外交上に占めんとする地位である。

自治植民地といつても南阿は地境遠隔にして貿易の外言ふ程のことはない、加奈陀も一九〇八年、ルミユ協約で日本移民制限を決定して以來、時々起る微細な迫害位のものである。而して憂ふべきはかの濠洲である。只今では歐洲戦争で日濠間は非常に親密になつて居るが、これが果して戦後までもさうであるかといふと我輩はこれに就て疑はざるを得ない。戦後には戦前の嫉視的

状態に復歸するのではないかと思はざるを得ぬのである。

かゝる嫉視的状态はその根源を白人濠洲政策に發して居る。日本人はこの白人濠洲政策を攪亂するものであるといふのが濠洲人の腦裏を支配して居る思想である。それで彼等は種々の口實を設け何につけ彼につけ日本人を排斥しやうとするのである。即ち白人の移民には何等の教育試験等いふ面倒なことはせず、上陸を許可するに反し日本人の上陸に關しては、嚴密な教育試験を課して、歐洲の一國語の五十語以上を知らねばならぬといひ、加之その歐洲語なるものは移民の選擇ではなく官吏の選擇で、英語の出來さうな者には希臘語を課すといふ有様だから始末に了へぬ。斯くの如き有様で努めて日本人を驅逐することに汲々たるものである。そして濠洲の軍備は如何といふに市民軍は着々完成し、或はキチナー元帥を招いて更に之を訓練し、一九〇九年帝國防備會議で、獨立海軍創設を力説し、さし當り戰艦巡洋艦一隻、装甲巡洋艦三隻、驅逐艦六隻を以て新艦隊を編成する種子を造ることゝした。そして濠洲人のこの軍備は如何なる方針によつて爲したかといふに、これは日本の南下を恐れて爲したといふに至つては如何に彼等が日本を恐れ日本を厭ふて居るか想像するに難くない。何故に濠洲人が日本を排斥するかといふと、彼等は日本が日

露戦争の結果地位が高まつて来て同時に勢力が旭日昇天といふ風になつて来たので蘭領印度、その他植民地を覬覦し、南太平洋の覇權を掌握しやうとするものであるといふことに在る。そしてその濠洲中タ井ンスランド、西濠洲の如き二哩に人口一名の如きは日本人の好個の植民地として睨むで居るといふので、濠洲人の排日思想、恐日思想は全く想像以外で、英領でもなきニユカレドニアに日本人が移住したとかで、早速恐慌を來たすといふことに至つては驚かざるを得ない。併しこれが一片の談柄でなく、眞に日英國交上に累をなす恐れがあるので我輩は深く憂ふるのである。

そして始め英領植民地なるものは全く發言權を有せざるものであつたが、植民地は久しくその状態に満足せず、その形勢は帝國議會に現れ、遂に發言權を有することとなり、更に外交參加權を有するに至り、今回の大戦亂に於ける植民地の努力は、益々其の外交參加權を擴大した。而して植民地の要求により濠洲、加奈陀等に對し英政府は一九一六年十二月戦時内閣會議に政務當時者として參加することを許容した。

而してこの植民地殊に濠洲の外交參加權の擴張は、日英同盟間に累を及ぼす危険があると我輩は思ふのである。それは言ふまでもなくこの濠洲の外交參加權の擴張は、英國をして排日的行動を執らしむる恐れがあるのである。即ち一九一一年日英同盟條約改訂の際第四條に「兩締盟國の一方が第三國と總括的仲裁條約を締結せる場合には本協約は仲裁々判條約の有効に存續する限り右第三國と交戦するの義務を前記締盟國に負はしむる事なかるべき事なり」と規定したのは、英國が有米戦争の場合に責任を避けたものであるが、之は英國国民も同民族の關係から希望して居つたのであるが、之が排日植民地の濠洲人の運動が大いに英國政治家を動かしたものであつた。斯くの如く排日主義の勢力が植民地殊に濠洲の方より英國を左右せんとしつゝある上は日英同盟の妨礙は愈々効を奏してくるかも知れぬ、これまた憂慮する問題の一つであらう。

四 日英同盟の目的の消滅

大體同盟といふものは、自國の力だけではその目的を遂行するに不足であるから、或る程度迄その利害、目的を重くする他國と協同して、その目的に對する妨礙を防止しやうといふものである。然るに今日に於ては日英同盟の敵手となるものを有せざるに至つた。これ吾人の大いに注目

に値する所であらう。

日英同盟といふものは露國を敵手として成立したものである。即ち英國が露國の支那に於て印度に於て南下せんとするを、單獨に遠い本國より大兵を輸送して之と對抗するの不利なることを思ひ、當時日本が滿洲に於て之を争ふて居るので、寧ろ日本と同盟して、萬一にも日露の提携する如きことを破壊し、且つ印度に於て有事の際は、日本が滿洲に於て露國を牽制すると同時に印度國境にも來援せしむるの利益を思ひ、又支那鐵道政策上英國と争ふて居た佛露の勢力を打破する上に於ても、支那保全を主張する日本と協力して之に衝るの利益を思ふたのであつた。これは日露戦争迄続いたが、一九〇四年の英佛協約によつて英佛の接近を見、多少露關係に利する處があり、日露戦後、露國の疲弊に乘じ、一九〇七年印度西藏、阿富汗坦、波斯方面の英露關係を緩和する英露協約成り今日では英露互ひに全然「密接な友邦」となつた。日露關係も、一九〇七年の日露協約に依つて同じく友邦となつた。そこで從來の日英同盟の敵手はなくなつたが、第二の敵手國は出來たかといふと、現今東洋で最も活動して居るのは米獨の二國である。米國に對しては日英の對米政策なるものは何等の主張も利害も一致して居らぬ。それで米國に對しては之を

敵手とは目されぬ。故にその敵手といふのは勿論獨逸である。一九〇七年獨逸が俄然海軍の大擴張をなし、英國海軍をも凌駕せん勢となつたので、英國はその海軍策に大影響を來たした。かゝる有様になつたので日英海上の協定となり、一九一一年英海軍は歐洲に引き上げ、日本海軍が太平洋の防備に當ることになつた。而して獨逸が膠洲灣に據り、南洋に據る以上、前日の露國程ではなくとも一の共同敵手國と見られた。然るに今日では獨逸は膠洲灣を失ひ、南洋も失ひ、東洋に於ける獨逸の勢力は一掃されて、日英同盟の敵國は略々失ふたことになつた。

併し獨逸は今度の戦役後疲勞するであらうが、決してそれに屈するやうなことはない、殊に露國に於て彼得大帝時代から扶植して居る勢力は仲々藐視すべからざるもので、將來は獨逸が苛酷縦横、例の辛辣なる怪腕を揮ひ露が帝制主義なる時は帝制主義に合するやうに、民主政治となれば、そのやうに民間に親獨主義を鼓吹して、政治的自覺もない訓練もない一般露人を動かすことは勿論であらう。けれども之は未來のことだから斷言は出來ぬ、聯合國側でも之に相當な防禦を講ずることだらう。故に之に就て何等の確定した豫言を許さぬ、同時に英露對抗が復活して、英國が日本に依頼しなければならぬやうになるかも知れない。然らば以後の日英同盟の敵手は矢張り